重要考古資料

安芸国分寺跡土坑出土品

－ 451 号土坑出土の法会関係資料集成 －

２０２２

東広島市教育委員会

重要考古資料

安芸国分寺跡土坑出土品

－ 451 号土坑出土の法会関係資料集成 －

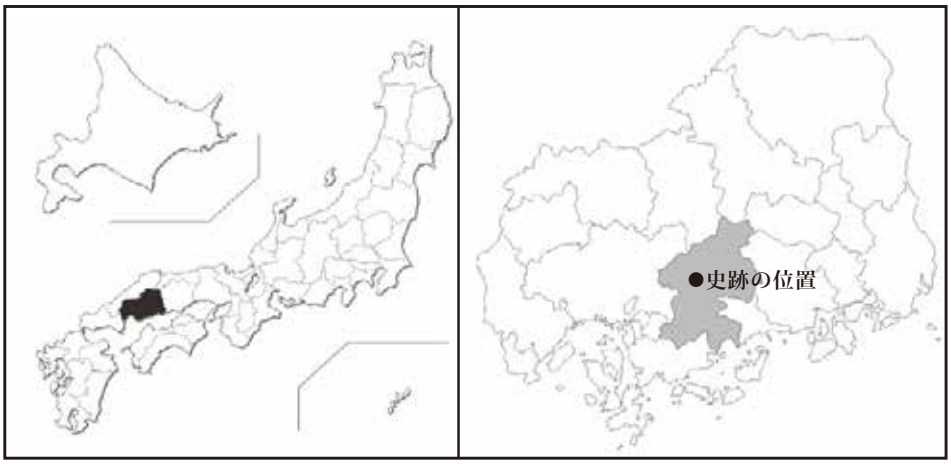
２０２２

東広島市教育委員会

451 号土坑(SK451)出土品

例　　言

1. 本資料集成は、史跡安芸国分寺跡（広島県東広島市西条町吉行 2043 番地外 52 筆）の発掘調査資料のうち、451号土坑（SK451）を中心とした遺構からの出土品（重要考古資料選定物件）について、再整理作業を行った報告書である。既存の報告書等と異なる内容や記述については、本書が優先する。
2. 作業は、文化庁文化財第一課原田昌幸主任文化財調査官の指導のもと妹尾周三（現、廿日市市教育委員会）が中心となり、石井隆博・石垣敏之・藤岡孝司・石井亜希子・竹野菜つみが協力し、執筆・編集は妹尾が行った。
3. 木簡の写真は、独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所（現、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所）に委託し、撮影したものである。
4. 本書に掲載した出土品、また図面・写真等の記録類は、東広島市出土文化財管理センターで保管している。
5. 法量のうち記載のないものは㎝、（　）は現存値、［　］は復元値、残存率の単位は％である。また植物遺存体（自然遺物）の法量は、最大値を記入している。木簡や木器・木製品の法量は、保存処理後の計測値を記載した。
6. 須恵器の凡例は、次のとおりである。
   - 器種分類　A：底部に高台なし。　B：底部に高台あり。　C：口唇部に屈曲あり。
     D：椀形で、底部が丸みを帯びる。
7. 墨書土器の凡例は、次のとおりである。
   - 器種分類　A：底部に高台なし。　B：底部に高台あり。　C：口唇部に屈曲あり。
   - 墨書表記　文字の初めと終わりが不明なものは、文字の前後に「　　」を付けていない。
   - □　　不明文字。
   - ／　　同じ部位（面）に書かれているが、位置が異なる文字。
8. 焼塩土器の凡例は、次のとおりである。
   - 器種分類　A：手捏ねのもの。　B：内面に布目圧痕あり（型作りか）。
9. 本書「Ⅴ.重要考古資料目録」の報告書番号（文献の略記号）は、次のとおりである。
   - 報Ⅳ　　財団法人東広島市教育文化振興事業団『西条町吉行　史跡安芸国分寺跡調査報告書Ⅳ‐第12次・第13次調査の記録‐』2002年
   - 報Ⅴ　　財団法人東広島市教育文化振興事業団『西条町吉行　史跡安芸国分寺跡調査報告書Ⅴ‐第14次～第16次調査の記録‐』2003年
   - 報Ⅷ　　財団法人東広島市教育文化振興事業団『西条町吉行　史跡安芸国分寺跡調査報告書Ⅷ‐第23次～第25次調査の記録‐』2006年
   - 本書　　本報告書（451号土坑出土の法会関係資料集成）



広島県東広島市及び史跡安芸国分寺跡の位置

目　　次

Ⅰ　はじめに …… 1
Ⅱ　安芸国分寺跡と451号土坑の概要 …… 2
1．安芸国分寺跡の概要 …… 2
2．451号土坑の概要 …… 4
Ⅲ　451号土坑出土の遺物 …… 5
1．木　簡 …… 5
2．土　器 …… 6
（1）　須恵器　（2）　土師器
（3）　墨書土器　（4）　焼塩土器
3．木器・木製品 …… 19
（1）　木簡再生品　（2）　糸　巻
（3）　檜　扇　（4）　杓　子
（5）　箸　（6）　物　指
（7）　角　筆　（8）　不明木製品
4．植物遺存体（自然遺物） …… 25
Ⅳ　おわりに …… 26
Ⅴ　重要考古資料目録 …… 28
Ⅵ　451号土坑出土の木簡の釈文（縦書き） …… 46(i)

Ⅰ　はじめに

奈良時代、聖武天皇は、疫病と飢饉や反乱などによる荒廃を憂い、国家の鎮護と安寧を目的として諸国に国分二寺（僧寺・尼寺）の建立を命じた。天平 13（741）年２月 14 日の「国分寺建立の詔」（『類聚三代格』、『続日本紀』は同年３月 24 日）である。

このうち国分僧寺（国分寺）は、四天王の験力によって国土の擁護と除災が成し遂げられるとされる『金光明最勝王経』の理念に基づき「金光明四天王護国之寺」と命名された。護国を祈念するための寺院と位置づけられたといえよう。しかし、この寺院の造営過程はもちろん、創建当初の状況には不明な点が多く、そこで勤修されていた法会も明らかでない。天平９（737）年３月３日の勅（『続日本紀』）や先述の詔などから推定される「大般若会」、また「戒羯磨」（布薩）は知られるが、その他の法会については記録もほとんど伝わっていないのである。

ところが、平成 12（2000）年、東広島市に所在する安芸国分寺旧境内地の東端で複数の土坑が検出された。そして、その中の一つから天平勝宝２（750）年の紀年銘をもった木簡群とともに、僧侶名や「安居」「齋會」「寺前」「佛」と墨書きされた墨書土器など、法会に関する遺物がまとまって出土したのである。この遺構と遺物の概要についてはすでに報告されており（㈶東広島市教育文化振興事業団 2002 ほか）、いくつかの論文にも引用されている。しかし、当時は時間的な制約から出土した遺物、とくに土器類や木器・木製品の接合と図化、また保存処理などの作業が順調に進んでおらず、公表された資料も一部に限られていた。

こうしたなかで本書は、この土坑出土資料が「重要考古資料」に選定されたことを契機として令和２（2020）年度から再整理作業を進め、その結果をまとめたものである。今後、この報告書が本資料の保存と公開・活用に利用されれば幸いである。

第１図　史跡安芸国分寺跡位置図（1：25,000　◎印）

Ⅱ　安芸国分寺跡と 451 号土坑の概要

１．安芸国分寺跡の概要

安芸国分寺跡は、広島県東広島市西条町吉行に所在し、その一画では現在も宗教法人国分寺が法灯を守り続けている。

広島県は、古代には東半分が備後国、西半分は安芸国に分かれており、安芸国分寺跡が所在する東広島市はこの国の中でも南東寄りを占める。市域の中央には周囲を 400 ～ 600mの山々に囲まれた西条盆地（標高 200 ～ 250m）が広がっており、寺院跡はこの盆地の北端近くに位置する。

発掘調査は、昭和７（1932）年に「聖武天皇の玉歯」が埋められていると伝わっていた一辺約６間、高さ約８尺あまりの「塚」を広島県教育委員会が実施したことに始まる（広島県教育委員会 1937）。約６尺の深さから塔心礎と、それを囲む４本の四天柱や側柱の礎石が並ぶ基壇跡が明らかになったことで、昭和 11（1936）年にこの塔跡は史跡指定された（「安藝國分寺塔阯」）。その後、昭和 44（1969）年からの３ヵ年にわたる寺域の遺構確認調査に基づき（広島県教育委員会 1970 ～ 72）、昭和 52（1977）年に「安芸国分寺跡」として名称変更と指定地の拡大が行われた。また、この年から安芸国分尼寺伝承地の発掘調査も実施されたが（広島県教育委員会 1978 ～ 80）、後に調査区の大半は、古代の安芸国分寺旧境内地の一部であることが明らかとなった。

そして、平成に入ると、東広島市教育委員会によって史跡指定地の公有化やその保存と公開活用を目的とした発掘調査が本格化し、平成 14（2002）年には寺域の西側について史跡の追加指定が行われるとともに、平成 23（2011）年まで継続して保存整備事業が実施された。現在はこの一帯が史跡公園として公開活用され、市民の憩いの場ともなっている。

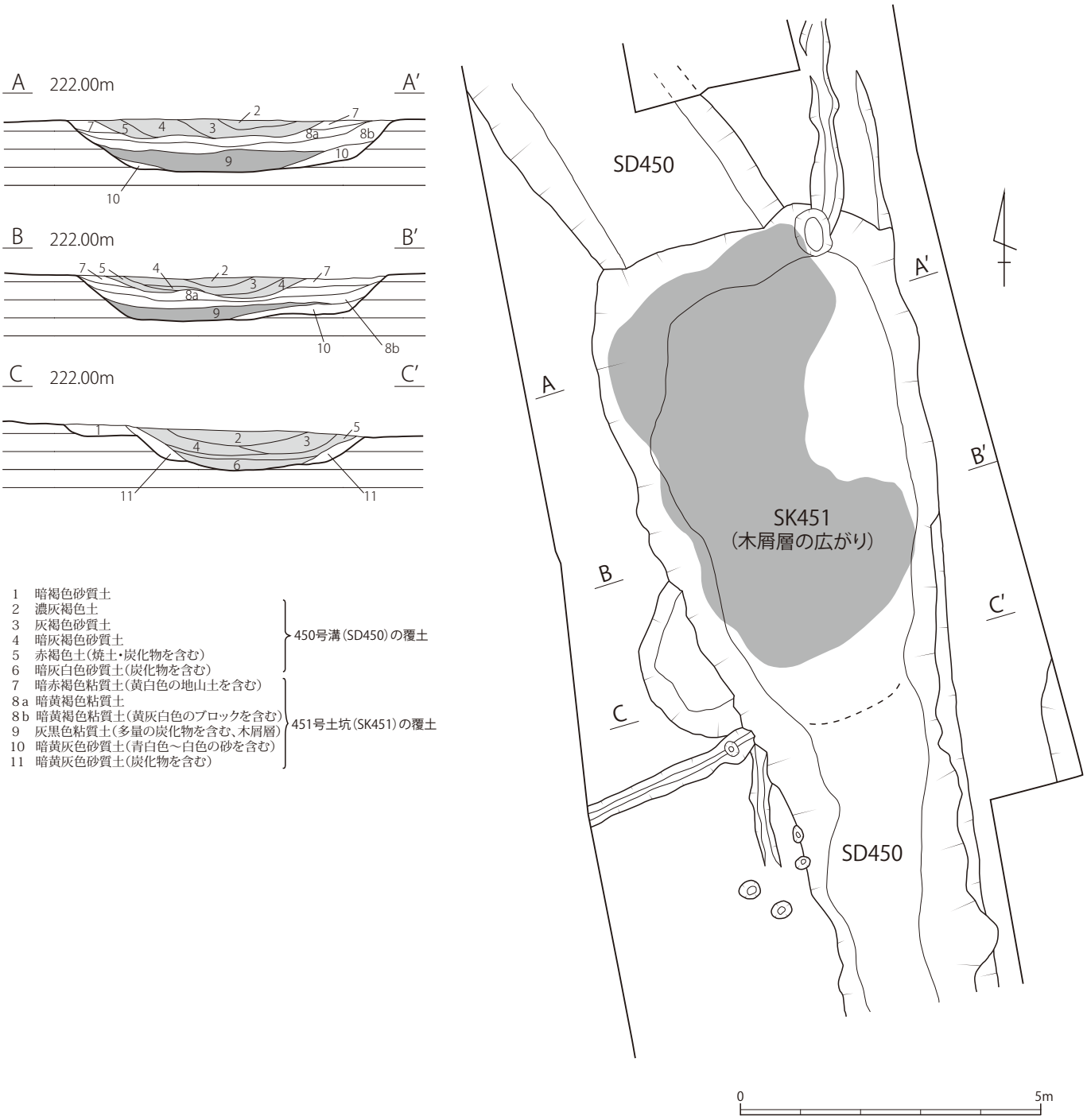
創建当初の安芸国分寺の寺域は、築地塀などの痕跡から南北（奥行き）230m以上、東西（幅）約 270m（二町半）であったことが明らかとなっている。主要伽藍はこの中央に南面した南門・中門・金堂・講堂と軒廊・僧房などの堂舎が南北一直線に並び、回廊は単廊のものが中門と金堂とを結び方形にめぐって

第２図　「聖武帝御陵」図（塔跡）
（『西条町誌』より引用）

第３図　安芸国分寺の遺構略図

いた。いわゆる仏地や僧地と呼ばれるもので、先述の七重塔はこれらよりも少し遅れて回廊の外側、金堂の南西方向に建立されていたと考えられている(藤岡・妹尾 2012)。

主要伽藍の東側には、この寺院を維持管理するための大衆院、北方の僧房東側には木組の井戸を間において板塀で囲まれた一画に国師院(のちの講師院や読師院)などの諸施設が存在していたことが、遺構や墨書土器をはじめとする遺物から推定されている(妹尾 2006)。そして、以下で述べるように、法会に関するさまざまな遺物は、この大衆院の東端、東門に近い東面築地塀跡の内側で検出された451 号土坑(ＳＫ451)から出土した。



第４図　451号土坑実測図（1：100）

２．451 号土坑の概要

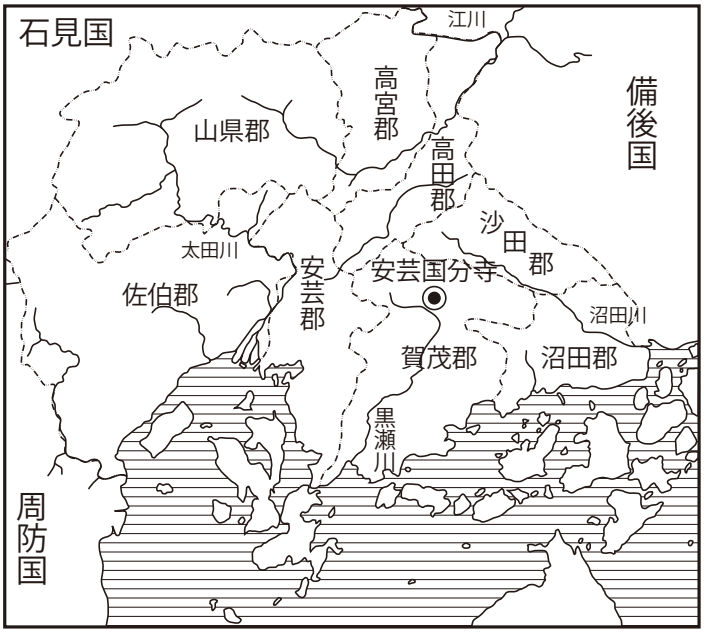
451 号土坑（ＳＫ451）は、平成 12（2000）年に実施された第 12 次調査時点では平面形が楕円形状と考えられていた。しかし、当時は遺構の一部が未調査だったため、その後に補足調査（第 25 次）が行われ、東面築地塀にほぼ併行した南北方向に長い台形状を呈していることが明らかとなった。規模は長さ（南北方向）約 9.0m、幅（東西方向）は北側が約 5.0m、南側が約 3.5mである（㈶東広島市教育文化振興事業団 2006）。

この土坑は、水田の耕作土とその下に広がる床土などを掘り下げた時点で確認された遺構である。深さは検出面から 0.8m前後、中の覆土は上から整地土（上層：７層）、埋戻土（中層：８ａ・８ｂ層）、堆積土（下層：９・10 層）に３大別される。このうち下層は、水分を多く含んだ灰黒色の粘質土（９層：木屑層）と、湧水によって土坑底面に崩落した砂質の壁土（10 層）の上下２層からなり、法会に関する遺物は主に上位の木屑層から出土した。

遺物は、木簡が 82 点（うち削屑 28 点）、土器は 120 点を数える。この内訳は須恵器が 98 点、土師器は６点、焼塩土器は 16 点で、そのなかの須恵器と土師器の一部 42 点にさまざまな墨書きが認められた。また、木器・木製品は 50 点で、これらの他に植物遺体（核・種子・果皮など）や加工痕のある木材片[1]、片端に焼焦痕のある小木類、さらには埋め戻しの段階で混入したと推定される瓦片（丸・平瓦）なども出土している[2]。

ところが、この土坑の覆土は、上層・中層はもちろん下層の一部までも南流する 450 号溝（ＳＤ450）によって掘り下げられ、南側の壁も大きく壊されていた。安芸国分寺跡が所在する西条盆地内には大きな河川は流れていないが、盆地の縁辺部には地下水が豊富に湧き出す谷頭が多くみられ、その一つがこの寺院の東門付近にも存在する。このため、当時もそこには湿地が広がっており、450 号溝はその排水対策として設けられた施設と考えられよう。この溝は築地塀に沿って南流し、それが突き当たる南面築地塀の基壇内には木樋が設置されていた。

なお、450 号溝が掘削されたのは、土坑が埋められた直後の８世紀後半と捉えられ、その後、９世紀前半までは流水があったと考えられる。溝の上層から出土した須恵器の中には、「講院」「読院」「壱院」「大寺」などの墨書が認められた（妹尾 2005）。



第５図　古代の安芸国略図

Ⅲ　451 号土坑出土の遺物

1.木　簡

木簡の内容・解説(木簡の釈文は 41～46(ⅰ～ⅵ)頁、図版 1～3)

451 号土坑から出土した木簡は 82 点(接合後)、このうち削屑は 28 点である。以下、主なものについてその概要を述べよう。

・文書木簡(1～4・32・33)

1 は、天平勝宝 2(750)年 4 月 29 日の紀年銘がある長大な木簡。その内容についてはこれまで、①：佐伯部足嶋が主帳を務める某郡から、安芸国分寺に滞在する国司(目)の経費として送られた品物の送り状、②：国司(目)の意を受けた佐伯部足嶋が作成した寄進状という二つの解釈案が示されてきた。そして、土坑の出土遺物全体からうかがえる性格を勘案すると、後者、すなわち国分寺の法会に係る寄進状の可能性が高いと考えられている(佐竹 2003・2012 ほか)。 この木簡は、表面の両側端に小さく「之」や「秦」などの習書が行われ、その後に上方は刀子状の工具によって縦横方向に細かく刃を入れて裁断し、廃棄されたものである。下方は自然の腐食による変形が著しい。

2 は米の支給、**4** は「共養」(供養)と書かれた記録簡。短冊形の中央に円孔が穿たれている。片方が尖った形状から、杓などの柄として二次利用された可能性もあろう。 **3** は鋪設具類(「薦」「茵」「葆」)を安芸国内の郷単位に割り当てた木簡、二片が接合した。「薦」はマコモやワラを粗く編んで作った筵[3]、「茵」は真綿入りの座具と推定されるが[4]、「葆」については明らかでない[5]。**32・33** もこれらと同様な文書木簡と考えられる。

・荷札木簡(5～19)

5・9・11・16 は「米」、**6** は「葆」、**8** は「簀」、**13** は「坐茵」、**7** は「佐良」(皿)、**18** は「油」の荷札。「米」は供養米、「葆」「簀」「茵」は先に述べた鋪設具であろう。「簀」は葭簀(葦簀)の可能性が推測される[6]。「油」は灯明に用いた菜種油か。**12** は「供料」、**19** は「安居料」と読める。これらが発送された地域の地名を見ると、**5** は「佐伯郡」、**6・7・8・19** は「山方郡」、**9** は「高宮郡」、**10・11・17** は「沙田郡」などと、どれも安芸国内の郡名から書き始められている。しかし、賀茂郡内から発送されたものは **12・15** が「木綿郷」、**13** が「高屋郷」と郷名から書かれており、どれも頭に郡名を欠く。安芸国分寺は賀茂郡内(郷名は不明)に建てられており、同郡からの貢進物には発送地名に郡名がなく、郷のみが書かれたと考えられよう。

なお、**8** の「山方郡宇伎郷」は、『倭名類聚抄』では「宇岐郷」とあり、「山方郡」は「山県郡」と書く。また「高宮郡」はのちの「高田郡」[7]、「沙田郡」は墨書土器にみる「沼田」郡と合わさりのちの「豊田郡」となる。**16** は下端を尖らせた斎串状の形を呈している。

・付札木簡(20～22・35～43)

20 は「廿連」だが、一文字と捉えると「蓮」とも読める。**21** は「小豆」、**22** は「枡子」、すなわち山椒の実。出土した植物遺存体の中にもこの種子が確認される。**36** の「簀竹須」は葭ではなく、竹で編んだ簀であろう。これらの品物には地名が記載されておらず、なかでも蓮や枡子は国分寺に附属して設けられていた「薗院」での栽培が考えられる[8]。貢進物ではないことから、発送地名は書かれていない。

35 も付札と考えられるが「木綿郷」とあり、下端を尖らせた斎串状の形を呈している。下方の文字は「了信」（人名？）であろうか。42・43 は上端を圭頭状に加工され、後者は下端についても尖らせている。

・**封緘木簡**（23・24・44）

23・24 は上部の両側に施された切り込みに綴紐を掛け、その上から前者は「封」、後者は縦二本の墨線を入れることで封印を示す。ともに外面には丁寧なケズリ加工が認められるが、内面は縦方向に裂いただけで加工は施されていない。規格や材質などが類似することから同じ素材を利用した製品と考えられる。44 にも上端にわずかに墨点が残る。23・24 と同様に外面には丁寧なケズリ加工が認められるが、内面は縦方向に裂いただけのもので細かな加工は施されていない。形状や材質などからすると、本来は後述する木簡再生品（第 16 図 4）と一対になり、組み合わさっていた可能性もあろう。

・**題箋木簡**（25）

25 は全体の腐蝕が著しく、題箋部と軸部の接点もなく接合しない。題箋部は 8.6×2.7×0.9 ㎝、軸部径は 1.0 ㎝を測る。墨痕が表裏両面に認められるが、文字はともに判読できない。

・**その他の木簡**

26 は「交易」と書かれており、貢進とは異なった品物の入手方法を知ることができる。45 は檜扇の橋状を呈しており、47 は中央に円孔が穿たれている。48 は上端が斜めに切り落とされ二次的に尖り、49 も上端が尖る。53 は小片だが、片側面にササラ状木製品にみられる連続した切り込み（５個以上）が施され、片面には「野□」と刻書が認められる。

・**削　屑**（55 ～ 82）

削屑は、墨痕は認められるが、大半の文字は釈読ができない。しかし、これらのなかで 55・59・61 は文字と木目（年輪）の方向が 90 度異なることから、横材を利用していると考えられ、帳簿の存在が推定される。55 は「白」、59 は「料」の文字が確認できる。また 57 は「謹白」とあり、内容は明らかでないが文書木簡のやり取りを示すものであろう。

２.土　器

451 号土坑から出土した土器は 120 点で、その内訳は須恵器 98 点、土師器６点、焼塩土器 16 点を数える（墨書が認められる土器の挿図は、須恵器・土師器とは分けてまとめた）。

（１）須恵器（第６～９図１～ 41、第 10 ～ 12 図１～ 57、図版４～８・12 ～ 18）

須恵器は、杯（A・C・E）、蓋杯（B）、小皿、皿（A・B）、盤（B）、壺蓋、高杯、仏鉢、把手付鉢と、９種類の器種が出土している。

・**杯 A**（第６図１、第 10 図１～５）

底部外面に高台をもたない杯で、形状から３種類に分けられるが、どれも蓋は伴わない。底部はヘラ切未調整のものが多く、見込みに仕上げナデが認められる。

A Ⅰ（第６図１）：底部は丸く、口縁部が外湾気味に立ち上がるもの。

A Ⅱ（第 10 図１～４）：口縁部は内湾気味に立ち上がるが、底部は平底または平底気味のもの。2・

３は煤の付着が著しい。灯明皿として使用されたのであろう。

ＡⅢ（第 10 図５）：底部が丸みを帯びるもの。外面にはロクロナデの痕跡が明瞭に残る。

・蓋杯Ｂ（第６～８図２～ 34、第 10・11 図６～ 43）

杯蓋は口縁部内面にかえりがなく、天井部外面につまみが付くもの。３種類に分けられるが、内面に墨痕や研磨痕が認められるものが多い。硯として利用されたのであろう(9)。杯身は底部外面に貼付高台をもつもので、６種類に分けられる。

杯Ｂ蓋Ⅰ（第６図２～５・７～10、第７図 15・16・19、第 10 図７～10）：天井部は扁平な形状で、口縁端部が下方に強く折れ曲がる。つまみは端正な宝珠形で、内面天井部に仕上げナデがある。降灰が著しく褐色気味で、重ね焼き痕跡が明瞭に見られるものが多い。

杯ＢⅠ（第８図 27・30・32、第 10 図 23 ～第 11 図 36・38）：口縁部は緩やかに外上方に立ち上がるもので、貼付高台は強いナデによって底面が窪む。また高台下端が膨らむために多くは内端面で接地する。見込みに仕上げナデを施すが、底部外面はヘラ切り未調整。降灰が著しく、褐色気味のものが多い。

杯Ｂ蓋Ⅱ（第６図 11 ～第７図 13・14・17、第 10 図 17 ～ 22）：天井部は扁平なものと傘状に膨らむものがある。上面は平らで途中から湾曲し、口縁部は下方に強く折れ曲がる。つまみは扁平なボタン状で、内面天井部に仕上げナデを施すものが多い。

杯ＢⅡ（第７図 24、第８図 25・26・28・29、第 11 図 41・42）：口縁部は外上方に立ち上がり、底部との境界付近に段もしくは稜線がめぐる。貼付高台は断面が台形状や「コ」字状を呈している。見込みに仕上げナデを施すが、底部外面はヘラ切り未調整。

杯Ｂ蓋Ⅲ（第６図６・第７図 18・20 ～ 23、第 10 図６・11 ～ 16）：天井部は緩やかに膨らむ傘状のもので、強く折れ曲がった口縁部の外面には凹線状の窪みが認められるものが多い。つまみは宝珠形を呈している。

杯ＢⅢ（第８図 33・34、第 11 図 39・40）：口縁部は外上方に立ち上がり、貼付高台は断面が台形状や「コ」字状を呈している。底部外面はヘラ切り未調整。

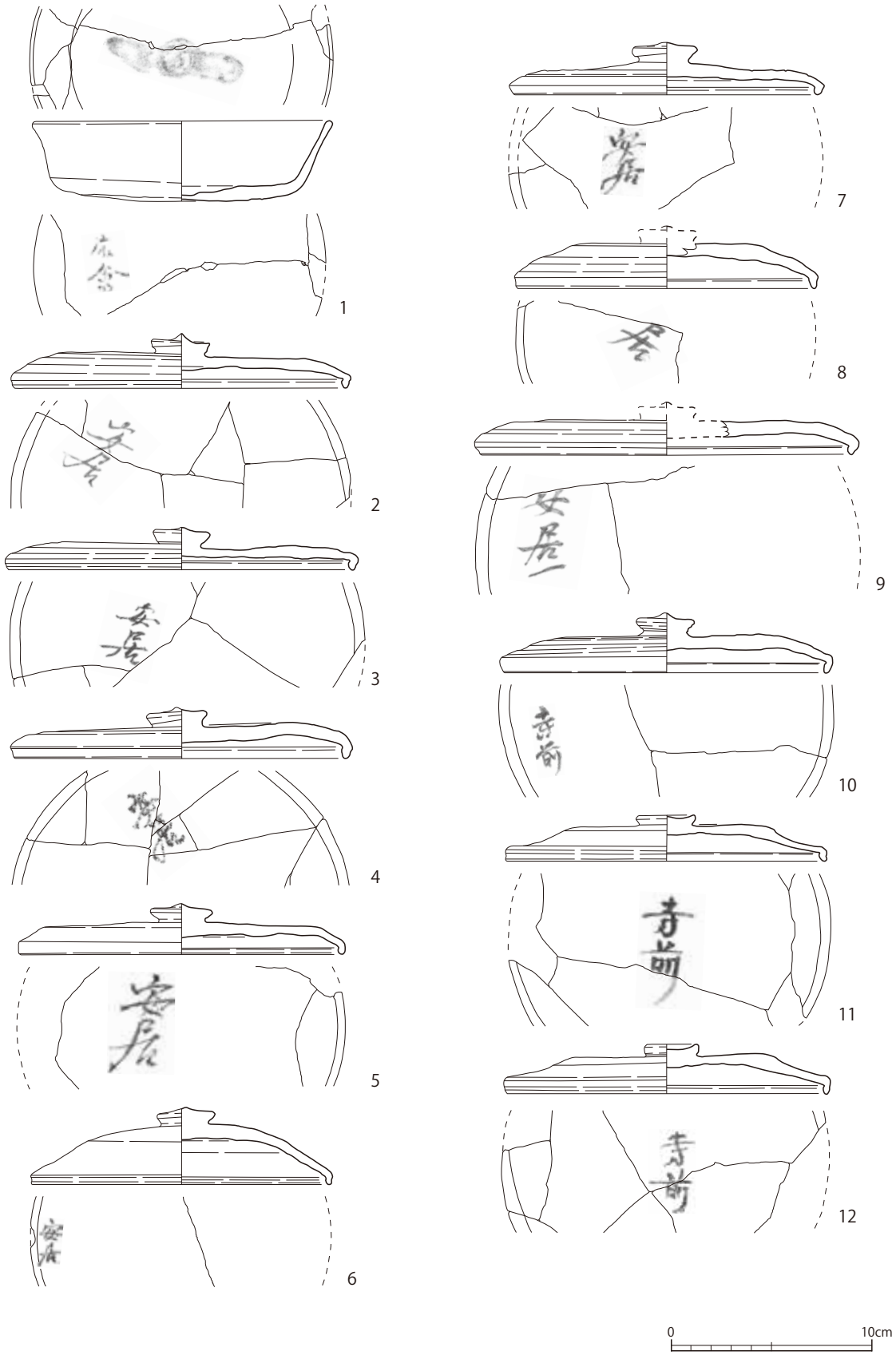
杯ＢⅣ（第 11 図 31）：形態は杯ＢⅠに類似するが、高台内部の底部が丸みをもち、不定方向のケズリを施す。生産地は明らかでないが、特徴的な器形や胎土、また器面調整などからすると、安芸地域以外からの搬入品と推定される。

杯ＢⅤ（第 11 図 37）：口縁部内面に凹線状の窪みをめぐらせ、貼付高台は内側に張り出すとともに、底部外面に不定方向のケズリを施すものである。

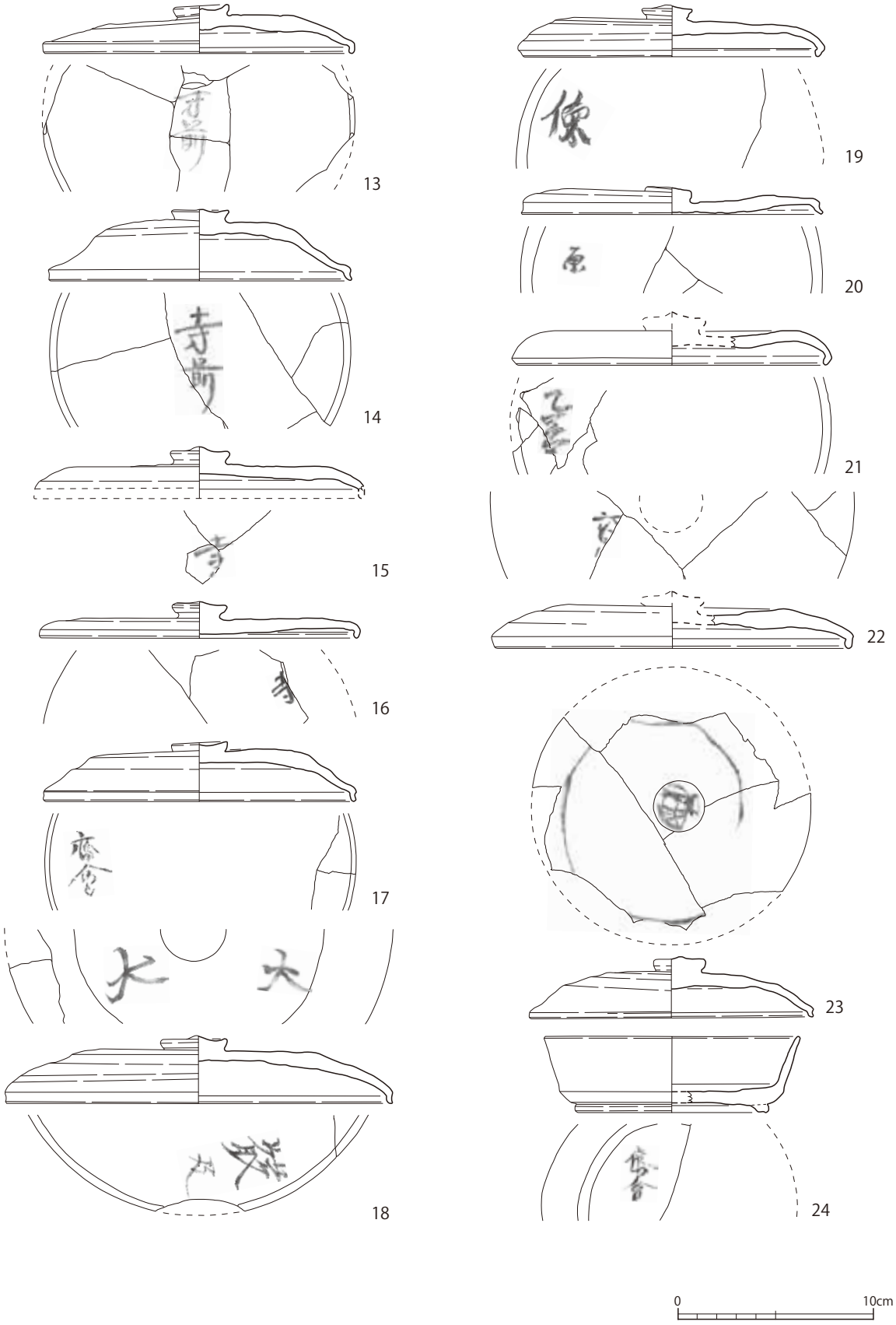
杯ＢⅥ（第 11 図 43）：口縁部は外上方に立ち上がる大形品だが、貼付高台は台形状を呈し、底部外面はヘラ切り未調整のものである。胎土は白色気味で、胎土に特徴的な墨飛び文様が認められることから、備前南部地域産の可能性が考えられる。

・杯Ｃ（第８図 35、第 11 図 44・45）

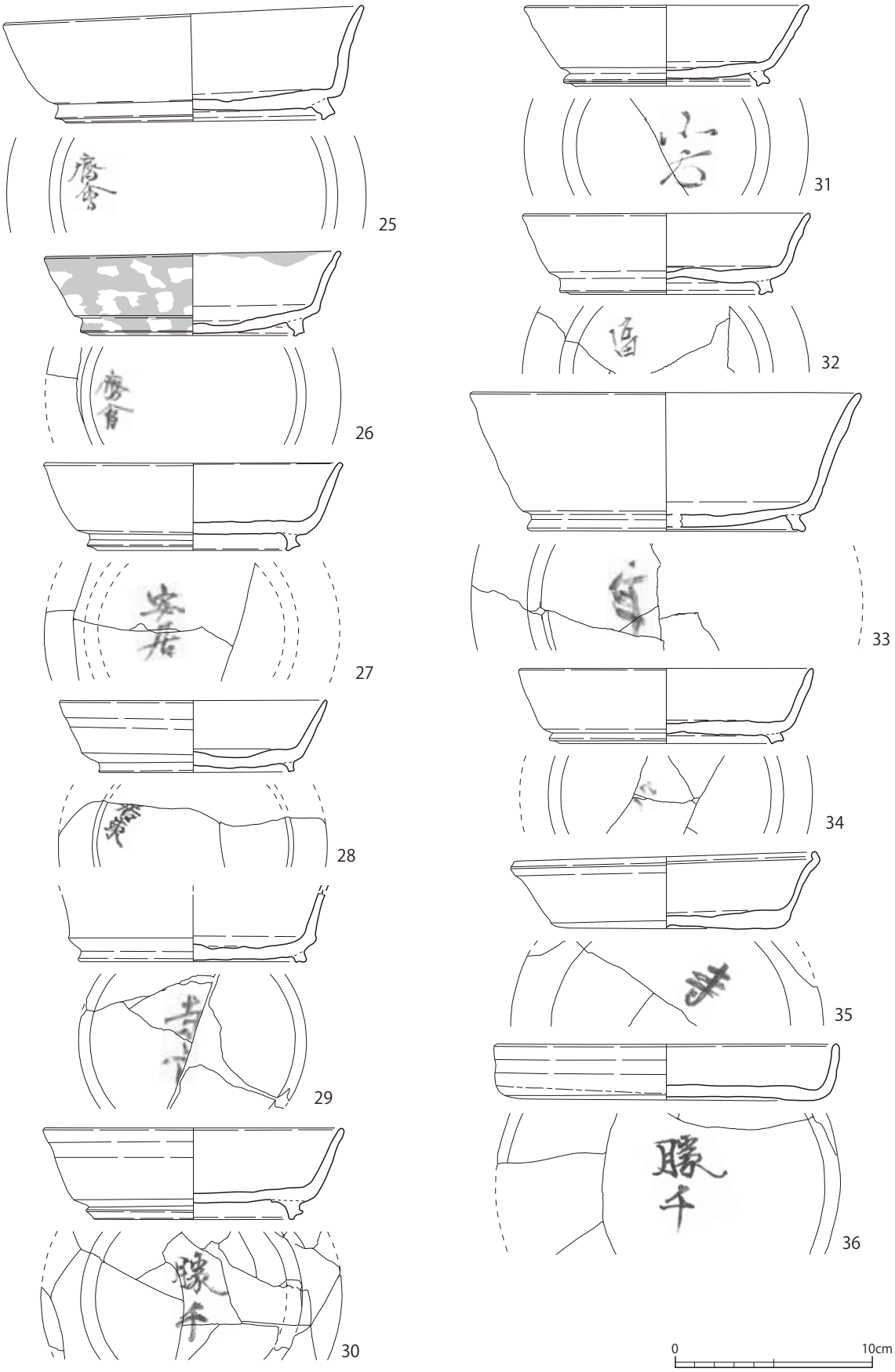
体部は外上方に湾曲してのび、口唇部が屈曲し内傾する。底部との境界に弱い稜線がめぐり、底部は丸みを帯びる。底部外面はヘラ切り未調整。



第６図　墨書土器実測図１（１：３）



第７図　墨書土器実測図２（１：３）



第８図　墨書土器実測図3（1：3）

・杯D（第 11 図 46）

椀状を呈するもの。口縁部は湾曲気味に立ち上がり、底部は丸みを帯びているが、円盤貼付の痕跡が段状に残る。器面の大半は黒色土器のような色調である。

・小皿（第 11 図 47）

口縁部は外上方に立ち上がり、底部は平底、底部外面はヘラ切り未調整。内外面ともに煤の付着が著しく、芯痕跡が明瞭に残る。小形の灯明皿。

・皿A（第８図 36・第９図 37、第 12 図 48・49）

口縁部径に比べて器高が著しく低く、底部外面に高台をもたないもの。２種類に分けられる。

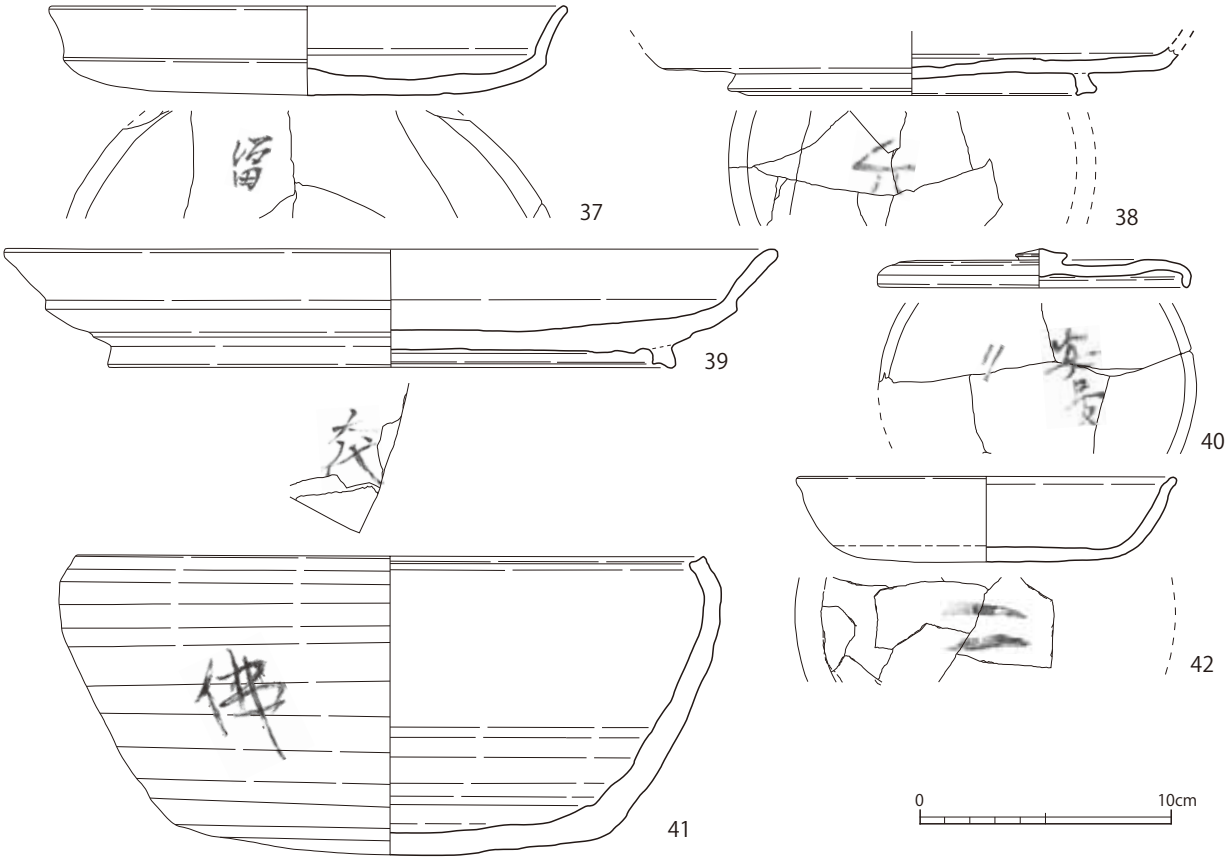
ＡⅠ（第８図 36）：口縁部は直立し、底部は平底。底部外面に不定方向のケズリを施す。

ＡⅡ（第９図37、第12図48・49）：口縁部は外湾して上方にのび、稜線を境に底部が丸みを帯びる。見込みに仕上げナデ、底部外面に不定方向のケズリを施す。

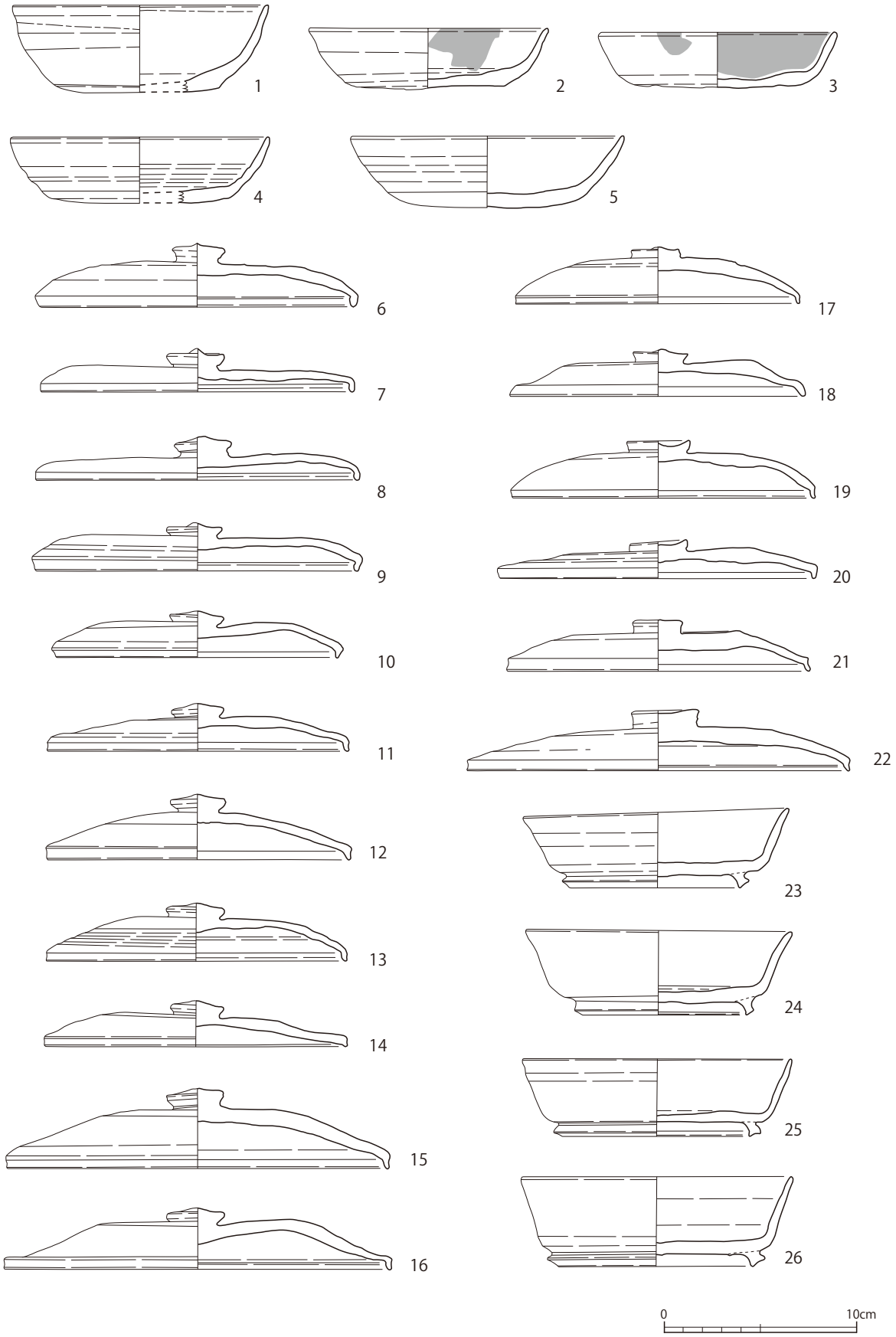
・皿B（第９図 38、第 12 図 50・51）

皿Ａと同様な器形だが、底部外面に貼付高台をもつもの。２種類に分けられる。

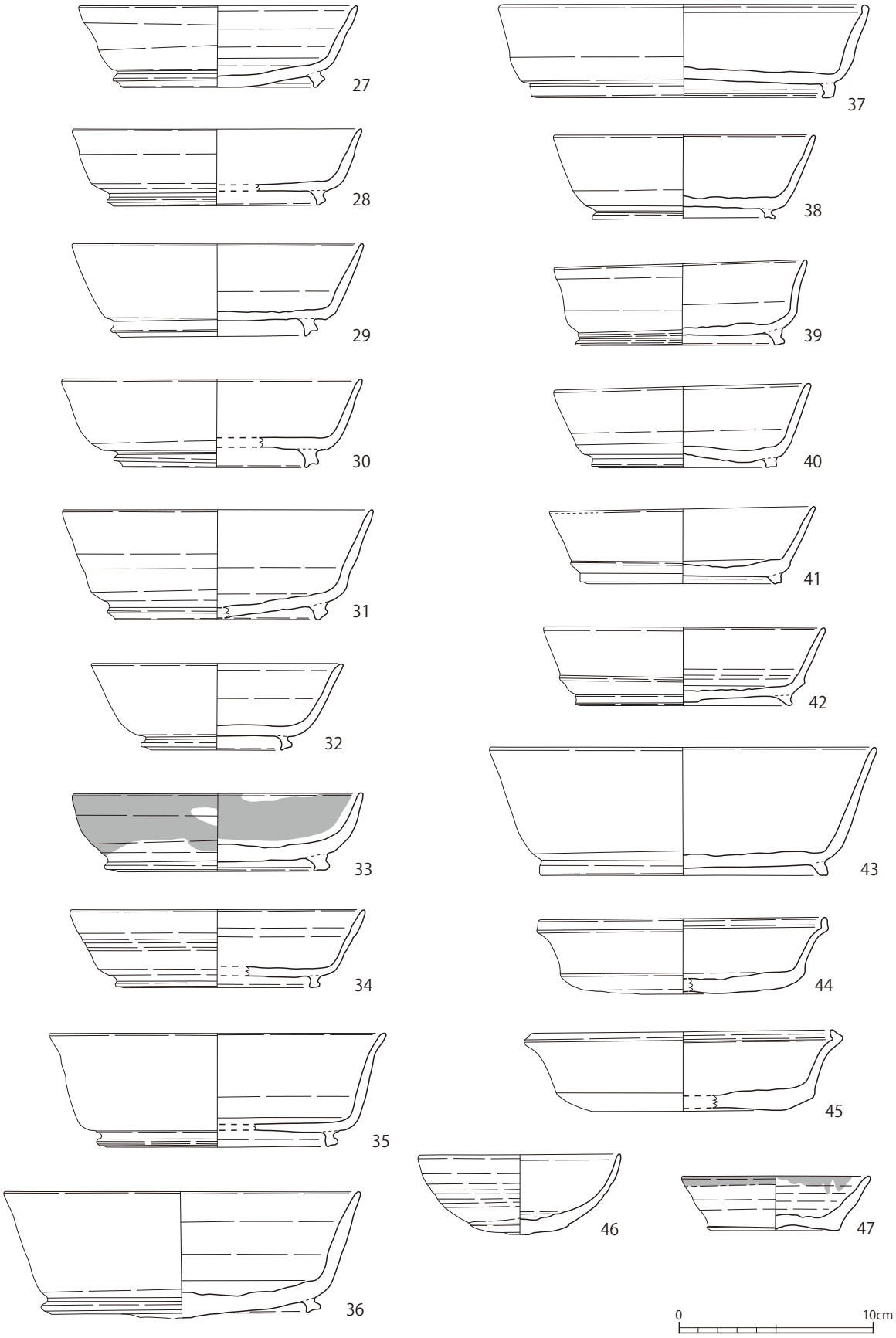
ＢⅠ(第９図 38、第 12 図 50・51）：口縁部は外傾して上方にのびるが、底部は平たく、高台径は底部径よりも一回り小さい。50 の皿部はつくりが杯Ｂ蓋Ⅱに類似する。見込みに仕上げナデ、底部外面はヘラ切り未調整。



第９図　墨書土器実測図４（1：3）



第 10 図　須恵器実測図 1（1：3）

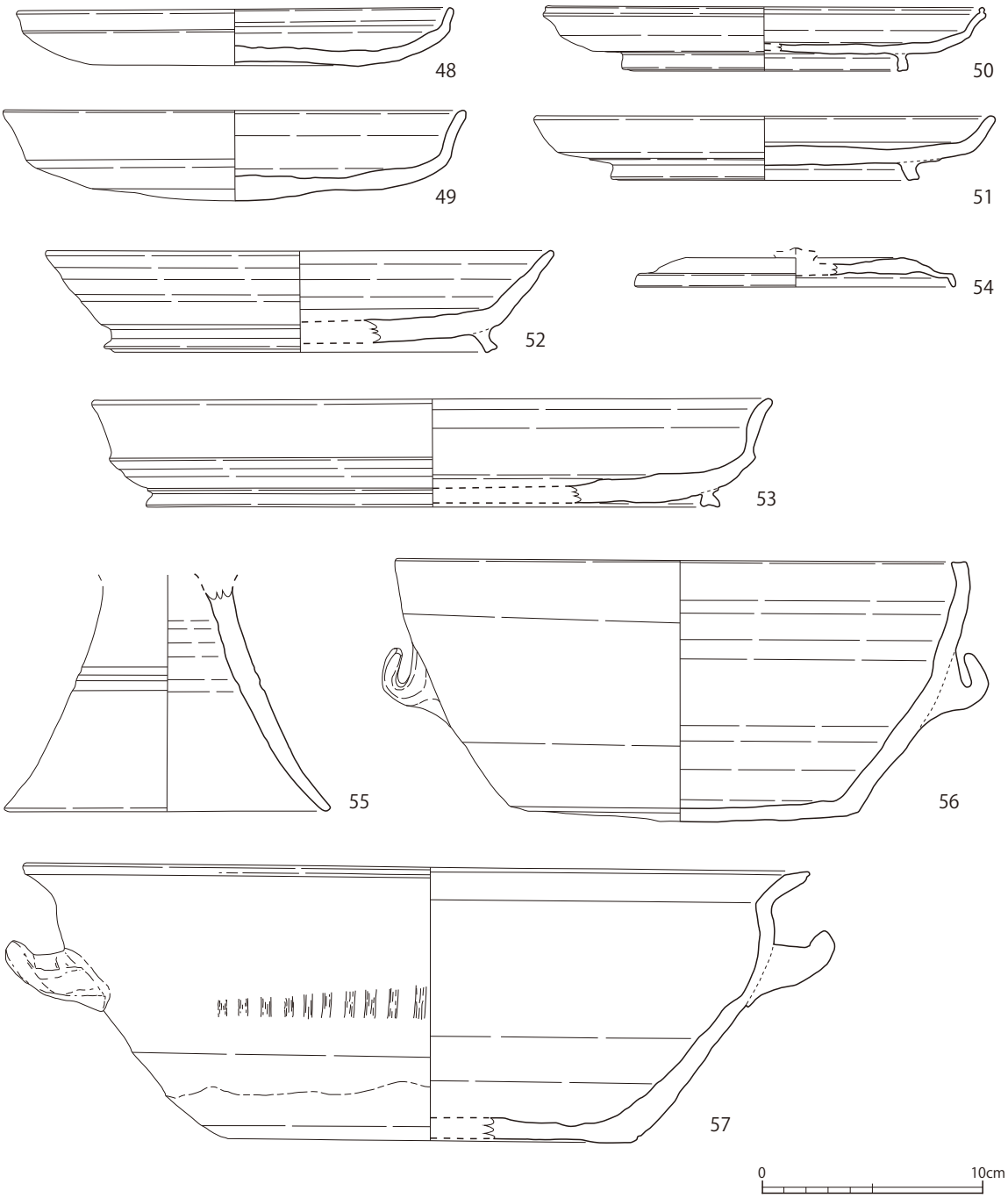


第 11 図　須恵器実測図２（1：3）

B II（第 12 図 52）：口縁部は外上方に大きく開き、底部との境界に弱い稜線がめぐる。見込みに仕上げナデが認められる。

・盤B（第 9 図 39、第 12 図 53）

皿のうち、口縁部径が 30 ㎝以上の大形品を盤と分類した。口縁部は 39 が外上方に大きく開き、53 は外湾気味に上方にのびるが、ともに底部との境界に明瞭な稜線がめぐる。底部には貼付高台をもち、見込みに仕上げナデを施す。



第 12 図　須恵器実測図 3（1：3）

・**壺蓋**(第９図 40、第 12 図 54)

器形や焼成・胎土からすると、**40** は杯Ｂ蓋Ⅰ、**54** は杯Ｂ蓋Ⅱの小形品と考えられる。また後者は転用硯である。

・**高杯**(第 12 図 55)

脚柱部の破片。安芸地域では、この時期の高杯は出土例に乏しいため、杯部の形状は明らかでない。脚端はラッパ状に開き、端部は丸く収める。脚部中央に２条の凹線がめぐる。

・**仏鉢**(第９図 41)

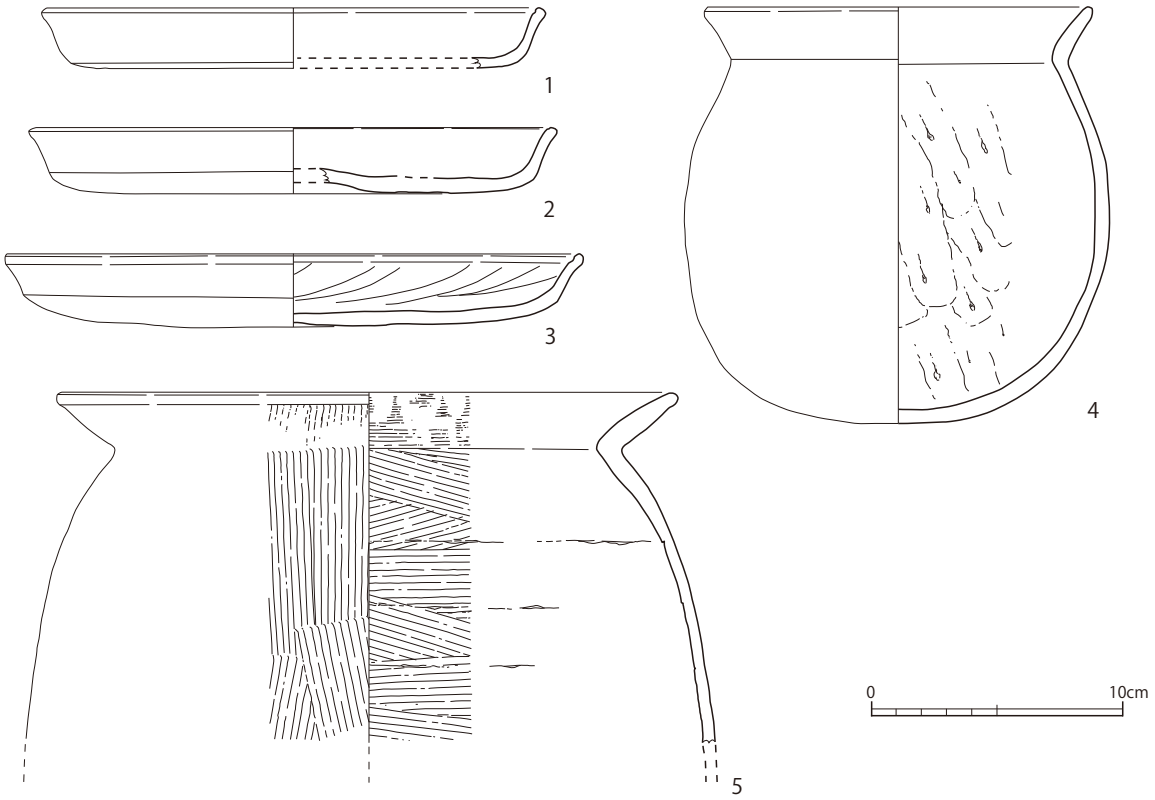
ボール状をなした大形の鉢。口縁部は緩やかに内湾する。底部は平底気味だが丸みを帯び、安定性に欠ける。見込みに仕上げナデ、底部外面には不定方向のケズリが認められる。

・**把手付鉢**(第 12 図 56・57)

牛角状の把手を左右に一対もった大形の鉢。**56** は外上方にのびる体部から口縁部が内湾気味に立ち上がるもので、底部は中央部分が若干膨らむ。**57** は大きく外方に広がる体部から頸部が内湾気味に立ち上がるが、口縁部は反転して強く外反する。把手が付く位置の内面には指頭圧痕が著しい。見込みに仕上げナデ、底部外面は仕上げナデを施す。

（２）**土師器**(第９図 42、第 13 図１～５、図版８・18)

土師器は杯、皿、甕の３種類で、個体数も少ない。



第 13 図　土師器実測図（1：3）

・**杯**（第９図 42）

口縁部はヨコナデによって外上方に折れ曲がり、底部は平底気味だが体部との境界付近は丸みをもつ。型作り。底部外面には成形時に付着した著しい指頭圧痕が残る。胎土は精良で、畿内産の可能性が高い。

・**皿**（第 13 図１～３）

口縁部は外湾気味に外上方にのびるもので、**1**・**3** は口唇部内面に沈線１条、後者の内面には粗い放射状の暗文が認められる。型作り。底部外面には成形時に付着した著しい指頭圧痕が残る。胎土は精良で、ともに畿内産の可能性が高い。

・**甕**（第 13 図４・５）

４は小形品、５は大形品である。前者は口縁部がヨコナデ、体部は外面ナデで内面がヘラケズリ、内外面ともに煤の付着が著しい。後者は内外面ともにハケで、内外面ともに煤が認められる。

（３）**墨書土器**（第６～９図１～ 42、図版８～ 11）

451 号土坑から出土した墨書土器は 42 点、このうち土師器は１点で他はすべて須恵器である。土器自体の概要については須恵器・土師器ともに前項にまとめたので、ここでは墨書について述べよう。

・**「安居」**（第６図２～９、第８図 27・28、第９図 40）

2～**7**・**27** と７点出土したが、この他に **8** は「□居」、**9** は「安居一」、**28** は「□居東」、**40** は「安居／二」と書かれたものがあり、その合計は 11 点を数える。このうち **6** は杯Ｂ蓋Ⅲで書体も特異だが、これ以外はすべて杯Ｂ蓋Ⅰで書体も類似する。また後者を模倣した壺蓋 **40** も文字は似る。**2**～**9** は内面天井部、**27** は杯ＢⅠの底部高台内、**28** は杯ＢⅡの底部高台内に書かれている。なお、「安居」に続く「一」「東」「二」が何を表しているかは不明。

・**「寺前」**（第６・７図 10 ～ 15、第８図 29）

10 ～ **14**、**29** と６点出土したが、この他に **15** の「寺□」も墨痕から「寺前」の可能性が高い。このうち **10** は杯Ｂ蓋Ⅰで書体も特異だが、これ以外は杯Ｂ蓋Ⅱと杯ＢⅡで書体も類似する。その位置は **10** ～ **15** が天井部内面、**29** は底部高台内である。

・**「齋會」**（第６図１、第７図 17・24、第８図 25・26）

５点出土。**1** は杯ＡⅠだが、**17** は杯Ｂ蓋Ⅱ、**24**～**26** は杯ＢⅡである。また **1** は見込みに太く「一」とあるが、これ以外は「寺前」と同じ器種に書かれていることに注目したい。**1** は底部外面、**17** は天井部内面、**24** ～ **26** は底部高台内に書かれている。

・**「寺」**（第７図 16、第８図 35）

２点出土。文字は **16** が杯Ｂ蓋Ⅰの天井部内面、**35** は杯Ｃの底部外面に書かれている。

・**「勝千」**（第８図 30・36）

僧侶の名前と推測される。２点出土しており、文字は **30** が杯ＢⅠの底部高台内、**36** は皿ＡⅠの底部外面に書かれている。

・**「沼田」**（第８図 32、第９図 37）

安芸国の中に存在した郡名と考えられる。のちには木簡の **10**・**11**・**17** にみる「沙田郡」と合併し

て「豊田郡」となる。須恵器の生産地。２点出土しており、文字は **32** が杯ＢⅠの底部高台内、**37** は皿ＡⅡの底部外面に書かれている。

・**「大」「大」、「厳及」**（第７図 18）

１点出土。内面に書かれた「厳及」は、先の「勝千」と同じく僧侶の名前であろう。文字の位置は杯Ｂ蓋Ⅲの天井部内面だが、外面に書かれた「大」「大」については不明。

・**「像」**（第７図 19）

１点出土。仏像の意味であろうか。文字は杯Ｂ蓋Ⅰの天井部内面に書かれている。

・**「原」**（第７図 20）

１点出土。賀茂郡内の郷名とも考えられ、木簡の **14** にみる「原里」との関係がうかがわれよう。文字は杯Ｂ蓋Ⅲの天井部内面に書かれている。

・**「乙万呂」**（第７図 21）

１点出土。人名と考えられ、文字は杯Ｂ蓋Ⅲの天井部内面に書かれている。

・**「小方」**（第８図 31）

１点出土。文字の意味は不明だが、杯ＢⅣの底部高台内に書かれている。

・**「允」**（第９図 38）

１点出土。文字の意味は不明だが、皿ＢⅠの底部高台内に書かれている。

・**「大代」**（第９図 39）

１点出土。文字の意味は不明だが、盤Ｂの底部高台内に書かれている。

・**「佛」**（第９図 41）

１点出土。文字は体部中央の外面に書かれている。

・**「二」**（第９図 42）

１点出土。唯一の土師器で、文字は杯の底部外面に書かれている。

・**釈読不明の文字**（第７図 22・23、第８図 33・34）

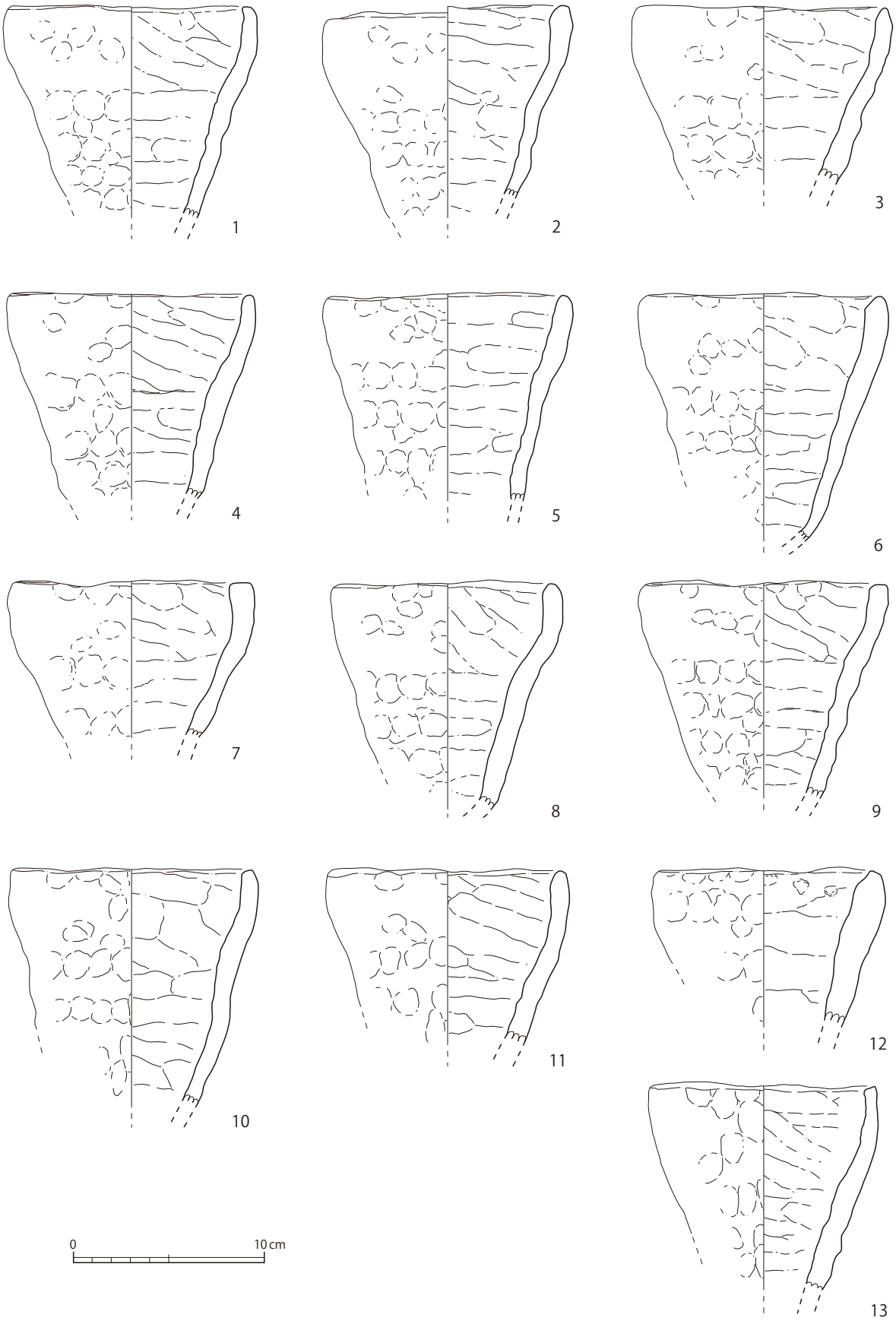
４点出土。いずれも墨痕は認められるが文字は明らかでない。なお、**23** はつまみの上に記号または絵、天井部外面に螺旋状の墨線が施されている。

（４）**焼塩土器**（第 14・15 図１～ 16、図版 19・20）

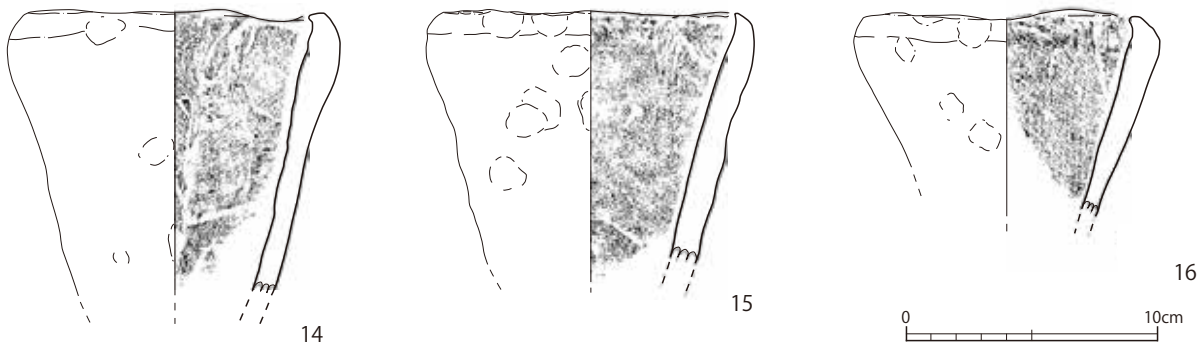
焼塩土器は、既報告書では製塩土器と分類されている。しかし、土器自体が二次焼成を受けており、しかも高温と被熱によって器面がガラス化し、自然釉の付着と降灰が認められるものが多いことから焼塩土器とした。吸湿が速くもろい粒塩を三角錐状の形に整えて一定期間（法会の間）、崩れないように再加熱し固めたのであろう。焼塩は斎会などに調味料として使われるとともに、仏法僧への供献品でもあったと考えられる。

・**焼塩土器Ａ**（第 14 図１～ 13）

13 点出土。口縁部径 10 ～14 ㎝、推定器高 12 ～ 14 ㎝程度のもの。固形塩を三角錐の形を壊さずに取り出しために人為的に打ち割られたようで、破片は細かく底部も欠損する。口縁部はキャリパー状に膨らみ、器壁が厚いものが多い。外面は指頭圧痕、内面にはユビナデが顕著で凹凸が著しい。



第 14 図　焼塩土器実測図 1（1：3）



第 15 図　焼塩土器実測図２（1：3）

・焼塩土器Ｂ（第 15 図 14 ～16）

３点出土。口縁部径 11 ～14 ㎝、推定器高 12 ～14 ㎝程度。器形は焼塩土器Ａと類似し、破片は細かく底部も欠損する。口縁端部の器壁はつまみ上げによって薄く、内側に折れ曲がる。外面は指頭圧痕が顕著だが、内面には細かな布目圧痕が認められる。型作りの可能性が高い。

３．木器・木製品

451 号土坑から出土した木器・木製品は 50 点である。またこの他に片端に焼焦げ痕が認められる小木類も出土している。以下では、これらを木簡再生品、糸巻、檜扇、杓子、箸、物指、角筆と不明木製品に分けて説明しよう。

（１）木簡再生品（第 16 図１～４、図版 20）

４点出土。木簡再生品は、既報告書などにおいては木簡形と分類されたものである。**1** ～ **3** は上下両端の切り込みから木簡に見えるが、墨痕は確認できない。貢進された品物の付札木簡を再利用する目的で、両面にカットグラス状やハギトリ状のケズリなどの二次整形が行われたと考えられる。**4** は外面に丁寧なケズリ加工が認められるが、内面は縦方向に裂いただけで明瞭な加工は行われていない。木簡の項目でも述べたように、形状や材質などから本来は封緘木簡の一部で、木簡 **44** と組み合わさっていたことが推定される。

（２）糸　巻（第 16 図５・６、図版 20）

糸巻は部材で、枠木を固定した横木が２点出土。板の中央部分を幅広く残し、両側を棒状に削り出して枝部をつくる。**5** の相欠き仕口のかみ合わせ部分には、中央に鼠刃錐による細かな軸孔が認められるが、**6** は軸孔がなく枝部も太いことから未製品の可能性が高い。

（３）檜　扇（第 16 図７～13、図版 20・21）

７点出土。糸柾ヒノキの薄板を綴合わせて扇に仕上げたもの。**7** は基部の破片で、橋５枚が残る。木製の要で綴じられ、その頭部はリベット状に削り出して丸棒状につくる。橋の両側には２カ所づつ切り込みがある。**8** ～ **13** は分解した扇の橋。要孔と綴紐孔の位置は少しずつ異なるが、同一個体の可能性が高い。

（４）杓　子（第 16・17 図 14 ～ 16、図版 21）

３点出土。いわゆる「しゃもじ形」を呈したもの。**14** は柄の基部を膨らませ、先端を圭頭状に弱く尖らせている。全体的に劣化が著しい。**15** は身が長く、先端は隅丸方形状をなす。また **16** は柄の幅に比べて身の幅が細く、片面は緩い弧状に削り出すが、ともに柄の基部は欠損する。

（5）**箸**（第 17 図 17 ～ 33、図版 21・22）

17 本出土。これらは最長が **17** の 36.6 ㎝、最短が **33** の 14.5 ㎝と不揃いで、断面形状も面取り状の加工によって円形、楕円形、方形と一定していない。ここではすべてを箸と分類したが、古代の箸は 7 寸（約 21 ㎝）程度のものが一般的であることから、それ以上や以下のものについては法会に出仕した僧侶の人数を確認するための「籌」であった可能性が考えられよう。

（6）**物　指**（第 17・18 図 34・35、図版 22）

２点出土。ヒノキの板材に刻線を入れたもの。**34** は細い板材の片面に刻線を入れている。刻線の間隔は 1.6 ～ 2.0 ㎝とまちまちで、片端に焼焦げ痕がみられる。**35** は粗く削られた施した板材の両面に刻線が施され、片側縁にも切り込みがある。刻線の間隔は 3.0 ～ 3.5 ㎝だが、経紙などに罫線を引くための道具と推測される。

（7）**角　筆**（第 18 図 36 ～ 41、図版 22）

６点出土。長さはまちまちで、断面形状も丸形、方形、不定形だが、片方の先端が鋭く尖った鉛筆状のもの。経典類に読み仮名や句読点などの符号を書き込むための筆記用具であろう。一部の先端には使用痕が認められる。

（8）**不明木製品**（第 18・19 図 42 ～ 50、図版 22）

形状から用途が推測できるものもあるが、ここではそれらも含めて不明木製品とした。

・**鳥形木製品**（第 18 図 42）

１点出土。木片を加工したもの。頭から首にかけてを削り出し、翼と尾羽は段を設けることで表現するが、尾部は欠損。側面観を重視して作られている。

・**斎串状木製品**（第 18 図 43）

１点出土。上下両端が尖るが、とくに下端が鋭い。表裏両面には丁寧な加工を施す。

・**ササラ状木製品**（第 18 図 44）

１点出土。薄く細長い木片の片面に鋸歯状の切り込みを施したもの。切り込みは 7 カ所。表面は上方からのハギトリ状のケズリが認められ、上下両端は薄く削り出す。

・**箆**（第 18 図 45・46）

２点出土。**45** は薄い木片を利用したもので、先端に向かうに従って細くなり、端部は丸みを帯び尖る。基部は弓状に曲がり、先を斜めに削り落とす。**46** は先端を丁寧に削り、端部を丸くおさめる。

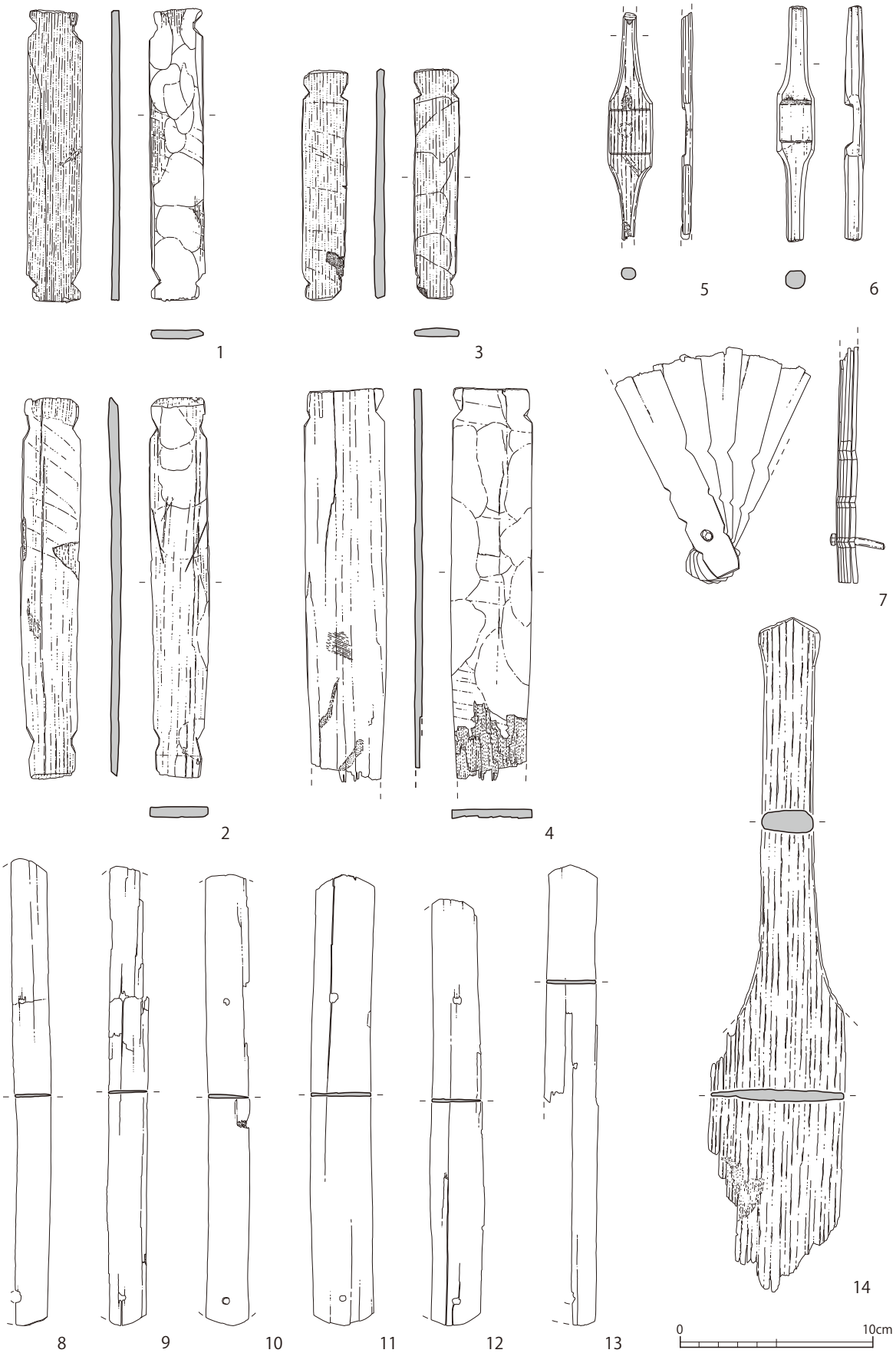
基部は斜めに切り落とし、断面は長方形に仕上げる。

・**髪の留針**（第 18 図 47・48）

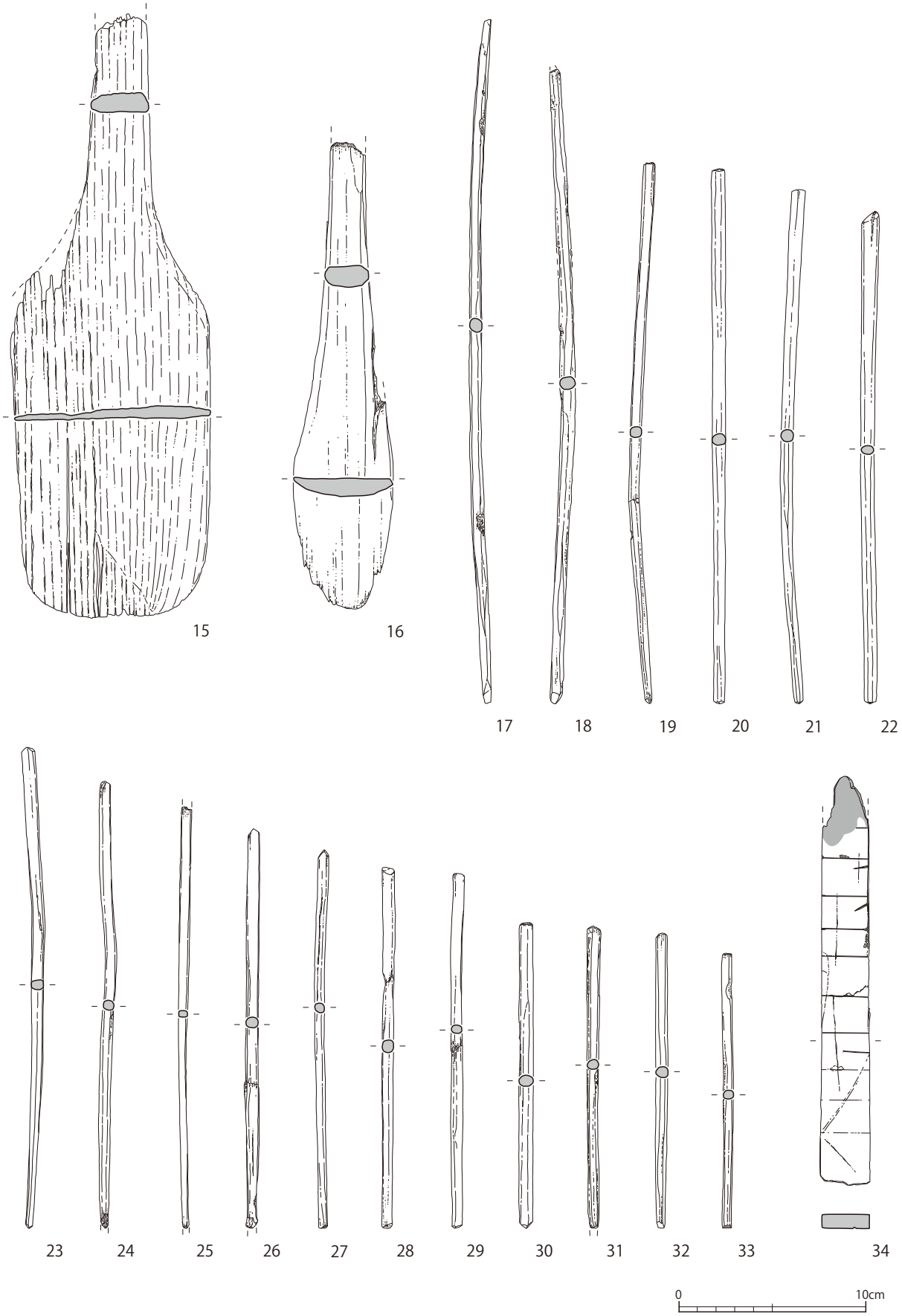
２点出土。頸部を鋲頭状に削り出すが、上端は **47** が平坦、**48** は圭頭形に整えている。先端はともに欠損する。

・**剣形木製品**（第 19 図 49・50）

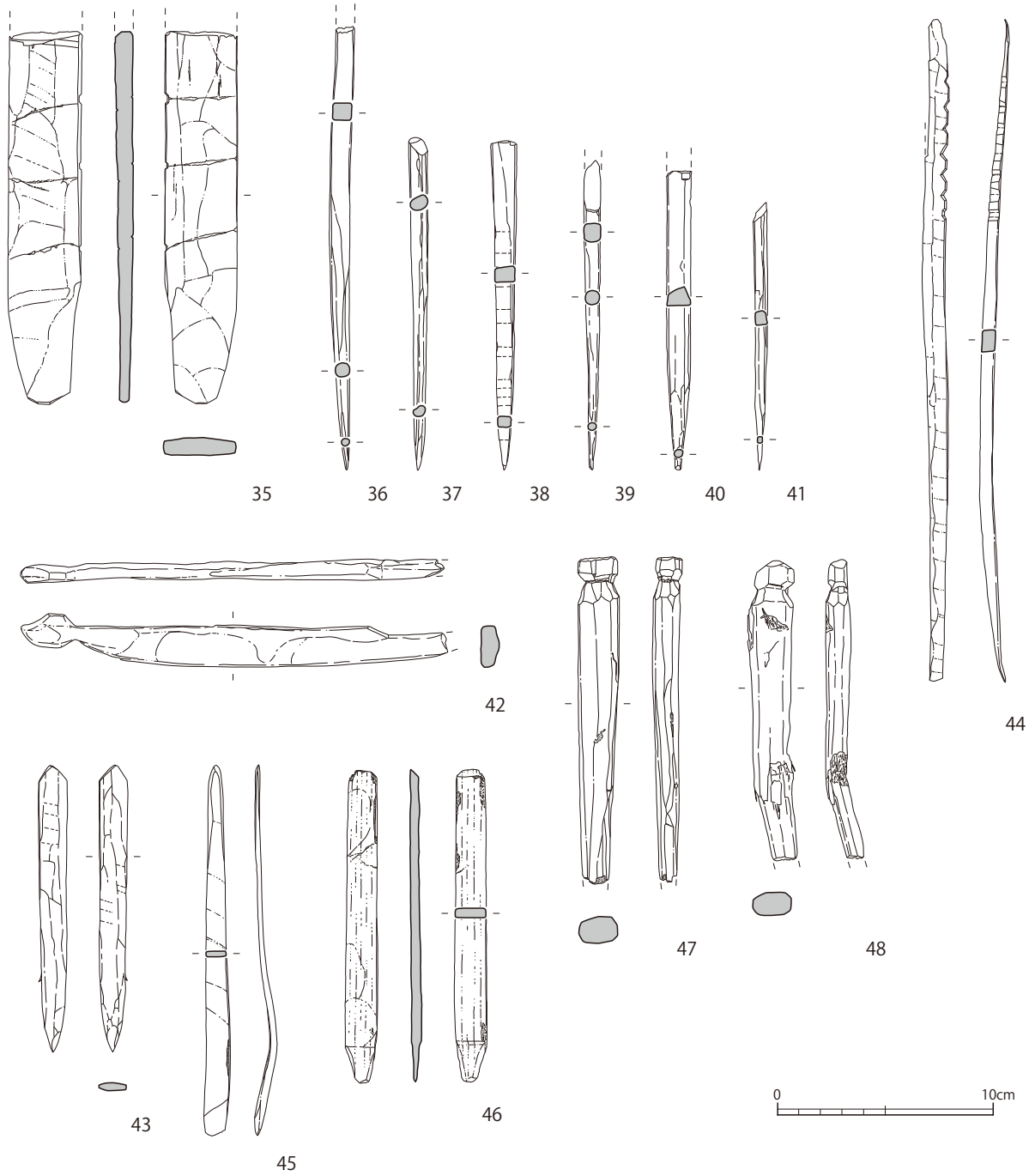
２点出土。**49** は杓子状だが身が厚く撹拌には適さない。柄の基部は円盤状に削り出し、身は細長く先端が丸い。断面は凸レンズ状をなし、加工痕が明瞭に残る。**50** は剣形だが身は厚い。先端を丸くおさめ、身の中央が深さ 18 ㎝程度抉られており、文書等を挟む道具 (文挟) の可能性が考えられよう。



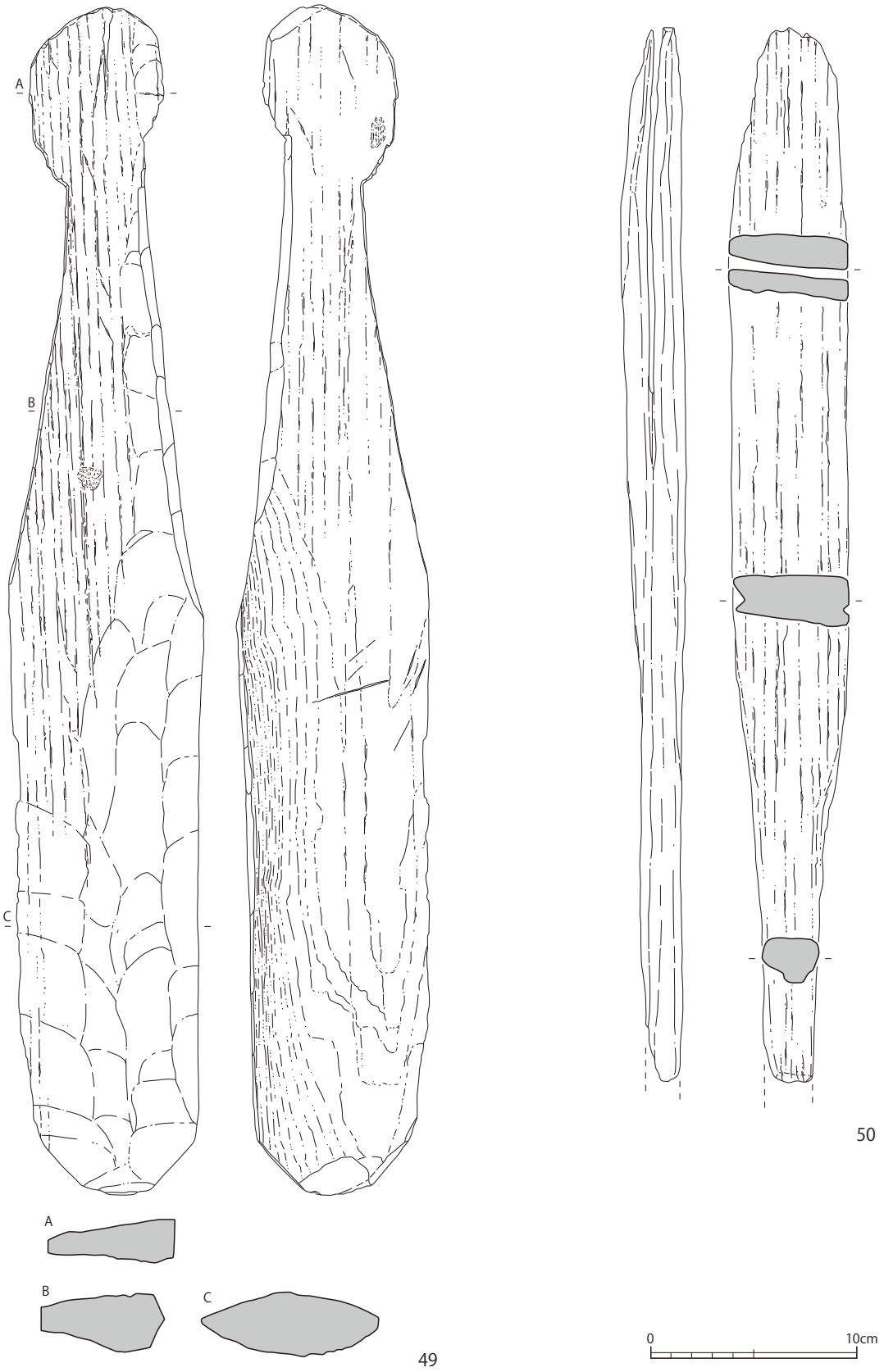
第 16 図　木器・木製品実測図 1（1：3）



第 17 図　木器・木製品実測図 2（1：3）



第 18 図　木器・木製品実測図 3（1：3）



第 19 図　木器・木製品実測図 4（1：3）

４．植物遺存体（自然遺物）

植物遺存体は、植物の核・種子・果皮である。いずれも 451 号土坑（ＳＫ451）の９層（木屑層）から出土したものだが、大半は木屑層を水洗選別した際に採取されたものである。

・ウメの核

完形３点出土。褐色で扁平な楕円形を呈し、縁に稜をもつ。稜の左右には溝がある。栽培種を含む可能性が高い。表面には多数の窪みが見られる。

・モモの核

完形 45 点、残欠 18 点出土。楕円形で、表面には縦方向の短い溝と、多数の窪みが見られる。栽培種を含む可能性が高い。

・スモモの核

完形 63 点、残欠 31 点出土。褐色で扁平な楕円形を呈し、縁に稜線をもつ。稜の左右には溝がある。栽培種を含む可能性が高い。

・ヤマモモの核

完形６点出土。茶褐色で、縁に稜線をもつ。

・オニグルミの核

核の片側５点出土。褐色でやや楕円形を呈する。一部は核の表面が炭化している。

・サンショウの種子

完形５点、残欠１点出土。黒色で幅広な卵形を呈し、腹面の一端から先端までと、背面の一部には稜がある。腹面の先端近くにあるヘソは、卵形のくぼみとなる。

・イヌザンショウの種子

完形１点、残欠１点出土。黒色で幅広な卵形を呈し、ヘソは大形の溝状をなす。

・この他の植物遺存体

クリ果皮。カヤ種皮。マツ種子。センダン核等の堅果 (種実) 類。イヌマキ種子か。イヌガヤ種子。コブシ種子。ハシバミ果皮。エノキグサ種子。クスノキ種子。シイ属果皮。ホルトノキ果皮。ヒョウタン種子。ウリ種子。ヒョウタン属果皮。カボチャ種子。以上各１袋。不明種子等７袋。合計 23 袋である。

Ⅳ　おわりに

本書は、広島県の西部、東広島市に所在する史跡安芸国分寺跡の 451 号土坑（ＳＫ451）から出土した一括遺物の資料集成報告書である。その内訳は木簡 82 点（うち削屑は 28 点）、土器 120 点（うち須恵器は 98 点、土師器は 6 点、焼塩土器は 16 点）で、土器のなかで墨書が認められるのは 42 点、さらに木器・木製品は 50 点の合計 252 点を数える。

この土坑は、安芸国分寺の東側を占めていた大衆院の東端、東面築地塀にほぼ並行して南北方向に長い台形状を呈していた。検出面での規模は長さ（南北方向）約 9.0m、幅（東西方向）は北側が約 5.0m、南側が 3.5mで、深さは約 0.8mである。覆土は大きく上（整地土）・中（埋戻土）・下（堆積土）の３層に分けられ、遺物は下層の中に広がる木屑層から出土した。また、土器の一部には、この土坑を壊して設けられた 450 号溝（ＳＤ450）の下層から出土した破片との接合関係をもつ個体が存在する。この溝が掘削されたのは 8 世紀後半で、その後、9 世紀前半まで利用されていたと捉えられ、土坑の時期的な下限を明確に示しているのである。

出土した遺物は、「天平勝寶二年」（750 年）の紀年銘が鮮明に残った安芸国司（目）からの御料送付を示す長大な木簡をはじめ、鋪設具類や米・油などに付けられていた貢進木簡類（荷札・付札類）が含まれる。これらには安芸国分寺を取り巻く古代安芸国内のさまざまな郡名・郷名が記入されており、他に供養・供料などと書かれた記録木簡、また文書木簡や封緘木簡、題箋木簡も出土しており、注目される。そしてさらに、削屑の中には横材を利用したものが複数あり、帳簿類の存在もうかがえるのである。

土器は、供膳具である須恵器の皿・蓋杯類を中心とし、これに少量の土師器が伴う。また、この中の墨書土器には、寺院を彷彿させる「寺前」「寺」「佛」「像」をはじめ、仏教行事である「安居」「齋會」、僧侶名と考えられる「勝千」「厳及」などと記されたものが含まれる。そして、この他に生産された粒塩を再加熱し、三角錐状の形に成型・固化するための焼塩土器が多量に出土している。焼塩は斎会などの調味料とともに、仏法僧への供養品でもあったと考えられる。

木器・木製品のうち特記されるのは、箸・物指・角筆である。箸の中には長さ 8 寸（約 24 ㎝）を超える長いものがあり、これらは仏教行事に出仕した僧侶らの人数を確認するための「籌」として使われた可能性がある。物指の表裏には複数の刻線が、側面にも同じ位置に切り込みがみられ、経紙などに罫線を引くための道具と推測される。また、先端が鋭く尖る鉛筆状を呈した角筆も存在し、これを利用して経典類に読み仮名や句読点などの符号を書き込んだ可能性が考えられよう。この他に糸巻きや檜扇・杓子なども見受けられ、加工痕が明瞭に残る木簡の再生品も複数出土している。

したがって、以上のことからこの土坑から出土した遺物群は、「国分寺建立の詔」から 9 年目の紀年銘木簡を含んだ、時期が極めて限定された一括資料と捉えられよう。そしてこれらは、創建後間もない国分寺において勤修されていた仏教行事（安居・斎会）の一端を具体的に示す資料として評価できるものである。

なお、土坑内の木屑層からは、ウメの核・モモの核・スモモの核、またサンショウやイヌザンショウの実などの植物遺存体が 23 種類以上も伴出しており、仏教行事における食用植物の利用を考える資料となる。

【註】

（１） 出土した加工痕のある木材片の一つは、年輪年代から 749 年に伐採されたことが確認されている。

（２） 出土した瓦は少量の丸・平瓦で、後者はすべて粘土板桶巻きづくりである。

（３）「薦」（菰）とは、水辺に生えるイネ科の多年草、マコモ（真薦）の古名である。

（４）『満須佐計装束抄』に、「茵」とは「長さ・広さ四方３尺ほど、赤地の錦の縁の広さ４～５寸ほどのものを四方に差し回し、中に唐綾又は固織物などを縁の内様に付けて、その中に縦様に縫い目があり、綿を中に入れた」とある。

（５） ふさふさした羽飾り。傘や旗竿の先端に付ける羽でできた飾りとも推測されている。

（６） 竹やアシを粗く編んだ筵の可能性もある。

（７） 白鳳時代～奈良時代の寺院、広島県安芸高田市（旧高田郡吉田町）の明官地廃寺から出土した平瓦には「高宮郡内部寺」とヘラ書きされている（広島県立埋蔵文化財センター 1989）。

（８） 妹尾周三「安芸国分寺の伽藍配置と変遷」『月刊考古学ジャーナル６（特集古代寺院の伽藍配置）』545 号、ニューサイエンス社、2006 年

（９） 安芸国分寺跡からは、これまで定形硯（円面硯など）は出土していない。

【参考・引用文献】

佐竹　昭・妹尾周三　「広島・安芸国分寺跡」『木簡研究』24、木簡学会、2002 年

佐竹　昭　「安芸国分寺跡出土の木簡・墨書土器をめぐって」『日本語言与文化』（孫宗光先生喜寿記念論文集）、北京大学出版社、2003 年

財団法人東広島市教育文化振興事業団　『史跡安芸国分寺跡－出土木簡とその概要－』（阿岐のまほろば特集号）、2001 年

財団法人東広島市教育文化振興事業団　『西条町吉行　史跡安芸国分寺跡調査報告書Ⅳ－第 12 次・第 13 次調査の記録－』2002 年

財団法人東広島市教育文化振興事業団　『西条町吉行　史跡安芸国分寺跡調査報告書Ⅷ－第 23 次～第 25 次調査の記録－』2006 年

妹尾周三　「安芸地域－安芸国分寺出土資料を中心として－」『古代の土器研究－聖武朝の土器様式－』８、奈良文化財研究所（古代の土器研究会）、2005 年

妹尾周三　「安芸国分寺の伽藍配置と変遷」『月刊考古学ジャーナル６（特集古代寺院の伽藍配置）』545 号、ニューサイエンス社、2006 年

広島県教育委員会　「安藝國分寺塔阯」『広島縣史蹟名勝天然記念物調査報告』４、1937 年（財団法人東広島市教育文化振興事業団　「附編」『西条町吉行　史跡安芸国分寺跡調査報告書Ⅵ- 第 18 次調査（安芸国分寺周辺遺跡）の記録 - 』2004 年に再録）

広島県教育委員会　『安芸国分寺跡－第１～３次調査概報－』1970 ～ 1972 年

広島県教育委員会　『安芸国分尼寺跡－第１～３次調査概報－』1978 ～ 1980 年

広島県立埋蔵文化財センター　『明官地廃寺跡－第３次発掘調査概報－』1989 年

藤岡孝司・妹尾周三　「安芸国分寺跡」『国分寺の創建－思想・制度編－』吉川弘文館、2012 年

Ⅴ　重要考古資料目録

広島県安芸国分寺跡土坑出土品　　東広島市

（東広島市出土文化財管理センター保管）

1．木簡		82点
1．墨書土器		42点
1．土器		78点
1．木器・木製品		50点

（内　訳）

1．木簡		82点
1．墨書土器		42点
1．土器		78点
須恵器	57点	
土師器残欠	5点	
焼塩土器残欠	16点	
1．木器・木製品		50点
木簡再生品	4点	
糸巻残欠	2点	
檜扇残欠	7点	
杓子	3点	
箸	17点	
物指残欠	2点	
角筆	6点	
不明木製品	9点	

（総計252点）

1．木　簡　　82点

番号	長	幅	厚	品質形状等	報告書番号	通番
1	(53.5)	4.8	0.3	木簡(文書)。081型式。上下に縦方向の亀裂あり。上下欠損(上方は廃棄時の切断か。先端にほつれ毛状の亀裂あり。下方は腐食によるほつれ毛状の亀裂が著しい)。墨書は両面ともに明瞭表面に習書「之」「秦」あり。大形木簡。保存処理済み(高級アルコール含浸法)。専用アクリルケースあり。	報Ⅳ、23図-1 本書、木簡1	1
2	(38.8)	3.4	0.5	木簡(文書)。019 型式。上端は二次折損(切り折りか)。下端は切り落しだが弧状におさめる。下方に縦方向の亀裂あり。墨書〔恵ヵ〕の「恵」は、「急」の可能性あり。釈文は一部赤外線判読。保存処理済(高級アルコール含浸法)。専用アクリルケースあり。	報Ⅳ、24図-2 本書、木簡2	2
3	(17.7)	3.0	0.4	木簡(文書)。081型式。上下欠損(廃棄時の切断か)。下部は半裁、中程に小孔が貫通。２片未接合。墨書は両面ともに明瞭。保存処理済(高級アルコール含浸法)。専用アクリルケースあり。	報Ⅳ、25図-3 本書、木簡3	3
4	(29.4)	2.1	0.5	木簡(文書)。081型式。上部は先尖状だが、先端にほつれ毛状の亀裂あり。下端は弧状におさめるが、縦方向の亀裂あり。中央に円孔が貫通。柄杓等の柄に再利用か。３片、うち２片接合(小孔の横)。接合面にほつれ毛状の亀裂あり。釈文は一部赤外線判読。保存処理済(高級アルコール含浸法)。専用アクリルケースあり。	報Ⅳ、25図-4 本書、木簡4	4
5	17.2	1.8	0.3	木簡(荷札)。032型式。上端は切り落し、上部両側に切り込みあり。下端は斜め切り落し。縦方向の亀裂あり。細片1接合(上部切り込みの上)。墨書は明瞭。「五斗」は現在の二斗。２片接合。保存処理済(高級アルコール含浸法)。専用アクリルケースあり。	報Ⅳ、26図-5 本書、木簡5	5
6	8.7	2.0	0.3	木簡(荷札)。032型式。完形。上端は切り落し。下端は斜め切り落し。切り込みが下(両側に切り込みあり)。墨書は明瞭。保存処理済(高級アルコール含浸法)。専用アクリルケースあり。	報Ⅳ、26図-6 本書、木簡6	6
7	16.4	1.3	0.2	木簡(荷札)。032型式。完形。上下両端は斜め切り落し。切り込みが下(両側に切り込みあり)。表面の切り込み部分と裏面中央に横方向の亀裂あり。保存処理済(高級アルコール含浸法)。専用アクリルケースあり。	報Ⅳ、26図-7 本書、木簡7	7
8	8.3	1.4	0.4	木簡(荷札)。032型式。完形。上下両端は切り折り。上部両側に切り込みあり。下端を弧状におさめる。断面は湾曲する。墨書は明瞭。保存処理済(高級アルコール含浸法)。専用アクリルケースあり。	報Ⅳ、23図-8 本書、木簡8	8

9	19.2	2.3	0.6	木簡(荷札)。032型式。完形。上端は斜め切り落し。下端は切り落し。上部両側に切り込みあり。全体的に腐食が著しく表裏両面の年輪が浮き出る。釈文は一部赤外線判読。保存処理済(高級アルコール含浸法)。専用アクリルケースあり。	報Ⅳ、26図-9 本書、木簡9	9
10	(11.4)	2.6	0.3	木簡(荷札)。019型式。上端切り落し。下欠損。側面を弧状に削る。片側面は破損(表面中央に横方向の亀裂あり)。釈文は赤外線判読。保存処理済(高級アルコール含浸法)。専用アクリルケースあり。	報Ⅳ、27図-10 本書、木簡10	10
11	14.4	1.9	0.6	木簡(荷札)。031型式。完形。上下両端は切り落し(上端に腐食あり)。上下両側に切り込みあり(一部側面が欠損)。表裏両面ともに剥離あり。釈文は一部赤外線判読。保存処理済(高級アルコール含浸法)。専用アクリルケースあり。	報Ⅳ、27図-11 本書、木簡11	11
12	18.0	2.3	0.4	木簡(荷札)。031型式。上端は切り落し。上下両側に切り込みあり。下端は圭頭状の仕上げ。２片未接合。側面に大きな剥離あり。墨書は明瞭。地名は「(賀茂郡)木綿郷」。保存処理済(高級アルコール含浸法)。専用アクリルケースあり。	報Ⅳ、27図-12 本書、木簡12	12
13	14.0	2.2	0.4	木簡(荷札)。032型式。完形。上端は切り折り。上部両側に切り込みあり。下端は切り落し。表面中央に横方向の亀裂あり。地名は「(賀茂郡)高屋郷」か。保存処理済(高級アルコール含浸法)。専用アクリルケースあり。	報Ⅳ、27図-13 本書、木簡13	13
14	9.3	1.8	0.3	木簡(荷札)。031型式。上端は圭頭状の仕上げ。下端は切り落し。上下両側に切り込みあり(下方の片側欠損)。下方には縦方向の亀裂あり。裏面に墨痕が認められるが文字かは不明。保存処理済(高級アルコール含浸法)。専用アクリルケースあり。	報Ⅳ、27図-14 本書、木簡14	14
15	(11.9)	2.3	0.4	木簡(荷札か)。039 型式。上端は切り落し。上部両側に切り込みあり。２片未接合(小片１別置き)。上方からの亀裂あり。下欠(折損、亀裂あり)。冒頭の文字は「木綿郷」の可能性あり。保存処理済(高級アルコール含浸法)。専用アクリルケースあり。	報Ⅳ、28図-15 本書、木簡15	15
16	17.0	1.6	0.5	木簡(荷札か)。051型式。完形。上端は切り落し。下端は尖る。下中央に縦方向の亀裂あり。斎串状の形。釈文は赤外線判読。保存処理済(高級アルコール含浸法)。専用アクリルケースあり。	報Ⅳ、28図-16 本書、木簡16	16
17	14.1	2.0	0.3	木簡(荷札)。032型式。完形。上下両端は切り落し。上部両側に切り込みあり。中央両側面に剥離あり。釈文は赤外線判読。保存処理済(高級アルコール含浸法)。専用アクリルケースあり。	報Ⅳ、28図-17 本書、木簡17	17
18	(18.8)	2.5	0.6	木簡(荷札か)。039型式。上端は切り折り。上部両側に切り込みあり。下欠損(腐食、縦方向の亀裂あり)。裏面に細かなひび割れあり。保存処理済(高級アルコール含浸法)。専用アクリルケースあり。	報Ⅳ、28図-18 本書、木簡18	18
19	14.9	1.7	0.3	木簡(荷札か)。032型式。上下両端は斜め切り落し(上端の大半は大きく欠損)。上部両側に切り込みあり。中央に2か所の亀裂あり。冒頭の文字は「山(方郡)」か。釈文は赤外線判読。保存処理済(高級アルコール含浸法)。専用アクリルケースあり。	報Ⅳ、29図-19 本書、木簡19	19
20	11.5	1.6	0.6	木簡(付札)。032型式。完形。上下両端はともに斜め切り落し。中央両側面に切り込みあり。表面の下半には横方向の亀裂あり。墨書は一文字で「蓮」の可能性もある。釈文は赤外線判読。保存処理済(高級アルコール含浸法)。専用アクリルケースあり。	報Ⅳ、29図-20 本書、木簡20	20
21	(10.3)	1.9	0.3	木簡(付札)。039型式。上端は切り落し。上部両側に切り込みあり(片側は欠損)。下欠損(腐食によるほつれ毛状の亀裂あり)。表面下半には大きな剥離あり。釈文は赤外線判読。保存処理済(高級アルコール含浸法)。専用アクリルケースあり。	報Ⅳ、29図-21 本書、木簡21	21
22	19.9	2.2	0.6	木簡(付札)。011型式。完形。上端は斜め切り折り。下端は切り落し。表面に細かなひび割れあり。「枡子」は山椒の実。釈文は赤外線判読。保存処理済(高級アルコール含浸法)。専用アクリルケースあり。	報Ⅳ、29図-22 本書、木簡22	22
23	(13.6)	3.6	0.2	木簡(封緘)。039型式。上下両側面ともに欠損。上部の片側に切り込みあり(両側に施されていた可能性が大)。裏面は未調整(平滑、裂きか)。２片未接合。通番24と組み合うか。墨書は明瞭。保存処理済(高級アルコール含浸法)。専用アクリルケースあり。	報Ⅳ、30図-23 本書、木簡23	23
24	(9.9)	3.7	0.3	木簡(封緘)。039型式。上端は斜め切り落し。上部両側に切り込みあり。下欠損(ほつれ毛状の亀裂あり)。裏面は未調整(平滑、裂きか)。縦２本の墨線あり。上部に小孔が貫通。通番23と組み合うか。墨線は明瞭。保存処理済(高級アルコール含浸法)。専用アクリルケースあり。	報Ⅳ、30図-24 本書、木簡24	24
25	(35.2)	2.8	0.9	木簡(題箋)。061型式。頭部端は切り落し。題箋部と軸部は未接合(接合部の剥離が著しい)。題箋部に墨痕ありか。下端は欠損。軸部表面の剥離が著しく、全体的に細かなひび割れあり。題箋部：8.6×2.7×0.9㎝。軸径：1.0㎝。保存処理済(高級アルコール含浸法)。専用アクリルケースあり。	報Ⅳ、30図-25 本書、木簡25	25
26	(8.4)	3.4	0.3	木簡。019 型式。上端は斜め切り落し。下端は二次切り落し。表面上半は剥離が著しく、表裏両面ともに年輪が浮き出る。本文裏面の２文字目は「畜」か。釈文は赤外線判読。保存処理済 (高級アルコール含浸法)。専用アクリルケースあり。	報Ⅳ、31図-26 本書、木簡26	26
27	(27.1)	(1.7)	(0.3)	木簡。081型式。上下欠損(上端はほつれ毛状の亀裂あり)。半裁(裂きによる)。中央と下部に折れ痕あり。保存処理済(高級アルコール含浸法)。専用アクリルケースあり。	報Ⅳ、31図-27 本書、木簡27	27
28	(23.6)	(1.2)	0.8	木簡。081型式。上下欠損(上端ほつれ毛状の亀裂、下端にも亀裂あり)。中央に折れ痕あり。半裁(裂きによる)のため文字は判読困難。保存処理済(高級アルコール含浸法)。専用アクリルケースあり。	報Ⅳ、30図-28 本書、木簡28	28
29	(8.8)	(0.7)	0.4	木簡。081型式。上下欠損。半裁のため文字は判読困難。保存処理済(高級アルコール含浸法)。専用アクリルケースあり。	報Ⅳ、30図-29 本書、木簡29	29
30	(9.9)	(1.7)	0.4	木簡。039型式。切り込みが下(両側に施されていた可能性が大)。上欠損(上端に縦方向の亀裂あり)。半裁のため文字は判読困難。保存処理済(高級アルコール含浸法)。専用アクリルケースあり。	報Ⅳ、32図-31 本書、木簡30	30
31	(28.4)	4.1	0.4	木簡。019 型式。上欠損 (腐食によるほつれ毛状の亀裂が著しい)。下端は斜め切り落し。大形木簡。全体的に腐食が著しく、表裏両面ともに年輪が浮き出る。細片２別置き。釈文は赤外線判読。保存処理済 (真空凍結乾燥法)。専用アクリルケースあり。	本書、木簡31	31

32	23.9	3.5	0.6	木簡(文書か)。011型式。上端は切り落し。下端は斜め切り落しだが、縦方向の亀裂あり。下端小欠。中央下方に横方向の亀裂あり。保存処理済(高級アルコール含浸法)。専用アクリルケースあり。	本書、木簡32	32
33	(16.7)	(3.0)	0.4	木簡(文書か)。081型式。上端は切り落しで、片隅も切り落とす。下欠損(ほつれ毛状の亀裂あり)。片側面は欠損。全体的に腐食が著しく、表裏両面ともに年輪が浮き出る。保存処理済(真空凍結乾燥法)。専用アクリルケースあり。	本書、木簡33	33
34	(21.7)	(4.0)	0.2	木簡。081型式。下端は切り落し。上欠損。全体の傷みが激しい(縦方向の亀裂が著しい)。側面に剥離あり。細片１別置き。保存処理済(高級アルコール含浸法)。専用アクリルケースあり。	本書、木簡34	34
35	11.5	1.5	0.2	木簡(付札)。051型式。完形。上端は斜め切り落し。下端は尖る。上端は亀裂。側面に剥離あり。下方の先端にほつれ毛状の亀裂あり。斎串状の形。地名は「(賀茂郡)木綿郷」か。釈文は赤外線判読。保存処理済(高級アルコール含浸法)。専用アクリルケースあり。	本書、木簡35	35
36	(9.2)	1.6	0.3	木簡(付札)。031型式。上端欠損(腐食によるほつれ毛状の亀裂あり)。下端は切り落し。上下両側に切り込みあり。細片1別置き。釈文は赤外線判読。保存処理済(真空凍結乾燥法)。専用アクリルケースあり。	本書、木簡36	36
37	(12.4)	2.2	0.2	木簡(付札)。039型式。下端は切り落し。下部両側に切り込みあり。上欠損(腐食による著しいほつれ毛状の亀裂あり)。保存処理済(真空凍結乾燥法)。専用アクリルケースあり。	本書、木簡37	37
38	(9.2)	(1.7)	0.2	木簡(付札)。039型式。上端は切り落し。上部に切り込みあり(両側に施されていた可能性が大)。片面に墨痕あり。下欠損。先端に横方向の亀裂あり。半裁のため本文は天地逆の可能性もあり。保存処理済(真空凍結乾燥法)。専用アクリルケースあり。	本書、木簡38	38
39	(11.5)	3.5	0.3	木簡(付札か)。039型式。上端欠損(腐食によるほつれ毛状の亀裂あり)。上部両側に切り込みあり。片面に墨痕あり。下欠損。中央に縦方向の亀裂あり。表裏両面ともに横方向のひび割れあり。上方片側に小孔が貫通。保存処理済(真空凍結乾燥法)。専用アクリルケースあり。	本書、木簡39	39
40	14.0	2.0	0.6	木簡(付札か)。031型式。上端は切り折り。下端は切り落し。片面に墨痕あり。上下両側に切り込みあり(上下の側端が欠損)。保存処理済(高級アルコール含浸法)。専用アクリルケースあり。	本書、木簡40	40
41	(18.6)	(2.4)	0.5	木簡(付札か)。031型式。上端は斜め切り落し。片面に墨痕あり。上下に切り込みあり(両側に施されていた可能性が大)。下端欠損。半裁品か。保存処理済(高級アルコール含浸法)。専用アクリルケースあり。	本書、木簡41	41
42	(9.8)	2.2	0.2	木簡(付札か)。019型式。上端は圭頭状の仕上げ。片面に墨痕あり。下欠損。下方に方形の小孔が貫通。保存処理済(真空凍結乾燥法)。専用アクリルケースあり。	本書、木簡42	42
43	20.6	2.7	0.3	木簡(付札か)。051型式。上端は圭頭状の仕上げ、下端も圭頭状に尖らす。片面にわずかな墨痕あり。全体的に傷みが激しく、表裏両面ともに年輪が浮き出る。側縁及び上下からの亀裂あり。細片1別置き。保存処理済(真空凍結乾燥法)。専用アクリルケースあり。	本書、木簡43	43
44	(18.9)	(3.8)	0.2	木簡(封緘)。039型式。上端は斜め切り落し。上部に切り込みあり(両側に施されていた可能性が大)。片面に薄い墨痕あり。下欠損(ほつれ毛状の亀裂あり)。上部からの縦方向の亀裂あり。裏面は未調整(平滑)。保存処理済(高級アルコール含浸法)。専用アクリルケースあり。	本書、木簡44	44
45	(16.6)	2.7	0.1	木簡。061型式。上欠損(腐食によるほつれ毛状の亀裂あり)。縦方向の亀裂が著しい。2片未接合。細片1別置き。全体的に薄く檜扇の橋状を呈するが、基部に穿孔はない。基部幅1.9㎝。保存処理済(高級アルコール含浸法)。専用アクリルケースあり。	本書、木簡45	45
46	(9.1)	(1.4)	0.1	木簡。081型式。上端は切り落し。下欠損。半裁。側面に剥離あり。全体的に腐食が著しく、表裏両面ともに年輪が浮き出る。本文の4文字目は「廣」の可能性あり。釈文は赤外線判読。保存処理済(高級アルコール含浸法)。専用アクリルケースあり。	本書、木簡46	46
47	(14.8)	(1.2)	0.2	木簡。081型式。上下欠損(ともに縦方向の亀裂あり)。半裁(側面に剥離あり)。中央に円孔あり。貫通。保存処理済(高級アルコール含浸法による)。専用アクリルケースあり。	本書、木簡47	47
48	(8.7)	(1.7)	0.3	木簡。081型式。上端を斜めに切り落として二次的に尖らす。下欠損。釈文は赤外線判読。保存処理済(高級アルコール含浸法)。専用アクリルケースあり。	本書、木簡48	48
49	(17.7)	(1.4)	0.3	木簡。081型式。上端を二次的に尖らすが、先端は欠損(ほつれ毛状の亀裂あり)。下欠損(ほつれ毛状の亀裂あり)。側縁に剥離あり。中央と下方に折れ痕あり。保存処理済(真空凍結乾燥法)。専用アクリルケースあり。	本書、木簡49	49
50	(10.2)	(1.5)	0.3	木簡。081型式。上下欠損。上端にほつれ毛状の亀裂あり。半裁か。本文の1文字目は「直」の可能性あり。釈文は赤外線判読。保存処理済(高級アルコール含浸法)。専用アクリルケースあり。	本書、木簡50	50
51	(12.0)	(1.4)	0.2	木簡。081型式。上下欠損(上端ほつれ毛状の亀裂あり)。上方には上からの亀裂あり。半裁か。細片１別置き。表面の墨書〔子カ〕は「事」の可能性あり。最後の文字は「米綱」、もしくは「米継」か。釈文は赤外線判読。保存処理済(真空凍結乾燥法)。専用アクリルケースあり。	本書、木簡51	51
52	(3.8)	(1.8)	0.2	木簡。081型式。上下欠損。半裁か。釈文は赤外線判読。保存処理済(高級アルコール含浸法)。専用アクリルケースあり。	本書、木簡52	52
53	(3.3)	2.0	0.3	木簡。081型式。刻書。上下欠損。小孔2ヶ所あり、ともに貫通。片側面にササラ状の切り込みあり(５個以上)。保存処理済(真空凍結乾燥法)。専用アクリルケースあり。	本書、木簡53	53
54	(3.7)	(0.9)	0.6	木簡。081型式。表裏に墨痕あり。上下欠損。半裁。保存処理済(真空凍結乾燥法)。保管ケース入り(単体)。	本書、木簡54	54

55	(0.8)	(1.2)	(0.1)	木簡(削屑)。091型式。細片。横材を利用。帳簿か。保存処理済(真空凍結乾燥法)。保管ケース入り(集合)。	本書、木簡55	55
56	(5.1)	(1.3)	薄片	木簡(削屑)。091型式。右上側面に亀裂あり。２片未接合。保存処理済(真空凍結乾燥法)。保管ケース入り(集合)。	本書、木簡56	56
57	(3.2)	(1.5)	薄片	木簡(削屑)。091型式。中央に斜め横方向の亀裂あり。保存処理済(真空凍結乾燥法)。保管ケース入り(集合)。	本書、木簡57	57
58	(5.9)	(2.0)	薄片	木簡(削屑)。091型式。全体が波打つ。中央に斜め横方向の亀裂あり。保存処理済(真空凍結乾燥法)。保管ケース入り(集合)。	本書、木簡58	58
59	(0.8)	(0.8)	薄片	木簡(削屑)。091型式。細片。横材を利用。帳簿か。保存処理済(真空凍結乾燥法)。保管ケース入り(集合)。	本書、木簡59	59
60	(7.3)	(1.2)	(0.2)	木簡(削屑)。091型式。片面に墨痕あり。２片未接合。保存処理済(真空凍結乾燥法)。保管ケース入り(集合)。	本書、木簡60	60
61	(1.4)	(4.6)	薄片	木簡(削屑)。091型式。横材を利用。帳簿か。２片未接合。保存処理済(真空凍結乾燥法)。保管ケース入り(集合)。	本書、木簡61	61
62	(4.3)	(1.7)	(0.2)	木簡(削屑)。091型式。左片。縦方向の裂け目あり。２片未接合。保存処理済(真空凍結乾燥法)。保管ケース入り(集合)。	本書、木簡62	62
63	(9.0)	(0.7)	(0.1)	木簡(削屑)。091型式。上方に折れあり。下方に横方向の亀裂、その下は縦方向の亀裂あり(ほつれ毛状の亀裂)。３片未接合。保存処理済(真空凍結乾燥法)。保管ケース入り(集合)。	本書、木簡63	63
64	(8.2)	(2.1)	(0.2)	木簡(削屑)。091型式。上方に縦方向の割れと亀裂あり。３片未接合。保存処理済(真空凍結乾燥法)。保管ケース入り(集合)。	本書、木簡64	64
65	(0.7)	(0.6)	薄片	木簡(削屑)。091型式。細片。２片未接合。保存処理済(真空凍結乾燥法).保管ケース入り(集合)。	本書、木簡65	65
66	(6.7)	(2.6)	(0.2)	木簡(削屑)。091型式。中央に横方向の亀裂。上方は縦方向の亀裂が著しい。保存処理済(真空凍結乾燥法)。保管ケース入り(集合)。	本書、木簡66	66
67	(3.1)	(1.2)	(0.1)	木簡(削屑)。091型式。保存処理済(真空凍結乾燥法)。保管ケース入り(集合)。	本書、木簡67	67
68	(5.4)	(0.8)	(0.1)	木簡(削屑)。091型式。全体的にほつれ毛状の亀裂が著しい。保存処理済(真空凍結乾燥法)。保管ケース入り(集合)。	本書、木簡68	68
69	(2.6)	(1.1)	(0.1)	木簡(削屑)。091型式。中央に横方向の亀裂あり。保存処理済(真空凍結乾燥法)。保管ケース入り(集合)。	本書、木簡69	69
70	(0.8)	(0.7)	薄片	木簡(削屑)。091型式。細片。保存処理済(真空凍結乾燥法)。保管ケース入り(集合)。	本書、木簡70	70
71	(2.0)	(0.4)	薄片	木簡(削屑)。091型式。細片。保存処理済(真空凍結乾燥法)。保管ケース入り(集合)。	本書、木簡71	71
72	(3.2)	(0.2)	薄片	木簡(削屑)。091型式。上下両方に横方向の亀裂あり。保存処理済(真空凍結乾燥法)。保管ケース入り(集合)。	本書、木簡72	72
73	(7.0)	(0.4)	薄片	木簡(削屑)。091型式。縦方向に亀裂あり(ほつれ毛状の亀裂)。保存処理済(真空凍結乾燥法)。保管ケース入り(集合)。	本書、木簡73	73
74	(2.3)	(0.4)	薄片	木簡(削屑)。091型式。細片。保存処理済(真空凍結乾燥法)。保管ケース入り(集合)。	本書、木簡74	74
75	(2.4)	(0.5)	薄片	木簡(削屑)。091型式。細片。片面に墨痕あり。小片側は中央に横方向の亀裂あり。２片未接合。保存処理済(真空凍結乾燥法)。保管ケース入り(集合)。	本書、木簡75	75
76	(1.8)	(0.9)	薄片	木簡(削屑)。091型式。細片。２片未接合。保存処理済(真空凍結乾燥法)。保管ケース入り(集合)。	本書、木簡76	76
77	(3.0)	(0.3)	薄片	木簡(削屑)。091型式。細片。片面に墨痕あり。保存処理済(真空凍結乾燥法)。保管ケース入り(集合)。	本書、木簡77	77
78	(3.3)	(0.3)	薄片	木簡(削屑)。091型式。細片。縦方向に亀裂あり(ほつれ毛状の亀裂)。保存処理済(真空凍結乾燥法)。保管ケース入り(集合)。	本書、木簡78	78
79	(3.3)	(0.7)	薄片	木簡(削屑)。091型式。縦横両方向に亀裂あり。2片未接合。保存処理済(真空凍結乾燥法)。保管ケース入り(集合)。	本書、木簡79	79
80	(2.8)	(1.2)	薄片	木簡(削屑)。091型式。中央に横方向の亀裂あり。保存処理済(真空凍結乾燥法)。保管ケース入り(集合)。	本書、木簡80	80
81	(3.7)	(0.7)	(0.3)	木簡(削屑)。019型式。下方に縦方向の亀裂あり。保存処理済(真空凍結乾燥法)。保管ケース入り(集合)。	本書、木簡81	81
82	(2.2)	(0.6)	薄片	木簡(削屑)。091型式。細片。２片未接合。保存処理済(真空凍結乾燥法)。保管ケース入り(集合)。	本書、木簡82	82

１．墨書土器　　42点

番号	口径	つまみ径	器高	底径	遺存率	品質形状等	報告書番号	通番
1	14.9	－	4.0	－	90	須恵器杯Ａ。墨書は底部外面に「齋會」(赤外線判読)、内面に「一」(墨書は薄い)。底部は丸みを帯び、口縁部は外湾気味に上方に立ち上がる。底部外面不定方向のケズリ。色調は白色気味。８片接合(うち、ＳＤ450出土の１片接合)。	本書、6図-1	83

2	16.6	2.9	2.8	—	80	須恵器杯Ｂ蓋。墨書は内面に「安居」(墨書は薄い)。宝珠形つまみ。体部は扁平で、口縁部が下方に折れ曲がる。天井部に仕上げナデあり。焼成時の亀裂あり。色調は褐色気味。重ね焼き痕跡あり。降灰あり。６片接合。他に未接合破片１別置き。接点なし。	報Ⅳ、46図-118 本書、6図-2	84
3	17.4	2.8	2.2	—	60	須恵器杯Ｂ蓋。墨書は内面に「安居」。宝珠形つまみ。体部は扁平で、口縁部が下方に折れ曲がる。天井部に仕上げナデあり。重ね焼き痕跡あり。降灰あり。４片接合 (うち、ＳＤ450 出土の２片接合)。	報Ⅳ、46図-119 本書、6図-3	85
4	16.7	3.0	2.5	—	70	須恵器杯Ｂ蓋。墨書は内面に「安居」。宝珠形つまみ。体部は扁平で、口縁部が下方に折れ曲がる。天井部に仕上げナデあり。重ね焼き痕跡あり。降灰あり。９片接合 (うち、ＳＤ450 出土の３片接合)。	報Ⅳ、46図-120 本書、6図-4	86
5	［16.2］	3.0	2.5	—	80	須恵器杯Ｂ蓋。墨書は内面に「安居」。宝珠形つまみ。体部は扁平で、口縁部が下方に折れ曲がる。天井部に仕上げナデあり。重ね焼き痕跡あり。降灰あり。５片接合 (うち、ＳＤ450 出土の１片接合)。	本書、6図-5	87
6	［15.0］	2.8	3.8	—	40	須恵器杯Ｂ蓋。墨書は内面に「安居」。宝珠形つまみ。体部は丸みを帯び、口縁部が下方に折れ曲がる。天井部外面回転ケズリ。３片接合。	本書、6図-6	88
7	［15.6］	3.1	2.6	—	30	須恵器杯Ｂ蓋。墨書は内面に「安居」。宝珠形つまみ。体部は扁平で、口縁部が下方に折れ曲がる。天井部に仕上げナデあり。４片接合 (うち、４次調査３Ｔ出土の１片、ＳＤ450 出土の１片接合)。	本書、6図-7	89
8	［15.4］	—	—	—	30	須恵器杯Ｂ蓋。墨書は内面に □居」。口径は図上復元。つまみ欠損。体部は扁平で、口縁部が下方に折れ曲がる。天井部に仕上げナデあり。降灰あり。２片接合 (うち、ＳＤ450 出土の１片接合)。	報Ⅳ、47図-130 本書、6図-8	90
9	［19.6］	—	—	—	40	須恵器杯Ｂ蓋。墨書は内面に「安居一」(墨書は薄い)。口径は図上復元。つまみ欠損。体部は扁平で、口縁部が下方に折れ曲がる。天井部に仕上げナデあり。重ね焼き痕跡あり。降灰あり。４片を２組に接合(うち、ＳＤ450出土の１片接合)。	報Ⅳ、46図-121 本書、6図-9	91
10	16.5	2.9	3.1	—	80	須恵器杯Ｂ蓋。墨書は内面に「寺前」。宝珠形つまみ。体部は扁平で、口縁部が下方に折れ曲がる。天井部に仕上げナデあり。口縁部外面に煤付着。色調は褐色気味。４片接合。	報Ⅳ、46図-117 本書、6図-10	92
11	15.9	2.9	2.3	—	90	須恵器杯Ｂ蓋。墨書は内面に「寺前」。ボタン状つまみ。体部は扁平で、口縁部が下方に折れ曲がる。降灰あり。５片接合(うち、ＳＤ450 出土の１片接合)。	報Ⅳ、46図-123 本書、6図-11	93
12	16.0	2.6	2.8	—	70	須恵器杯Ｂ蓋。墨書は内面に「寺前」(墨書は薄い)。ボタン状つまみ。体部は扁平で、口縁部が下方に折れ曲がる。外面に鉄分付着。６片接合 (うち、ＳＤ450 出土の４片接合)。	報Ⅳ、47図-128 本書、6図-12	94
13	［15.9］	2.9	2.6	—	80	須恵器杯Ｂ蓋。墨書は内面に「寺前」(墨書は薄い)。ボタン状つまみ。体部は扁平で、口縁部が下方に折れ曲がる。重ね焼き痕跡あり。外面に煤付着。８片接合 (うち、ＳＤ450 出土の１片接合)。他に未接合破片１別置き。接点なし。	報Ⅳ、47図-129 本書、7図-13	95
14	15.6	2.8	3.6	—	90	須恵器杯Ｂ蓋。墨書は内面に「寺前」。ボタン状つまみ。体部は丸みを帯び、口縁部が下方に折れ曲がる。天井部に仕上げナデあり。８片接合(うち、ＳＤ450出土の３片接合)。	本書、7図-14	96
15	—	3.0	—	—	20	須恵器杯Ｂ蓋。墨書は内面に「寺□。宝珠形つまみ。口縁部全欠。体部は扁平で、口縁部付近が下方に折れ曲がる。天井部に仕上げナデあり。焼成時の亀裂あり。降灰あり。色調は褐色気味。２片接合 (うち、ＳＤ450 出土の１片接合)。	本書、7図-15	97
16	16.4	2.8	2.1	—	70	須恵器杯Ｂ蓋。墨書は外面に 寺」。宝珠形つまみ。体部は扁平で、口縁部が下方に折れ曲がる。天井部に仕上げナデあり。重ね焼き痕跡あり。色調は褐色気味。４片接合 (うち、ＳＤ450 出土の１片接合)。他に未接合破片２別置き。接点なし。	報Ⅳ、46図-116 本書、7図-16	98
17	16.0	2.8	3.2	—	95	須恵器杯Ｂ蓋。墨書は内面に「齋會」(硯の墨痕で文字が見にくい)。ボタン状つまみ。体部は扁平で、口縁部が下方に折れ曲がる。天井部に仕上げナデあり。重ね焼き痕跡あり。降灰あり。硯に転用。口縁部に亀裂あり。６片接合(うち、ＳＤ450出土の３片接合)。	本書、7図-17	99
18	19.9	3.3	3.5	—	95	須恵器杯Ｂ蓋。墨書は外面に「大」「大」、内面に「厳及」(墨書は薄い、僧名か)。ボタン状つまみ。口縁部は下方に折れ曲がる。天井部に仕上げナデあり。大形品。重ね焼き痕跡あり。３片接合(うち、ＳＤ450出土の２片接合)。	報Ⅳ、41図-32 本書、7図-18	100
19	15.2	2.5	2.8	—	80	須恵器杯Ｂ蓋。墨書は内面に「像」。宝珠形つまみ。体部は扁平で、口縁部が下方に折れ曲がる。天井部に仕上げナデあり。重ね焼き痕跡あり。降灰あり。	報Ⅳ、46図-115 本書、7図-19	101
20	15.4	2.4	1.4	—	95	須恵器杯Ｂ蓋。墨書は内面に「原」。ボタン状つまみ。体部は扁平で、口縁部が下方に折れ曲がる。口縁部にひずみあり。天井部に仕上げナデあり。重ね焼き痕跡あり (他の破片が付着、杯Ｂの高台部分)。自然釉付着。降灰あり。７片接合 (うち、ＳＤ450 出土の２片接合)。	報Ⅳ、46図-122 本書、7図-20	102
21	［16.4］	—	—	—	40	須恵器杯Ｂ蓋。墨書は内面に「乙万呂」(人名)。口径は図上復元。つまみ欠損。体部は扁平で、口縁部が下方に折れ曲がる。天井部に仕上げナデあり。重ね焼き痕跡あり。降灰あり。14 片を３組に接合 (うち、ＳＤ450 出土の７片接合)。	本書、7図-21	103

22	18.4	—	—	—	60	須恵器杯Ｂ蓋。墨書は外面に「□□。つまみ欠損。体部は扁平で、口縁部が下方に折れ曲がる。天井部に仕上げナデあり。大形品。自然釉付着。降灰あり。硯に転用(破片によって墨痕の残存状況が異なる)。６片接合(うち、ＳＤ450出土の３片接合)。	本書、7図-22	104
23	14.6	2.7	3.1	—	60	須恵器杯Ｂ蓋。墨書はつまみ上面に記号または絵。つまみの周囲に螺旋状の墨線あり。ボタン状つまみ。体部は丸みを帯び、口縁部が下方に折れ曲がる。硯に転用(破片によって墨痕の残存状況が異なる)。５片接合(うち、ＳＤ450出土の１片接合)。	本書、7図-23	105
24	［13.4］	—	3.8	［10.4］	40	須恵器杯Ｂ。墨書は底部高台内に「齋會」。断面台形状の低い貼付高台。体部下方に弱い稜線あり。口縁部にひずみあり。底部外面不定方向のケズリ。	報Ⅳ、48図-148 本書、7図-24	106
25	18.3	—	5.9	13.8	80	須恵器杯Ｂ。墨書は底部高台内に「齋會」。断面菱形状の貼付高台(高台の内側を強く撫でる)。体部のひずみが大きく、体部の立ち上がり(高さ)が左右で約１㎝異なる。内面見込み、底部外面ともに仕上げナデあり。色調は白色気味。６片接合(うち、ＳＤ450出土の４片接合)。	本書、8図-25	107
26	14.9	—	4.0	11.3	80	須恵器杯Ｂ。墨書は底部高台内に「齋會」。断面菱形状の貼付高台(高台の内側を強く撫でる)。内面見込みに仕上げナデあり。底部外面高台内は回転ケズリ。色調は白色気味。底部（高台)・体部外面～口縁部内面に煤付着。７片接合(うち、ＳＤ450出土の６片接合)。	本書、8図-26	108
27	［15.4］	—	4.5	10.6	40	須恵器杯Ｂ。墨書は底部高台内に「安居」。断面菱形状の貼付高台(高台の内側を強く撫でる)。底部外面ヘラ切り未調整。色調は外面が灰黒色。６片接合。	報Ⅳ、48図-151 本書、8図-27	109
28	13.5	—	3.8	9.9	60	須恵器杯Ｂ。墨書は底部高台内に □居東」。断面菱形状の細い貼付高台(高台の内側を強く撫でる)。体部下方に弱い稜線がめぐる。底部外面ヘラ切り未調整。２片接合。	報Ⅳ、48図-149 本書、8図-28	110
29	—	—	(3.8)	11.5	50	須恵器杯Ｂ。墨書は底部外面に「寺前」。口縁部全欠。断面台形状の細い貼付高台。内面見込みに仕上げナデあり。底部外面ヘラ切り未調整。色調は白色気味。５片接合(うち、ＳＤ450出土の４片接合)。	本書、8図-29	111
30	15.7	—	4.7	11.0	80	須恵器杯Ｂ。墨書は底部高台内に「勝千」(僧名か)。断面菱形状の貼付高台(高台の内側を強く撫でる)。内面見込みに仕上げナデあり。底部外面ヘラ切り未調整。色調は褐色気味。20片接合(うち、ＳＤ450出土の４片接合)。他に未接合破片８別置き。接点未調査。	報Ⅳ、48図-150 本書、8図-30	112
31	14.3	—	4.0	10.4	80	須恵器杯Ｂ。墨書は底部高台内に「小方」。断面菱形状の貼付高台(高台の内側を強く撫でる)。内面見込みに仕上げナデあり。底部外面不定方向のケズリ。３片接合。他に未接合破片１別置き。接点なし。	本書、8図-31	113
32	［14.6］	—	4.2	11.5	70	須恵器杯Ｂ。墨書は底部高台内に「沼田」(ぬた、郡名)。断面菱形状の貼付高台(高台の内側を強く撫でる)。内面見込みに仕上げナデあり。底部外面ヘラ切り未調整。降灰あり。10片接合(うち、ＳＤ450出土の５片接合)。	本書、8図-32	114
33	［19.8］	—	7.0	14.0	20	須恵器杯Ｂ。墨書は底部高台内に「□」。口径は図上復元。断面菱形状の貼付高台(高台の内側を強く撫でる)。内面見込みに仕上げナデあり。底部外面不定方向のケズリ。大形品。見込みが深い。５片接合(うち、ＳＤ450出土の３片接合)。他に未接合破片１別置き。接点なし。	本書、8図-33	115
34	［14.4］	—	3.8	11.6	40	須恵器杯Ｂ。墨書は底部高台内に「□」。口径は図上復元。断面菱形状の貼付高台(高台の内側を強く撫でる)。内面見込みに仕上げナデあり。底部外面不定方向のケズリ。色調は白色気味。６片接合(うち、ＳＤ450出土の５片接合)。	報Ⅷ、26図-105 本書、8図-34	116
35	15.0	—	3.8	—	90	須恵器杯Ｃ。墨書は底部外面に「寺」。口縁部が屈曲し内傾する。底部は丸みを帯びる。底部外面ヘラ切り未調整。重ね焼き痕跡あり。降灰あり。内面に鉄分が付着。９片接合(うち、ＳＤ450出土の１片接合)。	報Ⅳ、45図-98 本書、8図-35	117
36	18.1	—	2.6	16.2	80	須恵器皿Ａ。墨書は底部外面に「勝千」(僧名か)。口縁部は直立。内面見込み仕上げナデ。底部は平底。底部外面不定方向のケズリ。体部のひずみが大きく、体部の立ち上がり(高さ)が左右で約0.8㎝異なる。色調は白色気味。重ね焼き痕跡あり。降灰あり。６片接合(うち、ＳＤ450出土の１片接合)。	報Ⅳ、45図-101 本書、8図-36	118
37	20.6	—	3.6	—	90	須恵器皿Ａ。墨書は底部外面に「沼田」(ぬた、郡名)。口縁部は外湾。底部は丸みを帯びる。底部外面不定方向のケズリ。色調は白色気味。22片接合(うち、ＳＤ450出土の４片接合)。	報Ⅳ、45図-102 本書、9図-37	119
38	—	—	—	［13.8］	30	須恵器皿Ｂ。墨書は底部高台内に「允」(赤外線判読)。口縁部は全欠。断面台形状の貼付高台。内面見込みに仕上げナデあり。10片接合(うち、ＳＤ450出土の４片接合)。他に未接合破片１別置き。接点なし。	本書、9図-38	120
39	［30.6］	—	4.9	［22.4］	30	須恵器盤Ｂ。墨書は底部高台内に「大代」(墨書は薄い)。口縁部は外湾。断面逆菱形状の貼付高台。内面見込みに仕上げナデあり。大形品。重ね焼き痕跡あり。色調は外面が灰黒色。３片接合(うち、ＳＤ450出土の２片接合)。	本書、9図-39	121
40	12.1	2.1	1.6	—	100	須恵器壺蓋。墨書は内面に「安居／二」。宝珠形つまみ。体部は扁平で、口縁部が下方に折れ曲がる。天井部に仕上げナデあり。自然釉付着。降灰あり。６片接合。	報Ⅳ、47図-131 本書、9図-40	122

41	25.6	—	11.9	—	90	須恵器仏鉢。墨書は体部外面に「佛」。口縁部は内湾。内面見込みに仕上げナデあり。底部は丸みを帯びる。底部外面不定方向のケズリ。底面周辺の摩耗が著しい。12片接合(うち、SD450出土の1片接合)。	報Ⅳ、48図-161 本書、9図-41	123
42	[15.1]	—	3.4	—	20	土師器杯(畿内産土師器)。墨書は底部外面に墨書「二」。口径は図上復元。口縁部は外反。底部は平底気味だが、体部との境界に丸みをもつ。底部外面ナデツケで指頭圧痕が著しい。胎土精良。鉄分の付着が著しい。9片接合。	本書、9図-42	124

1．土　器　　78点

須恵器　　57点

番号	口径	つまみ径	器高	底径	遺存率	品質形状等	報告書番号	通番
1	13.1	—	4.5	8.8	80	杯A。口縁部は内湾気味に上方に立ち上がる。底部は平底気味。底部外面ヘラ切り未調整。重ね焼き痕跡あり。11片接合(うち、SD450出土の5片接合)。	報Ⅳ、45図-91 本書、10図-1	125
2	12.2	—	3.1	8.0	90	杯A。口縁部は外側上方に立ち上がる。底部は平底。内面見込みに仕上げナデあり。底部外面ヘラ切り未調整。体部がひずみ、立ち上がり(高さ)が左右で約0.6㎝異なる。内面煤付着。色調は内面褐色気味。灯明皿。9片接合。	報Ⅳ、45図-92 本書、10図-2	126
3	12.8	—	3.2	10.0	50	杯A。口縁部は外側上方に立ち上がる。底部は平底。内面見込みに仕上げナデあり。底部外面ヘラ切り未調整。口縁部にひずみあり。内面煤付着。色調は白色気味。灯明皿。8片接合他1片を一体に復元。	報Ⅳ、45図-93 本書、10図-3	127
4	[13.4]	—	3.2	[9.6]	30	杯A。口径は図上復元。口縁部は外側上方に立ち上がる。底部は平底。内面見込みに仕上げナデあり。底部外面ヘラ切り未調整。色調は白色気味。底部外面に黒斑あり。2片接合。	報Ⅳ、45図-94 本書、10図-4	128
5	[14.4]	—	3.8	—	30	杯A。口径は図上復元。口縁部は外側上方に立ち上がり。底部は丸みを帯びる。内面見込みに仕上げナデあり。底部外面ヘラ切り未調整。色調は白色気味。胎土には石英粒が多い。	報Ⅳ、45図-95 本書、10図-5	129
6	[16.8]	2.8	3.2	—	50	杯B蓋。口径は図上復元。宝珠形つまみ。体部は扁平で、口縁部が下方に折れ曲がる。天井部に仕上げナデあり。重ね焼き痕跡あり。降灰あり。焼成時の亀裂あり。4片接合。	本書、10図-6	130
7	16.1	2.9	2.3	—	80	杯B蓋。宝珠形つまみ。体部は扁平で、口縁部が下方に折れ曲がる。天井部に仕上げナデあり。降灰あり。15片接合(うち、SD450出土の7片接合)。	報Ⅳ、46図-112 本書、10図-7	131
8	16.6	2.9	2.3	—	70	杯B蓋。宝珠形つまみ。体部は扁平で、口縁部が下方に折れ曲がる。天井部に仕上げナデあり。重ね焼き痕跡あり。降灰あり。焼成時の亀裂あり。2片接合。	報Ⅳ、46図-113 本書、10図-8	132
9	16.5	2.8	2.6	—	100	杯B蓋。宝珠形つまみ。体部は扁平で、口縁部が下方に折れ曲がる。天井部に仕上げナデあり。重ね焼き痕跡あり。降灰あり。焼成時の亀裂あり。色調は内面褐色気味。8片接合。	報Ⅳ、46図-114 本書、10図-9	133
10	[14.4]	2.7	2.7	—	50	杯B蓋。口径は図上復元。宝珠状つまみ。体部は扁平で、口縁部が下方に折れ曲がる。天井部にひずみあり。重ね焼き痕跡あり。降灰あり。8片を3組に接合(うち、SD450出土の4片接合)。他に未接合破片3別置き。接点なし。	報Ⅳ、45図-107 本書、10図-10	134
11	15.4	2.7	2.6	—	70	杯B蓋。宝珠状つまみ。体部は扁平で、口縁部が下方に折れ曲がる。自然釉付着。降灰あり。硯に転用(破片によって墨痕の残存状況が異なる)。9片接合。	報Ⅳ、45図-108 本書、10図-11	135
12	[15.6]	2.8	3.6	—	60	杯B蓋。口径は図上復元。宝珠状つまみ。体部は丸みを帯び、口縁部が下方に折れ曲がる。天井部から口縁部にかけてひずみあり。5片接合(うち、SD450出土の1片接合)。他に未接合破片2別置き。接点なし。	報Ⅳ、45図-109 本書、10図-12	136
13	15.4	2.9	3.1	—	90	杯B蓋。宝珠状つまみ。体部は丸みを帯び、口縁部が下方に折れ曲がる。天井部に仕上げナデあり。口縁部にひずみあり。自然釉付着。降灰あり。硯に転用。10片接合。	報Ⅳ、45図-110 本書、10図-13	137
14	15.8	2.8	2.5	—	90	杯B蓋。宝珠状つまみ。体部は扁平で、口縁部が下方に折れ曲がる。天井部に仕上げナデあり。体部にひずみあり。重ね焼き痕跡あり。降灰あり。焼成時の亀裂あり。3片接合。	報Ⅳ、45図-111 本書、10図-14	138
15	19.8	3.1	4.3	—	95	杯B蓋。宝珠状つまみ。体部は扁平で、口縁部が下方に折れ曲がる。天井部に仕上げナデあり。口縁部にひずみあり。器壁に焼成時のふくらみあり。重ね焼き痕跡あり。自然釉付着。降灰あり。大形品。4片接合。他に未接合破片1別置き。接点なし。	報Ⅳ、45図-105 本書、10図-15	139
16	[20.2]	3.0	3.4	—	50	杯B蓋。宝珠状つまみ。体部は扁平で、口縁部が下方に折れ曲がる。天井部に仕上げナデあり。器壁に焼成時のふくらみあり。重ね焼き痕跡あり。自然釉付着。降灰あり。大形品。11片接合(うち、SD450出土の2片接合)。他に未接合破片3別置き。接点なし。	報Ⅳ、45図-106 本書、10図-16	140
17	14.7	2.6	3.1	—	70	杯B蓋。ボタン状つまみ。体部は扁平で、口縁部が下方に折れ曲がる。天井部に仕上げナデあり。重ね焼き痕跡あり。色調は白色気味。外面に煤付着。6片接合(うち、SD450出土の2片接合)。	報Ⅳ、47図-124 本書、10図-17	141

18	［14.8］	2.9	2.5	―	80	杯Ｂ蓋。ボタン状つまみ。体部は扁平で、口縁部が下方に折れ曲がるが、端部の器壁は厚い。天井部に仕上げナデあり。硯に転用。４片接合(うち、ＳＤ450出土の１片接合)。	報Ⅳ、47図-125 本書、10図-18	142
19	15.4	3.3	3.3	―	80	杯Ｂ蓋。ボタン状つまみ。体部は丸みを帯び、口縁部が下方に折れ曲がる。天井部に仕上げナデあり。口縁部にひずみあり。焼成時の亀裂あり。10片接合(うち、ＳＤ450出土の５片接合)。	報Ⅳ、47図-126 本書、10図-19	143
20	16.3	3.0	2.3	―	95	杯Ｂ蓋。ボタン状つまみ。体部は扁平で、口縁部が下方に折れ曲がる。天井部に仕上げナデあり。重ね焼き痕跡あり。降灰あり。硯に転用(墨痕は薄い)。色調は内面褐色気味。２片接合。	報Ⅳ、47図-127 本書、10図-20	144
21	［15.8］	2.6	2.6	―	50	杯Ｂ蓋。口径は図上復元。ボタン状つまみ。体部は扁平で、口縁部が下方に折れ曲がる。天井部に仕上げナデあり。硯に転用(墨痕は薄い)。４片接合(うち、ＳＤ450出土の１片接合)。	本書、10図-21	145
22	19.7	3.5	3.1	―	70	杯Ｂ蓋。ボタン状つまみ。体部は扁平で、口縁部が下方に折れ曲がる。天井部に仕上げナデあり。大形品。焼成時の亀裂あり。降灰あり。鉄分が付着。11片接合(うち、ＳＤ450出土の５片接合)。	本書、10図-22	146
23	13.7	―	4.1	9.6	80	杯Ｂ。断面菱形状の貼付高台(高台の内側を強く撫でる)。内面見込みに仕上げナデあり。底部外面ヘラ切り未調整。体部の立ち上がり(高さ)が左右で約0.5㎝異なる。５片接合(うち、ＳＤ450出土の４片接合)。	報Ⅳ、47図-139 本書、10図-23	147
24	13.8	―	4.4	9.4	80	杯Ｂ。断面菱形状の貼付高台(高台の内側を強く撫でる)。内面見込みに仕上げナデあり。底部外面ヘラ切り未調整。降灰あり。色調は褐色気味。７片接合(うち、ＳＤ450出土の３片接合)。	報Ⅳ、47図-142 本書、10図-24	148
25	［14.0］	―	3.9	10.8	30	杯Ｂ。口径は図上復元。断面菱形状の貼付高台(高台の内側を強く撫でる)。底部外面不定方向のケズリ。降灰あり。４片接合(うち、ＳＤ450出土の２片接合)。	報Ⅳ、47図-140 本書、10図-25	149
26	［14.1］	―	4.7	10.6	50	杯Ｂ。口径は図上復元。断面菱形状の貼付高台(高台の内側を強く撫でる)。内面見込みに仕上げナデあり。底部外面ヘラ切り未調整。降灰あり。色調は褐色気味。３片接合。	報Ⅳ、47図-144 本書、10図-26	150
27	14.3	―	4.2	10.9	90	杯Ｂ。断面菱形状の貼付高台(高台の内側を強く撫でる)。高台内底面丸みをもつ(他地域からの搬入品か)。底部外面不定方向のケズリ。降灰あり。色調は底部外面白色気味。７片接合。	報Ⅳ、47図-143 本書、11図-27	151
28	［15.3］	―	3.8	［11.0］	30	杯Ｂ。口径は図上復元。断面菱形状の貼付高台(高台の内側を強く撫でる)。底部外面ヘラ切り未調整。高台の一部に剥離あり。色調は褐色気味。	報Ⅳ、47図-141 本書、11図-28	152
29	14.9	―	4.8	10.6	95	杯Ｂ。断面菱形状の貼付高台(高台の内側を強く撫でる)。内面見込みに仕上げナデあり。底部外面ヘラ切り未調整。焼成時の亀裂あり。色調は褐色気味。５片接合。	報Ⅳ、47図-145 本書、11図-29	153
30	15.3	―	4.5	10.4	70	杯Ｂ。断面菱形状の貼付高台(高台の内側を強く撫でる)。体部の立ち上がり(高さ)が左右で約0.5㎝異なる。色調は一部褐色気味。６片接合(うち、ＳＤ450出土の４片接合)。	報Ⅳ、47図-147 本書、11図-30	154
31	［16.0］	―	5.5	10.9	40	杯Ｂ。口径は図上復元。断面菱形状の貼付高台(高台の内側を強く撫でる)。内面見込みに仕上げナデあり。底部外面ヘラ切り未調整。高台の一部に剥離あり。見込みが深い。色調は白色気味(一部褐色気味)。６片接合(うち、ＳＤ450出土の１片接合)。他に未接合破片１別置き。接点なし。	報Ⅳ、48図-152 本書、11図-31	155
32	［13.0］	―	4.4	［10.4］	40	杯Ｂ。口径は図上復元。断面矩形状の貼付高台(高台の内側を強く撫でる)。内面見込みに仕上げナデあり。底部外面ヘラ切り未調整。自然釉付着。降灰あり。７片接合(うち、ＳＤ450出土の２片接合)。	報Ⅳ、47図-135 本書、11図-32	156
33	15.0	―	3.9	11.5	90	杯Ｂ。断面矩形状の貼付高台(高台の内側を強く撫でる)。内面見込み・底部外面ともに仕上げナデあり。高台の一部に剥離あり。色調は白色気味。内外面ともに煤付着。灯明皿。	報Ⅳ、48図-163 本書、11図-33	157
34	15.4	―	3.8	10.3	50	杯Ｂ。断面矩形状の貼付高台(高台の内側を強く撫でる)。底部外面ヘラ切り未調整。降灰あり。５片接合(うち、ＳＤ450出土の２片接合)。他に未接合破片１別置き。接点なし。	報Ⅳ、47図-146 本書、11図-34	158
35	［17.0］	―	6.0	11.9	60	杯Ｂ。口径は図上復元。断面矩形状の貼付高台(高台の内側を強く撫でる)。内面見込みに仕上げナデあり。底部外面ヘラ切り未調整。体部の立ち上がり(高さ)が左右で約0.6㎝異なる。器壁に焼成時のふくらみあり。高台の一部に剥離あり。自然釉付着。降灰あり。見込みが深い。11片接合(うち、ＳＤ450出土の１片接合)。	報Ⅳ、47図-132 本書、11図-35	159
36	18.2	―	6.5	14.5	90	杯Ｂ。断面矩形状の貼付高台(高台の内側を強く撫でる)。内面見込みに仕上げナデあり。底部外面ヘラ切り未調整。大形品。見込みが深い。色調は白色気味。13片接合(うち、ＳＤ450出土の４片接合)。	報Ⅳ、47図-133 本書、11図-36	160
37	［20.0］	―	5.1	15.8	50	杯Ｂ。断面矩形状の貼付高台(高台の内側を強く撫でる)。口縁部内面が凹線状にくぼむ。底部外面不定方向のケズリ。高台の一部に剥離あり。大形品。14片接合(うち、ＳＤ450出土の10片接合)。	報Ⅳ、48図-156 本書、11図-37	161
38	［13.6］	―	4.2	9.3	50	杯Ｂ。断面台形状の貼付高台。底部外面ヘラ切り未調整。体部の立ち上がり(高さ)が左右で約0.5㎝異なる。７片接合(うち、ＳＤ450出土の５片接合)。	報Ⅳ、47図-137 本書、11図-38	162

39	13.2	—	4.4	10.8	70	杯Ｂ。断面台形状の貼付高台。底部外面不定方向のケズリ。体部のひずみが著しく、立ち上がり（高さ）が左右で約0.5㎝異なる。自然釉付着。降灰あり。内面に別個体の一部が付着。12片接合（うち、ＳＤ450出土の１片接合）。	報Ⅳ、47図-136 本書、11図-39	163
40	13.2	—	4.2	9.5	80	杯Ｂ。断面台形状の貼付高台。体部下方に弱い稜線あり。底部外面ヘラ切り未調整。降灰あり。体部内面にヘラ状工具による横方向のキズあり。高台の一部に剥離あり。４片接合（うち、ＳＤ450出土の１片接合）。	報Ⅳ、47図-138 本書、11図-40	164
41	13.6	—	4.0	10.4	80	杯Ｂ。断面台形状の細い貼付高台。体部下方に強い稜線がめぐる。底部外面仕上げナデ。高台内底面にヘラ状工具による線状のキズあり。自然釉付着。降灰あり。４片接合(うち、ＳＤ450出土の２片接合)。	報Ⅳ、48図-153 本書、11図-41	165
42	14.5	—	4.1	11.1	95	杯Ｂ。断面台形状の貼付高台。体部下方に弱い稜線がめぐる。内面見込みに仕上げナデあり。底部外面ヘラ切り未調整。色調は底部外面白色気味。５片接合。	報Ⅳ、48図-155 本書、11図-42	166
43	［20.2］	—	6.7	14.9	50	杯Ｂ。断面台形状の貼付高台。見込みが深い。内面見込みに仕上げナデあり。底部外面ヘラ切り未調整。大形品。高台の一部に剥離あり。色調は白色気味。備前からの搬入品か(特徴的な墨飛び文様)。12片接合(うち、ＳＤ450出土の１片接合)。他に未接合破片５別置き。接点なし。	報Ⅳ、47図-134 本書、11図-43	167
44	［15.2］	—	3.5	—	40	杯Ｃ。口径は図上復元。口唇部は屈曲し、内傾する。底部は丸みを帯びる。底部との境界に弱い稜線がめぐる。底部外面ヘラ切り未調整。６片接合。	報Ⅳ、45図-96 本書、11図-44	168
45	［16.4］	—	4.2	—	60	杯Ｃ。口唇部は屈曲し、内傾する。底部は丸みを帯び中央がくぼむ。底部との境界に弱い稜線がめぐる。自然釉付着。降灰あり。４片接合（うち、ＳＤ450出土の１片接合）。他に未接合破片２別置き。接点なし。	報Ⅳ、45図-97 本書、11図-45	169
46	［10.0］	—	3.6	—	30	杯Ｄ。口径は図上復元。口縁部は湾曲気味に立ち上がり、底部が丸みを帯びる。重ね焼き痕跡あり。底部外面ヘラ切り未調整。色調は器面が黒色土器状態。底部は白色気味。	報Ⅳ、45図-99 本書、11図-46	170
47	9.6	—	2.8	7.0	95	小皿。口縁部は外上方に立ち上がり、底部は平底。底部外面ヘラ切り未調整で、粘土の一部が外方にはみ出す。色調は白色気味。内外面ともに煤付着(芯痕跡明瞭)。灯明皿。	報Ⅳ、45図-100 本書、11図-47	171
48	19.6	—	2.6	—	90	皿Ａ。低い体部が立ち上がる。底部は丸みを帯び中央がくぼむ。内面見込み・底部外面ともに仕上げナデあり。大形品。５片接合(うち、ＳＤ450出土の１片接合)。	報Ⅳ、45図-103 本書、12図-48	172
49	20.8	—	4.1	—	50	皿Ａ。口縁部が外湾気味に立ち上がり、底部は丸みを帯びる。内面見込みに仕上げナデあり。底部外面不定方向のケズリ。重ね焼き痕跡あり。大形品。色調は内面白色気味。外面灰黒色気味。16片接合(うち、ＳＤ450出土の２片接合)。	報Ⅳ、45図-104 本書、12図-49	173
50	［20.4］	—	3.1	［13.2］	40	皿Ｂ。口径は図上復元。断面台形状の貼付高台。口縁部は折れ曲がって上方に延び、内面に凹線が1条めぐる。内面見込みに仕上げナデあり。降灰あり。全体のつくりは杯Ｂ蓋に似る。９片接合(うち、ＳＤ450出土の２片接合)。	本書、12図-50	174
51	［21.0］	—	3.0	13.8	60	皿Ｂ。断面台形状の貼付高台。口縁部は外側上方に立ち上がる。内面見込みに仕上げナデあり。底部外面ヘラ切り未調整。底部高台内に連続した爪形状の圧痕あり。色調は白色気味。内面に煤付着。６片接合(うち、ＳＤ450出土の１片接合)。	報Ⅳ、48図-157 本書、12図-51	175
52	［23.0］	—	4.4	［17.8］	30	皿Ｂ。口径は図上復元。断面台形状の貼付高台。口縁部は外側上方に大きく開き、体部下方に弱い稜線がめぐる。内面見込みに仕上げナデあり。色調は白色気味。器壁の断面黒色。	報Ⅳ、48図-158 本書、12図-52	176
53	［30.4］	—	5.0	［25.4］	30	盤Ｂ。断面逆菱形状の貼付高台(高台の内側を強く撫でる)。口縁部は外側上方に立ち上がり、体部下方に稜線がめぐる。内面見込みに仕上げナデあり。重ね焼き痕跡あり。色調は外面灰黒色、内面見込み及び底部高台内は白色気味。大形品。６片接合(うち、ＳＤ450出土の１片接合)。	報Ⅳ、48図-159 本書、12図-53	177
54	14.5	—	—	—	50	壺蓋。つまみ欠損。体部は扁平で、口縁部が下方に折れ曲がる。天井部にひずみあり。降灰あり。硯に転用。２片接合。	本書、12図-54	178
55	—	—	—	脚端径 ［14.2］	30	高杯。脚端部径は図上復元。脚柱部片。脚端はラッパ状に開く（脚端部は僅かに遺存）。中央に２条の凹線がめぐる。自然釉付着。降灰あり。12片接合（うち、ＳＤ450出土の11片接合）。	報Ⅳ、48図-160 本書、12図-55	179
56	［26.6］	—	12.2	16.5	50	把手付鉢。扁平な牛角状の把手が両側に一対付く(先端は内側に折り曲げる)。口縁部は内湾気味に上方に立ち上がる。内面見込みに仕上げナデあり。底部は平底気味。底部外面ナデ調整(中央に指頭圧痕が明瞭)。降灰あり。７片接合(うち、ＳＤ450出土の１片接合)。	報Ⅳ、48図-162 本書、12図-56	180
57	［35.6］	—	12.3	［18.4］	40	把手付鉢。口径は図上復元。断面楕円形の牛角状の把手が両側に一対付く(うち、１欠)。口縁部は外反して外側上方に延びる。内面見込みに仕上げナデあり。把手部分の内面に明瞭な指頭圧痕あり。底部は平底。底部外面ナデ仕上げ。色調は内面白色気味。３片接合。他に未接合破片１別置き。接点なし。	本書、12図-57	181

土師器残欠　　5点

番号	口径	器高	底径	遺存率	品質形状等	報告書番号	通番
1	［20.0］	2.1	－	20	皿 (畿内産土師器)。口径は図上復元。口唇部内面に沈線が 1 条めぐる。底部は平底だが、体部との境界に丸みをもつ。底面ナデツケ。指頭圧痕が著しい。胎土精良。鉄分が網目状に付着する。11 片接合 (うち、S D450 出土の 3 片接合)。他に未接合破片 3 別置き。うち、1 接点なし。	報Ⅳ、49図-164 本書、13図-1	182
2	［21.0］	2.5	－	40	皿(畿内産土師器)。口径は図上復元。口唇部は外湾し、底部は平底だが、体部との境界に丸みをもつ。底面ナデツケ。指頭圧痕が著しい。胎土精良。器面に鉄分の付着が著しい。10片接合(うち、 S D450出土の 5 片接合)。	報Ⅳ、49図-165 本書、13図-2	183
3	23.2	3.0	－	60	皿(畿内産土師器)。口唇部内面に沈線が1条めぐる。内面に粗い放射状暗文あり。底部は平底だが、体部との境界に丸みをもつ。底面ナデツケ。指頭圧痕が著しい。29片接合(うち、 S D450出土の 1 片接合)。他に未接合片 9 別置き。接点なし。	報Ⅳ、49図-166 本書、13図-3	184
4	15.0	16.5	－	70	甕。口頸部が外側上方に「く」字状に折れ曲がり、体部は球体状に膨らむ。底部は丸底を呈する。口縁部ヨコナデ。体部は外面ナデ。内面ヘラケズリ。内外面ともに煤付着。外面被熱痕あり。小形品。52片接合。	報Ⅳ、49図-167 本書、13図-4	185
5	［24.6］	(14.8)	－	20	甕。口径は図上復元。口縁部～胴部上半の残欠。口頸部は外側上方に「く」字状に折れ曲がり、体部は球体状に膨らむ。外面タテハケ。内面斜ハケ。外面に煤付着。大形品。15片接合(うち、 S D450出土の 1 片接合)。	本書、13図-5	186

焼塩土器残欠　　16点

番号	口径	器高	底径	遺存率	品質形状等	報告書番号	通番
1	11.7 ～ 12.5	(11.6)	－	60	焼塩土器 A。口縁部がひずむ。体部外面は指頭圧痕が著しく、内面は指ナデ。底部欠損。色調は暗灰色だが、一部は赤褐色。被熱による降灰が著しい。15片接合(うち、 S D450出土の 5 片接合)。	報Ⅳ、50図-1 本書、14図-1	187
2	10.0 ～ 12.0	(11.8)	－	40	焼塩土器 A。口縁部が大きくひずむ、体部外面は指頭圧痕が著しく、内面は指ナデ。底部欠損。被熱による降灰が著しい。18 片接合 (うち、S D450 出土の 4 片接合)。	報Ⅳ、50図-2 本書、14図-2	188
3	［12.4］	(9.5)	－	30	焼塩土器 A。体部外面は指頭圧痕が著しく、内面は指ナデ。底部欠損。内面煤付着。被熱による降灰あり。10片接合(うち、 S D450出土の 4 片接合)。	報Ⅳ、50図-3 本書、14図-3	189
4	12.2	(10.9)	－	30	焼塩土器 A。体部外面は指頭圧痕が著しく、内面は指ナデ。底部欠損。外面煤付着。色調は外面の一部が明赤灰色。被熱による降灰あり。10片接合(うち、 S D450出土の 2 片接合)。	報Ⅳ、50図-4 本書、14図-4	190
5	11.0	(11.1)	－	60	焼塩土器 A。体部外面は指頭圧痕が著しく、内面は指ナデ。底部欠損。色調は外面一部が赤褐色、内面暗灰色。13片接合(うち、 S D450出土の12片接合)。	報Ⅳ、50図-5 本書、14図-5	191
6	［14.2］	(8.1)	－	20	焼塩土器 A。体部外面は指頭圧痕が著しく、内面は指ナデ。底部欠損。色調灰白色。被熱による自然釉の付着と降灰あり。 7 片接合。	報Ⅳ、50図-6 本書、14図-6	192
7	11.5 ～ 12.5	(9.4)	－	40	焼塩土器 A。体部外面は指頭圧痕が著しく、内面は指ナデ。底部欠損。色調は黒色。被熱による降灰あり。22片接合(うち、 S D450出土の 3 片接合)。	報Ⅳ、50図-7 本書、14図-7	193
8	12.2	(11.8)	－	60	塩焼土器 A。体部外面は指頭圧痕が著しく、内面は指ナデ。底部欠損。色調は暗灰色。被熱による降灰あり。17片接合(うち、 S D450出土の 2 片接合)。	報Ⅳ、50図-8 本書、14図-8	194
9	10.8 ～ 12.0	(11.6)	－	80	焼塩土器 A。口縁部が大きくひずむ。体部外面は指頭圧痕が著しく、内面は指ナデ。底部欠損。色調は外面の一部及び内面が橙色。被熱による降灰あり。31片接合(うち、 S D450出土の17片接合)。	報Ⅳ、50図-9 本書、14図-9	195
10	12.7	(12.6)	－	70	焼塩土器 A。体部外面は指頭圧痕が著しく、内面は指ナデ。底部欠損。色調は橙色。30片接合(うち、 S D450出土の14片接合)。	報Ⅳ、50図-10 本書、14図-10	196
11	11.8	(12.3)	－	40	焼塩土器 A。体部外面は指頭圧痕が著しく、内面は指ナデ。底部欠損。色調は灰色で、外面一部明赤灰色。被熱による降灰あり。外面煤付着。18片接合(うち、 S D450出土の10片接合)。他に未接合破片 4 別置き。接点なし。	報Ⅳ、50図-11 本書、14図-11	197
12	［11.8］	(8.5)	－	30	焼塩土器 A。口径は図上復元。体部外面は指頭圧痕が著しく、内面は指ナデ。底部欠損。色調は外面が褐灰色、内面はにぶい黄橙色。被熱による降灰あり。4片接合(うち、SD450出土の 2 片接合)。他に未接合破片 1 別置き。接点なし。	報Ⅳ、50図-12 本書、14図-12	198
13	12.0	(10.7)	－	40	焼塩土器 A。体部外面は指頭圧痕が著しく、内面は指ナデ。底部欠損。色調は橙色で、外面に明瞭な黒斑あり。12片を 2 組に接合接点なし。	本書、14図-13	199
14	［13.0］	(10.9)	－	30	焼塩土器 B。口縁端部を内側に折り曲げる。体部外面は指頭圧痕が著しく、内面には細かな布目圧痕が見られる。底部欠損。色調は外面が灰白色。内面は浅黄橙色。 9 片接合。	報Ⅳ、50図-13 本書、15図-14	200
15	［13.7］	(10.5)	－	40	焼塩土器 B。口縁端部を内側に折り曲げる。体部外面は指頭圧痕が著しく、内面は細かな布目圧痕が見られる。底部欠損。色調は橙色。 9 片接合(うち、S D 450出土の 2 片接合)。	報Ⅳ、50図-14 本書、15図-15	201
16	12.3	(9.3)	－	30	焼塩土器 B。口縁端部を内側に折り曲げる。体部外面は指頭圧痕が著しく、内面は細かな布目圧痕が見られる。底部欠損。色調は外面が灰褐色、内面は橙色。 8 片接合 (うち、S D450 出土の 3 片接合)。	報Ⅳ、50図-15 本書、15図-16	202

1. 木器・木製品　50点

木簡再生品　4点

番号	長	幅	厚	品質形状等	報告書番号	通番
1	14.9	2.6	0.4	木簡の再生品。031型式。完形。上下両端ともに切り折り。上下両側に切り込みあり。上端の一部にほつれ毛状の亀裂あり。細片1接合(上部の切り込みの上)。表面は剥ぎ取り状削りの上にうろこ状の削り、裏面は割き形成で未調整。保存処理済(高級アルコール含浸法)。専用アクリルケースあり。	報Ⅳ、32図-32 本書、16図-1	203
2	19.4	2.7	0.4	木簡の再生品。031 型式。完形。上下端ともに斜め切り落し。上下両側に切り込みあり。表面は剥ぎ取り状削りの上にうろこ状の削り、裏面は割き成形 (一部にほつれ毛状の亀裂あり)。保存処理済 (高級アルコール含浸法)。専用アクリルケースあり。	報Ⅳ、32図-33 本書、16図-2	204
3	11.7	2.2	0.4	木簡の再生品。031 型式。完形。上下端ともに切り落し。上下両側に切り込みあり。表面は剥ぎ取り状削りの上にうろこ状の削り、裏面は剥ぎ取り状の削り。片側面に亀裂状の剥離あり。保存処理済 (高級アルコール含浸法)。専用アクリルケースあり。	報Ⅳ、32図-34 本書、16図-3	205
4	(20.1)	3.9	0.6	木簡の再生品。039 型式。上端は削り。上部両側に切り込みあり。細片 1 接合 (上部の切り込みの上)。表面は剥ぎ取り状削り。下端欠損 (腐食によるほつれ毛状の亀裂あり)。全体的に上下からの亀裂あり。保存処理済 (高級アルコール含浸法)。専用アクリルケースあり。	本書、16図-4	206

糸巻残欠　2点

番号	長	幅	厚	品質形状等	報告書番号	通番
5	(11.5)	2.1	0.5	枠木を固定する横木。中央に軸孔(小孔貫通)。片面にほつれ毛状の亀裂あり。片端欠損(細片1接合、腐食によるほつれ毛状の亀裂あり)。中央厚0.3㎝。端の形状は楕円形(0.5×0.7㎝)。保存処理済(高級アルコール含浸法)。	報Ⅳ、51図-1 本書、16図-5	207
6	11.9	1.8	1.0	枠木を固定する横木。両端にほつれ毛状の亀裂あり。中央厚0.5㎝。端の形状は隅丸方形(0.7×0.8㎝)。未成品か(軸孔なし)。保存処理済(高級アルコール含浸法)。	本書、16図-6	208

槍扇残欠　7点

番号	長	幅	厚	品質形状等	報告書番号	通番
7	(12.1)	(2.2)	0.1	糸柾ヒノキの薄材。基部の残欠。橋5枚が残存。頭部をリベット状に削り出した木製の要で綴じる(中央で「く」字状に曲がる)。各橋の両側に２か所ずつ切り込みあり。基部の両隅は丸みをもつ。要頭部は楕円形(径0.5×0.6㎝)。軸径0.3㎝。保存処理済(高級アルコール含浸法)。	報Ⅳ、51図-2 本書、16図-7	209
8	(23.9)	(1.9)	0.1	糸柾ヒノキの薄材。下端は圭頭状。基部に要孔。上部に綴孔あり(通番211～215と組み合う)。半裁。片側面に亀裂状の剥離あり。上方からの亀裂あり。保存処理済(高級アルコール含浸法)。	報Ⅳ、51図-3 本書、16図-8	210
9	(23.7)	(1.7)	0.1	糸柾ヒノキの薄材。下端は圭頭状。基部に要孔。上部に綴孔あり(通番210・212～215と組み合う)。両側縁欠損。側面に亀裂状の剥離あり。上下からの亀裂あり。２片未接合。接点あり。他に細片５片別置き。接点なし。保存処理済(高級アルコール含浸法)。	報Ⅳ、51図-4 本書、16図-9	211
10	(23.1)	(2.0)	0.1	糸柾ヒノキの薄材。下端は圭頭状。基部に要孔。上部に綴孔あり(通番210・211・213～215と組み合う)。細片1結合(綴孔の下)。上端腐食による欠損。半裁。片側面に亀裂状の剥離あり。中央に横方向の折れあり。保存処理済(高級アルコール含浸法)。	報Ⅳ、51図-5 本書、16図-10	212
11	(23.1)	(3.1)	0.1	糸柾ヒノキの薄材。下端は圭頭状。基部に要孔。上部に綴孔あり(通番210～212・214・215と組み合う)。片側面に亀裂状の剥離あり。上下からの亀裂あり。保存処理済(高級アルコール含浸法)。	報Ⅳ、51図-6 本書、16図-11	213
12	(21.9)	(2.7)	0.1	糸柾ヒノキの薄材。下端は圭頭状。基部に要孔。上部に綴孔あり(通番210～213・215と組み合う)。半裁。片側面に亀裂状の剥離あり。下方からの亀裂あり。保存処理済(高級アルコール含浸法)。	報Ⅳ、51図-7 本書、16図-12	214
13	(23.6)	(2.4)	0.1	糸柾ヒノキの薄材。下端は圭頭状。基部に要孔。上部に綴孔あり(通番210～214と組み合う)。半裁片側面に亀裂状の剥離あり。下半は大きく欠損(残存幅約1.2㎝)。保存処理済(高級アルコール含浸法)。	報Ⅳ、51図-8 本書、16図-13	215

杓　子　3点

番号	長	幅	厚	遺存率	品質形状等	報告書番号	通番
14	(33.6)	(6.3)	0.5	80	しゃもじ形。身の両側と身の先端ともに欠損。身の両側は腐食による亀裂状の剥離。身の先端はほつれ毛状の亀裂あり。柄の基部は若干広がり、端部は圭頭状で弱く尖る。全体的に劣化が著しい。柄の幅2.4㎝、柄の厚2.1㎝で、柄の基部幅2.7㎝。保存処理済(真空凍結乾燥法)。	報Ⅳ、52図-10 本書、16図-14	216
15	(31.4)	(10.2)	0.6	90	しゃもじ形。身の先端は隅丸方形状。身の基部と柄の下方を欠損。全体的に劣化しており、上下からの亀裂が著しい。柄の幅2.9㎝、柄の厚0.8㎝。保存処理済(真空凍結乾燥法)。	報Ⅳ、52図-11 本書、17図-15	217
16	(24.9)	5.0	1.0	90	しゃもじ形。柄の幅に比べて身の幅が細い。柄の下方欠損。全体的に劣化しており、上下両端は亀裂が著しい。柄の幅1.7㎝、柄の厚1.0㎝で、隅丸方形状を呈する。保存処理済(高級アルコール含浸法)。	本書、17図-16	218

箸　　17点

番号	長	径（最小・最大）	遺存率	品質形状等	報告書番号	通番
17	36.6	0.4・0.8	100	完形。断面は円形。全体に面取り状の削り。上下両端ともに斜め削り(尖る)。全体が弓状に曲がる。ヒノキ材。保存処理済(高級アルコール含浸法)。法会に出仕した僧侶の人数を確認するための「籌」あるいはその再利用品の可能性あり(以下、通番235まで同じ)。	本書、17図-17	219
18	(33.5)	0.5・0.8	98	片端小欠。断面は円形。全体に面取り状の削り。片端は面取り削り。片端は尖る。側縁に約1.6㎝の抉れあり。ヒノキ材。保存処理済(高級アルコール含浸法)。	本書、17図-18	220
19	28.7	0.4・0.6	100	断面は円形。全体に面取り状の削り。片端は切り折り。片端は面取り削り(尖る)。２片接合。「く」字状に折れ曲がる。ヒノキ材。保存処理済(高級アルコール含浸法)。	本書、17図-19	221
20	28.3	0.6・0.7	100	完形。断面は円形。全体に面取り状の削り。上下両端ともに斜め削り。全体が弓状に曲がる。ヒノキ材。保存処理済(高級アルコール含浸法)。	本書、17図-20	222
21	27.1	0.4・0.7	100	完形。断面は円形。全体に面取り状の削り。片端は切り折り。片端は面取り削り。片端に横方向の亀裂あり。弓状に曲がる。ヒノキ材。保存処理済(高級アルコール含浸法)。	本書、17図-21	223
22	26.0	0.4・0.9	100	完形。断面はやや楕円形。全体に面取り状の削り。片端は斜め削り。片端は切り折り。ヒノキ材。保存処理済(高級アルコール含浸法)。	本書、17図-22	224
23	25.5	0.4・0.7	100	完形。断面は方形。全体に面取り状の削り。両端はともに面取り削り。全体が弓状に曲がる。ヒノキ材。保存処理済(高級アルコール含浸法)。	本書、17図-23	225
24	(23.5)	0.4・0.6	98	片端小欠。断面は円形。全体に面取り状の削り。片端は面取り削り。片端に腐食によるほつれ毛状の亀裂あり。中央が「く」字状に曲がる。ヒノキ材。保存処理済(高級アルコール含浸法)。	本書、17図-24	226
25	(22.3)	0.3・0.5	95	両端小欠。断面は方形。全体に面取り状の削り。両端に腐食によるほつれ毛状の亀裂あり。ヒノキ材。保存処理済(高級アルコール含浸法)。	本書、17図-25	227
26	(21.1)	0.4・0.7	98	片端小欠。断面は円形。全体に面取り状の削り。片端は面取り削り。片端に腐食によるほつれ毛状の亀裂あり。中央に横方向の亀裂あり。２片接合。ヒノキ材。保存処理済(高級アルコール含浸法)。	本書、17図-26	228
27	20.0	0.4・0.6	100	完形。断面は円形。全体に面取り状の削り。両端ともに面取り削り。ヒノキ材。保存処理済(高級アルコール含浸法)。	本書、17図-27	229
28	19.2	0.5・0.6	100	断面は円形。全体に面取り状の削り。両端ともに面取り削り。２片接合。下方に横方向の亀裂あり。ヒノキ材。保存処理済(高級アルコール含浸法)。	本書、17図-28	230
29	18.8	0.3・0.6	100	断面は楕円形。全体に面取り状の削り。両端ともに面取り削り。２片接合。下方に横方向の亀裂あり。ヒノキ材。保存処理済(高級アルコール含浸法)。	本書、17図-29	231
30	16.1	0.5・0.7	100	完形。断面は円形。全体に面取り状の削り。片端は面取り削り。片端は切り折り。ヒノキ材。保存処理済(高級アルコール含浸法)。	本書、17図-30	232
31	(15.9)	0.4・0.7	80	両端欠損(腐食か)。断面は楕円形。全体に面取り状の削り。ヒノキ材。保存処理済(高級アルコール含浸法)。	本書、17図-31	233
32	15.7	0.4・0.6	100	完形。断面は円形。全体に面取り状の削り。両端ともに面取り削り。ヒノキ材。保存処理済(高級アルコール含浸法)。	本書、17図-32	234
33	14.5	0.4・0.6	100	完形。断面は円形。全体に面取り状の削り。片端は切り折り。片端は面取り削り。ヒノキ材。保存処理済(高級アルコール含浸法)。	本書、17図-33	235

物指残欠　　２点

番号	長	幅	厚	品質形状等	報告書番号	通番
34	(21.5)	2.3	0.7	細いヒノキ板材の片面に刻線。片端欠。刻線の間隔は1.6～2.0㎝とまちまち。片端に焼焦げ痕あり。２片接合。保存処理済(高級アルコール含浸法)。	報Ⅳ、52図-12 本書、17図-34	236
35	(17.0)	3.1	1.0	粗いケズリを施したヒノキ板材の両面に罫書線。片側縁に３か所の弧状の切り込みあり。片端は切り折り。罫書線の間隔は3.0～3.5㎝。写経罫線用か。保存処理済(高級アルコール含浸法)。専用のアクリルケースあり。	本書、18図-35	237

角　筆　　６点

番号	長	断面	遺存率	品質形状等	報告書番号	通番
36	(20.0)	0.8×0.9	80	上端欠損。断面は方形。先端は面取り状の削りによって断面が丸く尖る。全体が弓状に曲がる。保存処理済(高級アルコール含浸法)。	本書、18図-36	238
37	15.2	0.6×0.8	100	完形、断面は楕円形状。先端は面取り状の削りによって尖る。上端は斜め切り落し。保存処理済(高級アルコール含浸法)。	本書、18図-37	239
38	15.0	0.7×1.1	100	完形。断面は方形。先端は尖るが、腐食によってほつれ毛状になる。保存処理済(高級アルコール含浸法)。	本書、18図-38	240
39	(14.1)	0.8×0.9	80	上端欠損。断面は方形。先端は面取り状の削りによって断面が丸く尖る。保存処理済(高級アルコール含浸法)。	本書、18図-39	241
40	(13.8)	0.8×1.2	80	上端欠損。断面は台形状。先端は面取り状の削りによって断面が丸く尖る。保存処理済(高級アルコール含浸法)。	本書、18図-40	242

41	12.0	0.6×0.7	100	完形。断面は方形。先端は尖るが、腐食によって僅かにほつれ毛状になる。上端は斜め切り落し。保存処理済(高級アルコール含浸法)。	本書、18図-41	243

不明木製品　　９点

番号	長	幅	厚	遺存率	品質形状等	報告書番号	通番
42	(19.4)	1.7	0.8	95	鳥形木製品か。木片を加工したもの。頭から首にかけて削り出し、翼と尾羽は段を設けることで表現する。側面観を重視した形状。尾部は欠損。頭部長2.3㎝、幅1.4㎝、厚さ0.7㎝。前後両側から亀裂あり。保存処理済(高級アルコール含浸法)。	報Ⅳ、52図-13 本書、18図-42	244
43	12.9	1.3	0.4	100	斎串状木製品。完形。細長い薄板。上端は圭頭状。下端は剣先状に尖る。表裏両面はともに剥ぎ取り状の削り。側面の一部に僅かにほつれ毛状の亀裂あり。保存処理済(高級アルコール含浸法)。	本書、18図-43	245
44	30.2	0.9	0.5	100	ササラ状の木製品。完形。薄く細長い木片の片側面に鋸歯状の切り込みを施したもの。切り込みは７つ。表面は剥ぎ取り状削り。上下両端は薄く削り出す。全体が弓状に曲がる。保存処理済(高級アルコール含浸法)。	報Ⅳ、52図-14 本書、18図-44	246
45	16.9	1.1	0.3	100	箆か。完形。薄い木片を利用したもの。先端に向かうに従って細くなり、端部は丸みを帯び尖る。基部は斜めの切り落し。全体を薄く削り出す。基部のみ弓状に曲がる。保存処理済(高級アルコール含浸法)。	報Ⅳ、52図-15 本書、18図-45	247
46	14.3	1.5	0.4	100	箆か。完形。断面は長方形。先端は途中から全面を削り、端部は丸くおさめる。基部は斜め切り落し。全体的に表面に黒しみあり。保存処理済(高級アルコール含浸法)。専用アクリルケースあり。	本書、18図-46	248
47	(15.0)	1.8	1.2	80	髪の留針か。頭部を鋲頭状に削り出すが、上端は欠損か。先端も欠損。断面は楕円形。保存処理済(真空凍結乾燥法)。	報Ⅳ、51図-9 本書、18図-47	249
48	(13.7)	2.0	1.2	80	髪の留針か。頭部を鋲頭状に削り出し、上端を圭頭形に整える。途中で折れており、「く」字状に曲がり亀裂あり。先端は欠損。断面は楕円形。保存処理済(高級アルコール含浸法)。	本書、18図-48	250
49	57.3	8.9	3.0	100	剣形木製品か。杓子形にも見えるが身が厚いため攪拌には適さない。柄の基部は円盤状に削り出す。身は細長く先端が丸い。断面は凸レンズ状。片面と片側面に著しいケズリ加工痕あり。柄のくびれ部の幅3.6㎝、厚さ2.2㎝、基部幅6.2㎝、厚さ2.0㎝。保存処理済(高級アルコール含浸法)。	報Ⅳ、53図-16 本書、19図-49	251
50	(50.7)	5.3	2.8	70	剣形木製品か。剣形だが身は厚く、先端を丸くおさめ、身の中央が深さ18㎝程度抉られている。文書等を挟む道具(文挟)か。基部欠損。全体的に腐食が著しい。亀裂あり。柄幅2.3㎝、柄厚1.6～1.9㎝。保存処理済(高級アルコール含浸法)。	本書、19図-50	252

1. 植物遺存体（自然遺物）

番号	長	幅	厚	品質形状等	報告書番号	通番
1	2.4	1.5	1.1	ウメの核。法量は最大のもの。褐色で扁平な楕円形を呈し、縁に稜をもつ。稜の左右には溝がある。栽培種を含むか。表面には多数の窪みが見られる。完形３点。保存処理済(高級アルコール含浸法)。チャック付ポリ袋入り。	報Ⅴ、附編	―
2	2.5	2.1	1.4	モモの核。法量は最大のもの。楕円形。表面には縦方向の短い溝と、多数の窪みが見られる。栽培種を含むか。完形45点。残欠18点。保存処理済(高級アルコール含浸法)。チャック付ポリ袋入り。	報Ⅴ、附編	―
3	1.4	1.1	0.8	スモモの核。法量は最大のもの。褐色で扁平な楕円形を呈し、縁に稜線をもつ。稜の左右には溝がある。栽培種を含むか。完形63点。残欠31点。保存処理済(高級アルコール含浸法)。チャック付ポリ袋入り。	報Ⅴ、附編	―
4	0.8	0.7	0.5	ヤマモモの核。法量は最大のもの。茶褐色で、縁に稜線をもつ。完形６点。保存処理済(高級アルコール含浸法)。チャック付ポリ袋入り。	報Ⅴ、附編	―
5	2.2	2.0	―	オニグルミの核。法量は最大のもの。褐色でやや楕円形を呈する。一部は核の表面が炭化している。核の片側５点。保存処理済(高級アルコール含浸法)。チャック付ポリ袋入り。	報Ⅴ、附編	―
6	0.4	0.2	0.2	サンショウの種子。法量は最大のもの。黒色で幅広な卵形を呈し、腹面の一端から先端までと、背面の一部には稜がある。腹面の先端近くにあるヘソは、卵形のくぼみとなる。完形５点。残欠１点。保存処理済(高級アルコール含浸法)。チャック付ポリ袋入り。	報Ⅴ、附編	―
7	0.3	0.2	0.2	イヌザンショウの種子。黒色で幅広な卵形を呈し、ヘソは大形の溝状をなす。完形１点。残欠１点。保存処理済(高級アルコール含浸法)。チャック付ポリ袋入り。	報Ⅴ、附編	―
8	―	―	―	クリ果皮。カヤ種皮。マツ種子。センダン核等の堅果(種実)類。イヌマキ種子か。イヌガヤ種子。コブシ種子。ハシバミ果皮。エノキグサ種子。クスノキ種子。シイ属果皮。ホルトノキ果皮。ヒョウタン種子。ウリ種子。ヒョウタン属果皮。カボチャ種子。以上各１袋。不明種子等７袋。以上合計23袋。保存処理済(高級アルコール含浸法)。チャック付ポリ袋入り。	報Ⅴ、附編	―

65 □ 091型式

66 □ 091型式

67 □□ 091型式

68 □□□ 091型式

69 □ 091型式

70 □ 091型式

71 □ 091型式

72 □□□ 091型式

73 □□□□ 091型式

74 □ 091型式

75 □□□ 091型式

76 □□ 091型式

77 □□□ 091型式

78 □□□□ 091型式

79 □ 091型式

80 □ 091型式

81 □□□ 091型式

82 □ 091型式

39 「∨□□ ※(116)×36×3 039型式

40 「∨□□□□∨」 ※142×21×6 031型式

41 「∨□□□□∨ ※(187)×(25)×5 031型式

42 「□□ ※(102)×23×2 019型式

43 「□□□□」 ※208×29×3 051型式

44 「∨□（封緘木簡） ※(193)×38×3 039型式

45 □ □」 ※(166)×27×1 061型式

46 「葛木マ□足 ※(92)×(18)×2 081型式

47 □□ ○ □□」 ※(150)×(15)×2 081型式

48 □□〔斗カ〕 ※(88)×(18)×4 081型式

49 ・□□□□□□ ・ □ □ ※(183)×(15)×3 081型式

50 □□ □□ □」 ※(104)×15×3 081型式

51 ・□ 堂□〔子カ〕□□□ ・□ □ ※(121)×(17)×2 081型式

52 □□〔石木カ〕 ※(39)×19×2 081型式

53 野□（刻書） ※(31)×20×3 081型式

54 ・□□ ・□□ ※(37)×(9)×6 081型式

55 □〔白カ〕（横材） 091型式

56 □可□ 091型式

57 謹白 091型式

58 □□□升〔九斗五カ〕 091型式

59 料（横材） 091型式

60 □□ 091型式

61 □□（横材） 091型式

62 □□ 091型式

63 □ □□ □ 091型式

64 □□ 091型式

18
・「＜□□〔油カ〕〔四カ〕石四斗□□□□」
・「＜□□」
※(188)×27×7　039型式

19
「＜□□□□□〔山カ〕□□〔安居料カ〕□□」
※150×18.5×4　032型式

20
「廿連＜」
※116×17×7　032型式

21
「＜小豆四×
※(111)×20×3.5　039型式

22
「枡子」
※201×23×6　011型式

23
＜封（封緘木簡）
※(139)×37×3　039型式

24
「＜（墨線）（封緘木簡）
※(98)×38×4　039型式

25
・「□□」
・「□□」（題籤木簡）
※(355)×29×10　061型式

26
・「□〔得カ〕交易□
・「□□□□
※(85)×(37)×5　019型式

27
万呂□□□
※(274)×(18)×(3)　081型式

28
・「進□□　□
・「　□□□」
※(237)×(13)×9　081型式

29
・□□
・□□
※(89)×(8)×4　081型式

30
×□〔斗カ〕　＜」
※(101)×(17)×4　039型式

31
・□□九月十六日□□□
□　□　□□　□□□〔益万呂カ〕　」
・□　」
※(295)×(42)×4　019型式

32
・「□□□〔依カ〕□□□□□□〔日カ〕」
・「　□　」
※240×39×7　011型式

33
□□□□□〔八カ〕□□
※(168)×(30)×4　081型式

34
・□□　」
・　□□」
※(217)×(45)×3　081型式

35
「木綿□〔郷カ〕□マ信」
※116×16×2　051型式

36
「＜簀竹須一枚＜」
※ 92×17×3　031型式

37
□□□＜」
※(125)× 23×3　039型式

38
「＜□□」
※(93)×(18)×2　039型式

木簡の釈文

（「※」印の法量は保存処理前の計測値。単位はミリメートル。）

1
・□
□斗〔四カ〕『之之之』目大夫御料者　送人　秦人乙磨　付□□
『之之之之　之　之　之　之之　秦秦秦　秦』
・×□〔嶋カ〕　天平勝寶二年四月廿九日帳佐伯マ足嶋
※(553)×49.5×3.5　081型式

2
・御料二升五合『容客人□〔恵カ〕得□□□』
・×□五合〔升カ〕　七日用米三斗八升五合　廿日安藝郡□□〔下坐カ〕」
※(391)×36×7　019型式

3
・×□郷鋪設事
□□×〔薦カ□
茵二枚　葆□〔二カ〕
・×□鋪〔郷カ〕設事
□〔薦カ〕一枚　□茵〔座カ〕二□
□□枚　□□枚〔保三カ〕
※(180)×31×6　081型式

4
・□□
○□□共養〔供〕用米事　□
・二□□　○□人　□□□
□□□
※(295)×22×6　081型式

5
「〈佐伯郡米五斗」
※173×20×3.5　032型式

6
「山方郡葆〈」
※88×21.5×3　032型式

7
「山方郡六□〔月カ〕佐良〈」
※166×14×2　032型式

8
「〈山方郡宇伎郷簀」
※83×15×4　032型式

9
「〈高宮郡竹原□□□〔米カ〕」
※193×24×7　032型式

10
「沙田郡□□□」
※(115)×29×3.5　019型式

11
「〈沙田郡□□□□□〔郷米五斗カ〕〈」
※145×21×6　031型式

12
「〈木綿郷供料五斗〈」
※180×24×4　031型式

13
・「〈高□□□〔屋郷坐カ〕茵一枚」
・「〈□□」
※141×26×4　032型式

14
「〈原里〈」
※94×20×4　031型式

15
「〈□□」
※(97)×24×4　039型式

16
「□□□□□□□〔加カ〕〔米石二斗五升カ〕」
※171×17×5　051型式

17
「〈□□□〔沙田カ〕[　]□□□〔四升五合カ〕」
※142×21×3　032型式

木簡の凡例

木簡釈文の凡例は、次のとおりである。

・木簡型式　型式番号は、木簡学会のものを用いた。

・「　」　木簡の上端及び下端が原型をとどめているもの。

・＜　木簡の上端・下端に切り込みがあるもの。

・○　穿孔があるもの。

・□□□　欠損文字のうち、文字数が確認できるもの。

・［　］　欠損文字のうち、文字数が明らかでないもの。

・×　前後に文字の続くことが推定されるが、折損などで文字が失われているもの。

・『　』　異筆、または追筆。

・〔カ〕　推定される文字。

・（　）　文字の注釈。

・・　表裏の文字を区別したもの。

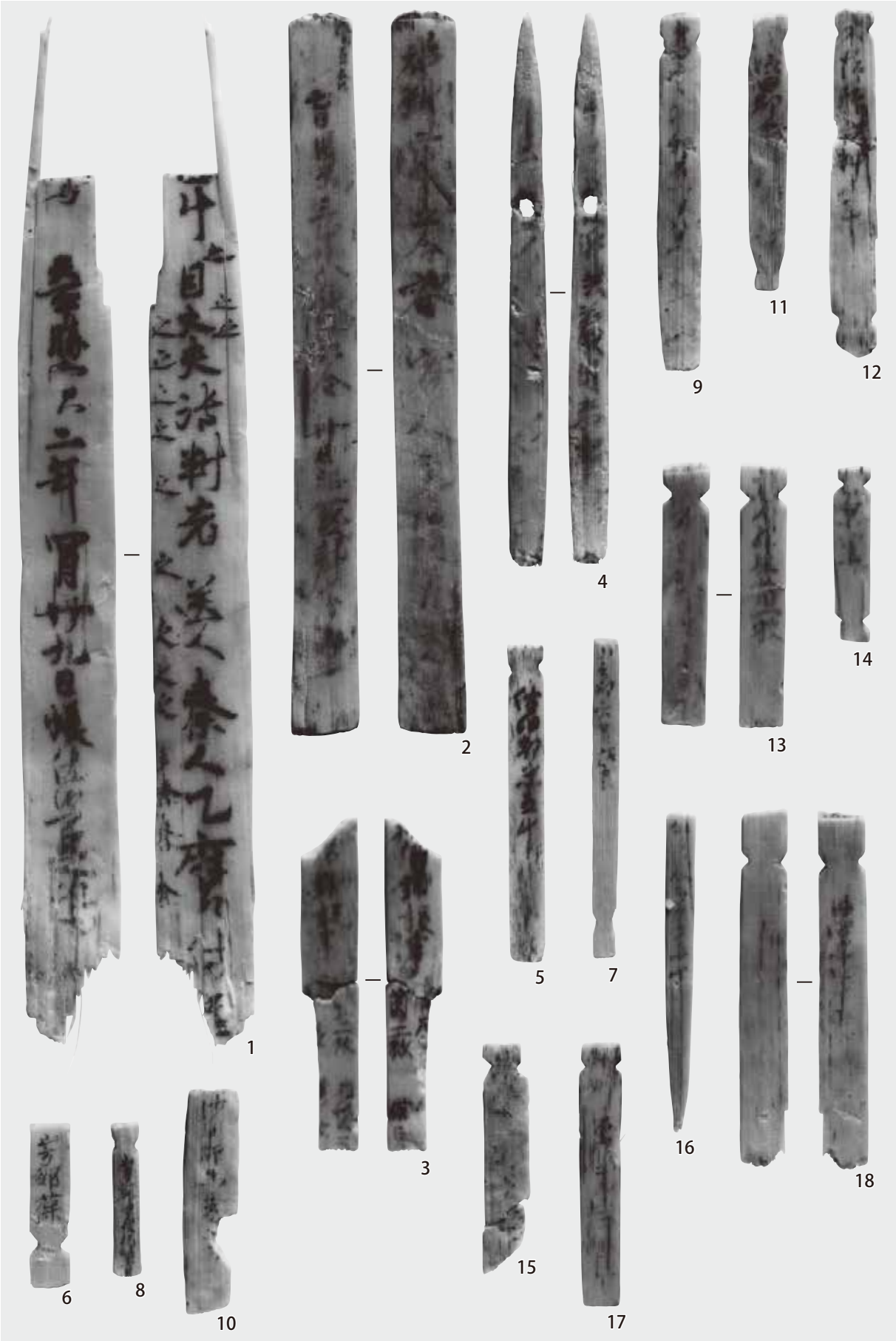
・／　同じ面に書かれているが、行が異なる文字。

四五一号土坑出土の木簡の釈文

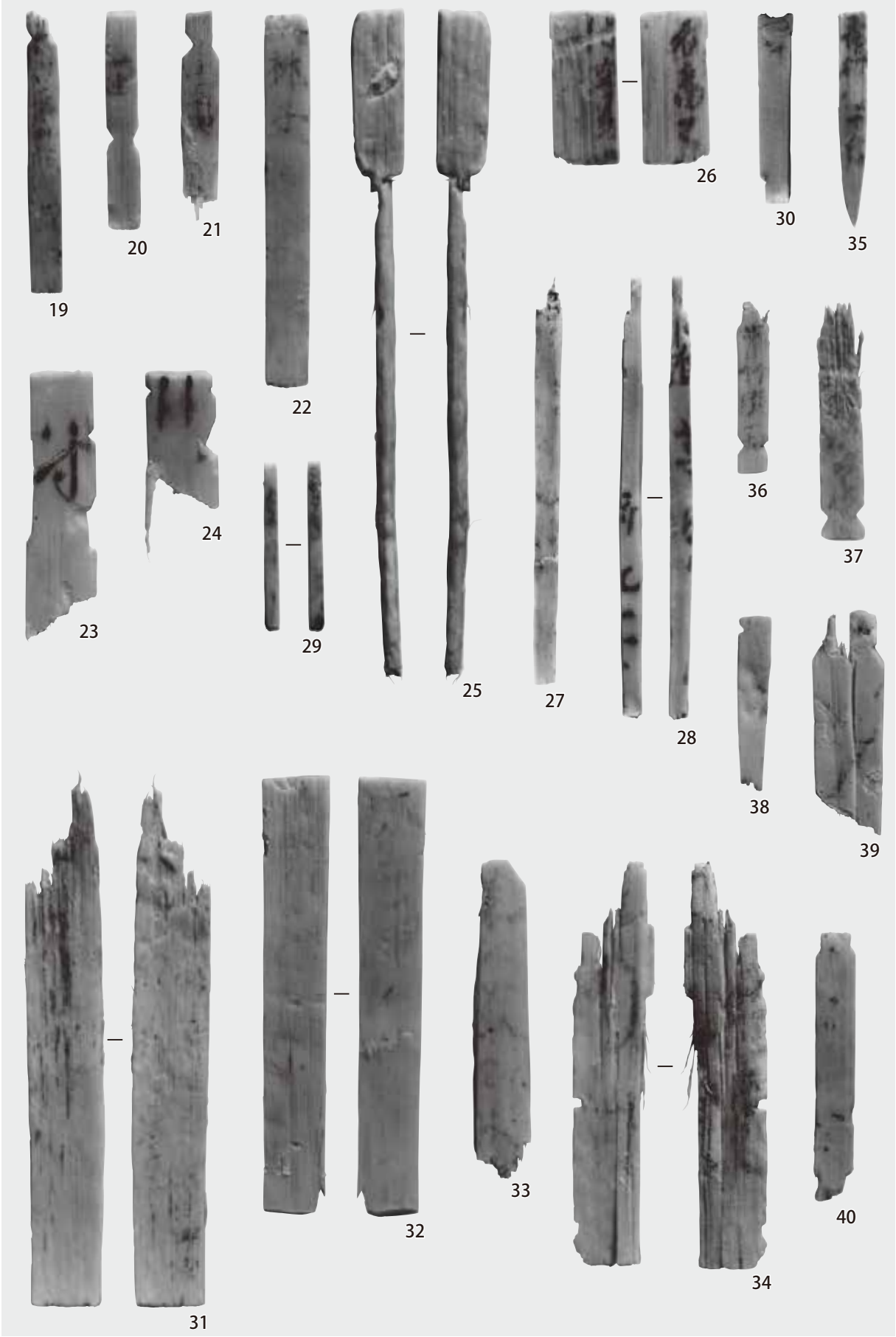
図　　版

451号土坑（SK451）遺物出土状況（南から）

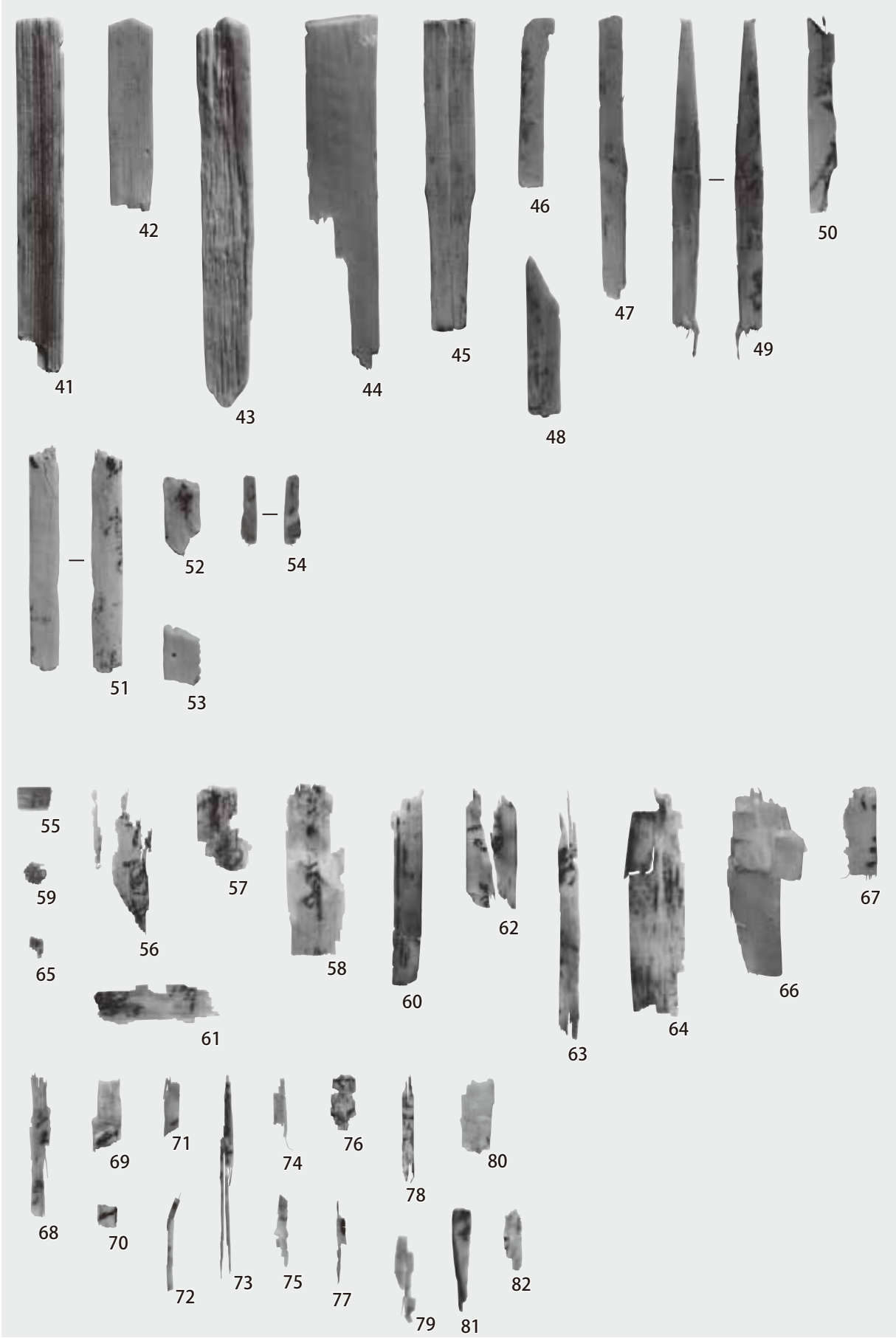
図版一　木簡（一）



図版二　木簡（二）



図版三　木簡（三）


41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82

図版四　墨書土器（一）

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

図版五　墨書土器（二）

11

16

12

17

13

18

14

19

15

20

図版六　墨書土器（三）

21

22

23

24

25

26

27

28

29

30

図版七　墨書土器（四）

31

33

32

34

35

36

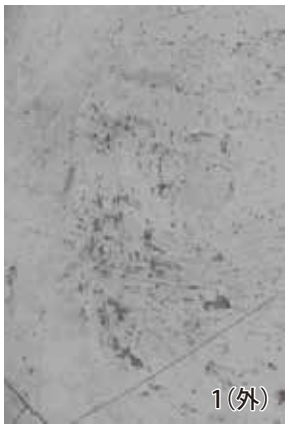
38

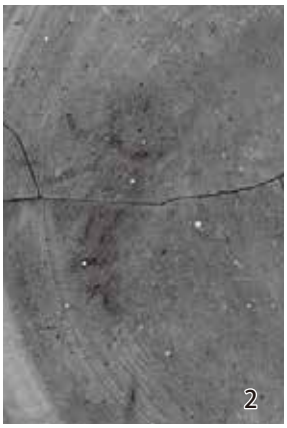
39

37

40

図版八　墨書土器（五）、墨書（一）

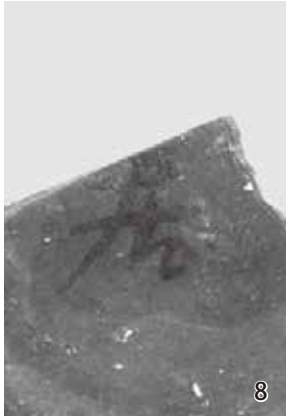




（番号は墨書土器に同じ）

図版九　墨書（二）

7


8

9

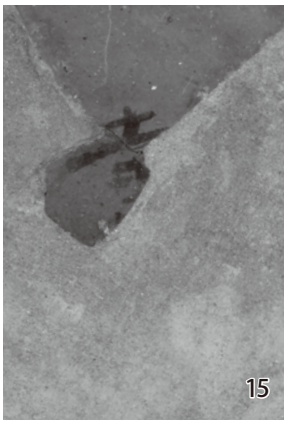
10

11

12

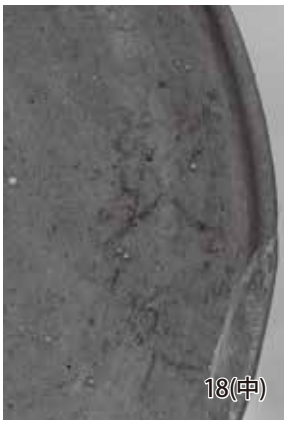
13

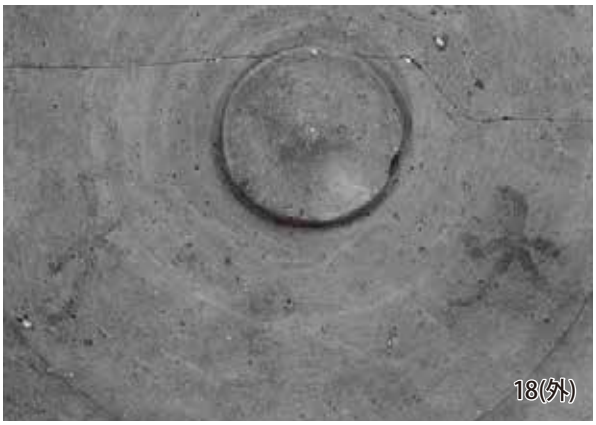
14


15

16

17


18(中)


18(外)

19

20

（番号は墨書土器に同じ）

図版十　墨書（三）

21

22

23

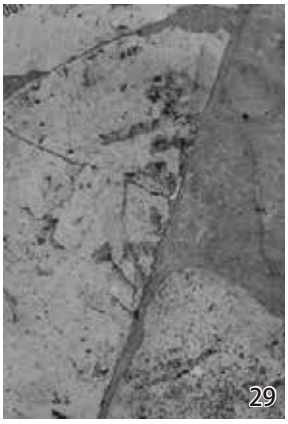
24

25

26

27

28


29

30

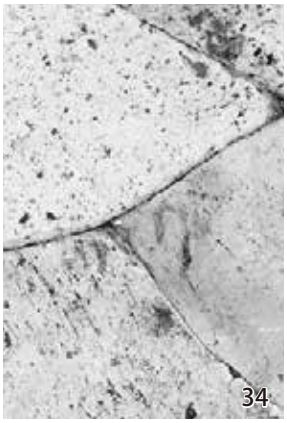
31

32

33

（番号は墨書土器に同じ）

図版十一　墨書（四）


34

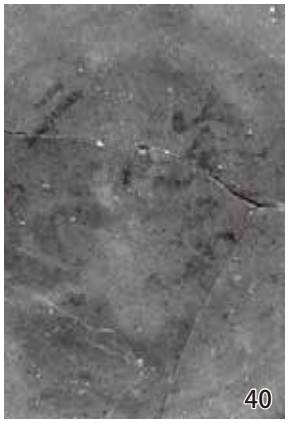
35

36

37

38

39


40

41

（番号は墨書土器に同じ）

42

図版十二　土器（須恵器二）

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

図版十三　土器（須恵器二）

11

12

13

14

15

16

17

18

19

20

図版十四　土器（須恵器三）

21

22

23

24

25

26

27

28

29

30

図版十五　土器（須恵器四）

31

32

33

34

35

36

37

38

39

40

図版十六　土器（須恵器五）

41

42

43

44

45

48

46

49

47

51

図版十七　土器（須恵器六）

50

52

53

54

55

56

図版十八　土器（須恵器七・土師器）

57

1

3

2

5

4

図版十九　土器（焼塩土器一）

1

2

3

4

5

6

7

8

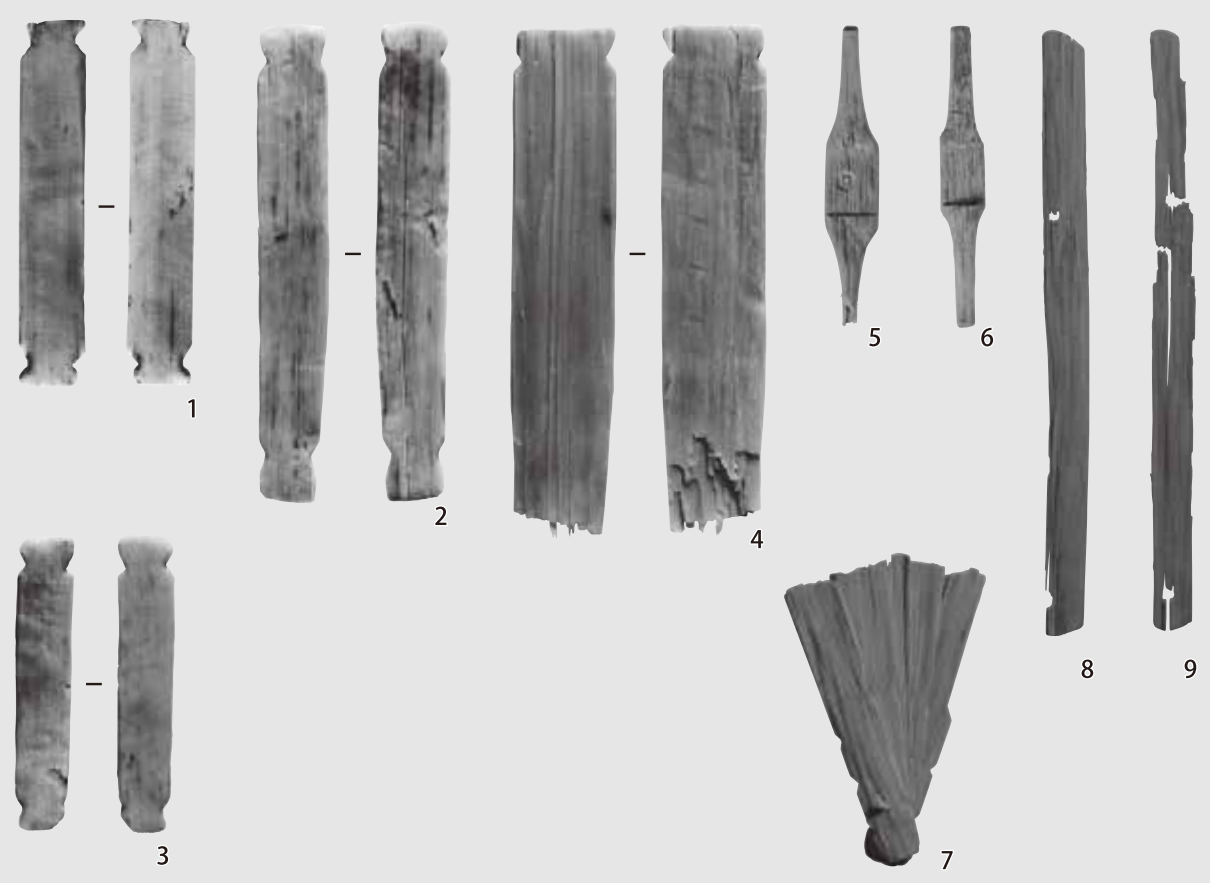
9

10

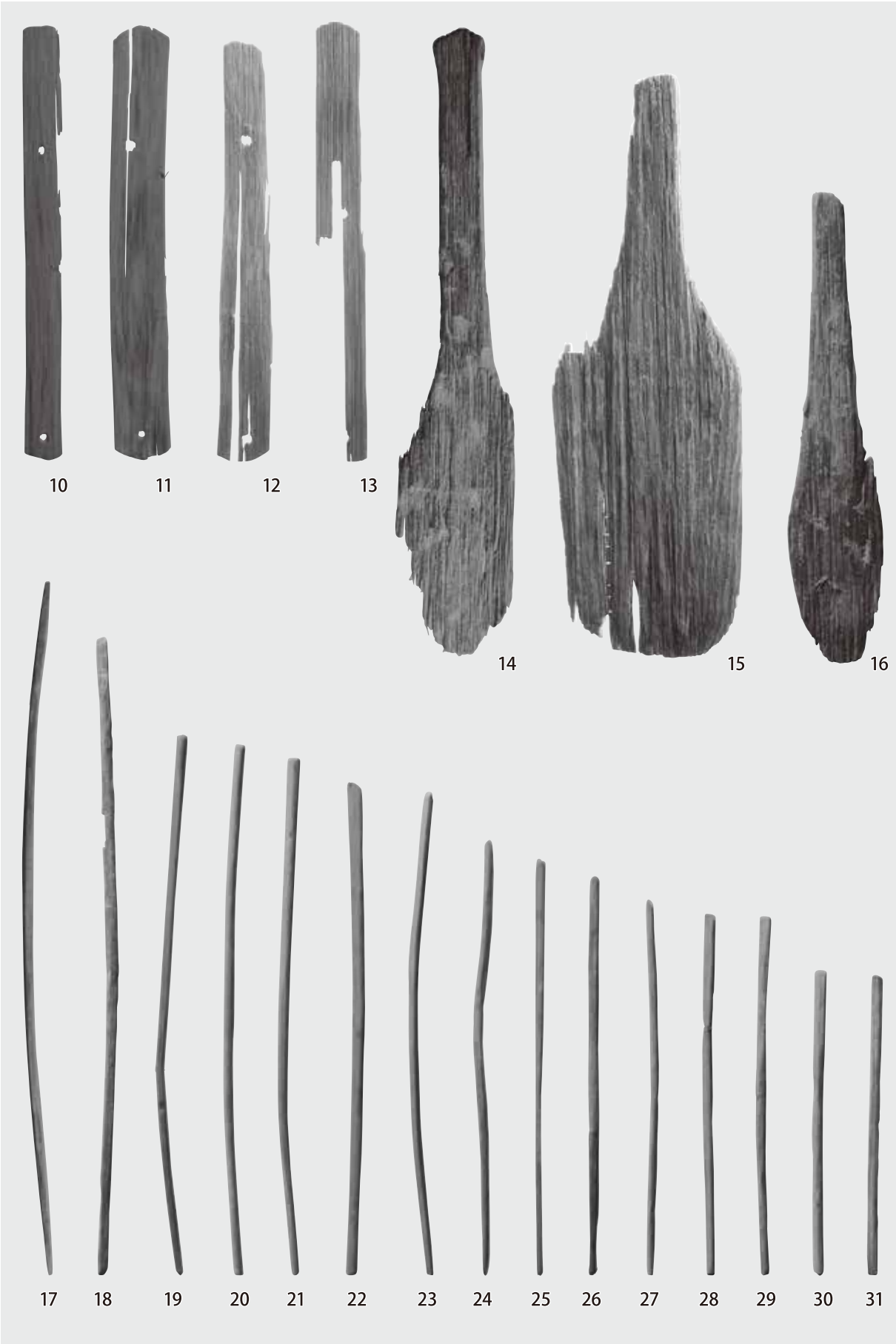
11

12

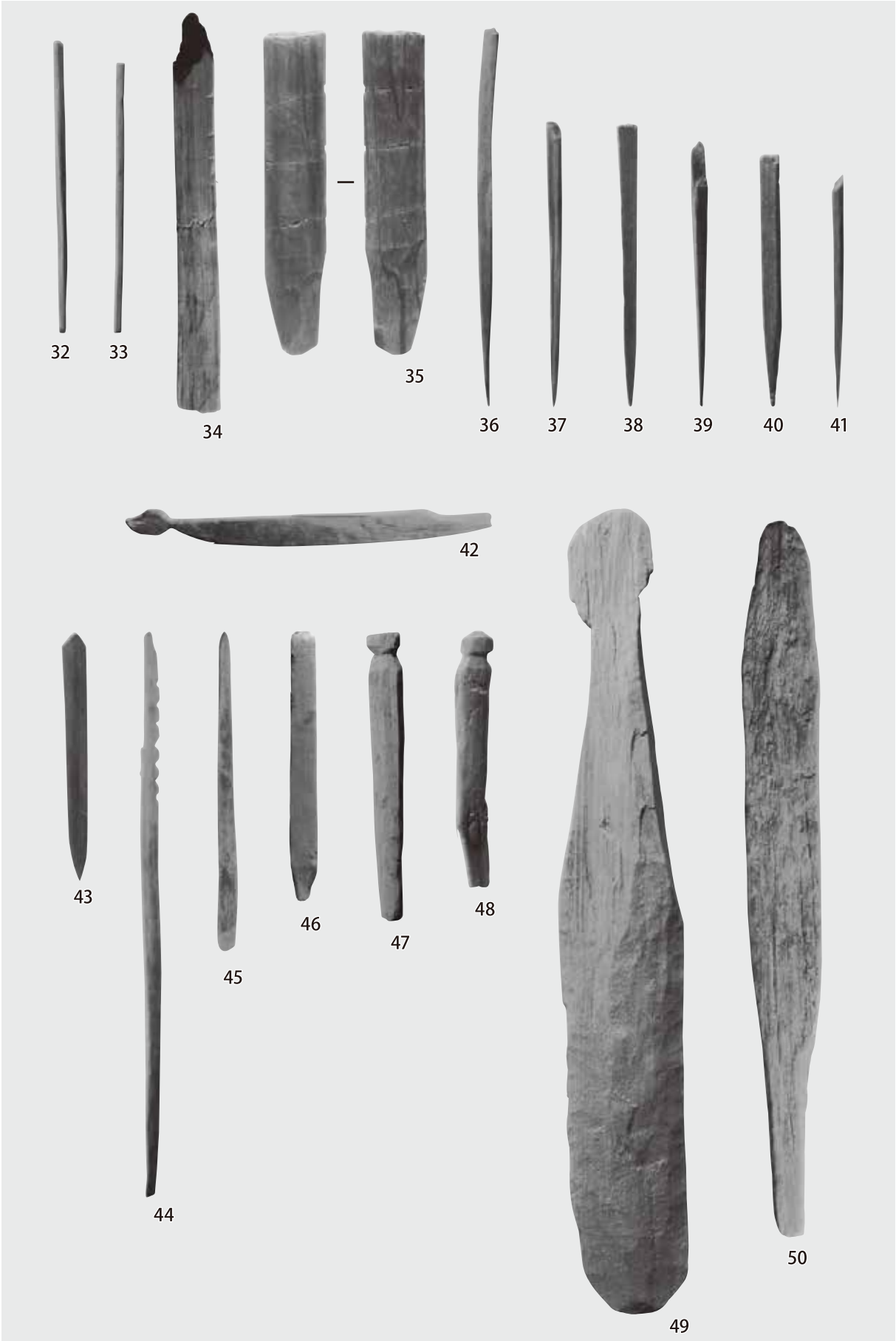
図版二十　土器（焼塩土器二）、木器・木製品一



図版二十一　木器・木製品二



図版二十二　木器・木製品三



報　告　書　抄　録

ふりがな	じゅうようこうこしりょう　あきこくぶんじあとどこうしゅつどひん
書　　名	重要考古資料　安芸国分寺跡土坑出土品
副 書 名	451 号土坑出土の法会関係資料集成
巻　　次	―
シリーズ名	東広島市教育委員会文化財調査報告書
シリーズ番号	第 66 集
編 著 者 名	妹尾周三
編 集 機 関	東広島市教育委員会（東広島市出土文化財管理センター）
所　在　地	〒739-2201　広島県東広島市河内町中河内 651 番地 7　TEL082-420-7890
発 行 機 関	東広島市教育委員会
所　在　地	〒739-8601　広島県東広島市西条栄町 8 番 29 号
発行年月日	西暦 2022 年 3 月 30 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
史跡（しせき） 安芸国分寺跡（あきこくぶんじあと）	広島県（ひろしまけん） 東広島市（ひがしひろしまし） 西条町吉行（さいじょうちょうよしゆき）	34212	国 1	35 度 25 分	132 度 45 分	20000801 ～ 20001130	1,200 ㎡	史跡整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
史跡 安芸国分寺跡	寺院跡	奈良時代	451 号土坑	木簡、墨書土器、須恵器、土師器、焼塩土器、木器・木製品	国分寺大衆院の土坑

要　　約	史跡安芸国分寺跡の史跡整備に伴う 2000 年の第 12 次調査によって検出された 451 号土坑(ＳＫ451)から出土した一括遺物の資料集成報告書である。 木簡 82 点、土器 120 点（うち、墨書土器 42 点）、木器・木製品 50 点の合計 252 点が出土し、紀年銘や墨書などから、創建後間もない国分寺において勤修されていた仏教行事（安居・斎会）の一端を具体的に示す資料として評価できるものである。

東広島市教育委員会文化財調査報告書 第66集

重要考古資料 安芸国分寺跡土坑出土品

－451号土坑出土の法会関係資料集成－

発行日　令和4(2022)年3月30日

編　集　東広島市教育委員会
（東広島市出土文化財管理センター）
〒739-2201 広島県東広島市河内町中河内651番地7

発　行　東広島市教育委員会
〒739-8601 広島県東広島市西条栄町8番29号

印　刷　有限会社アラ・アド
〒739-0022 東広島市西条町上三永1675番地